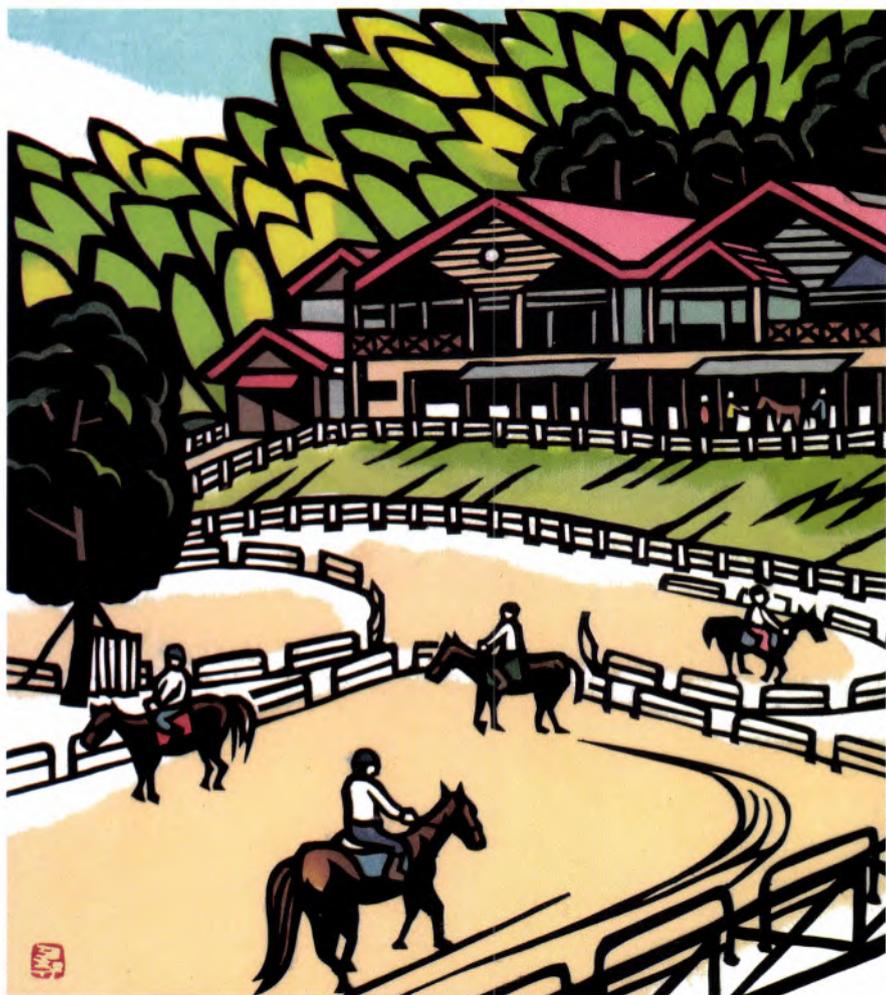


# 川柳塔

創刊大正十三年 通卷二一七号



日川協加盟

No.1117

六月号

# 第二十六回 川柳塔まつり

とき 十月三日(土)

ところ ホテル・アウィーナ大阪

◎ 詳細は5月号119頁をご覧ください。恒例によつて同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

## 残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。巻末の綴じ込み残暑見舞広告原稿台紙に原稿を貼付(又は記入)してお申込下さい。よろしくお願致します。

★個人 ①1/4頁 一口 二〇〇〇円

②1/6頁 一口 三〇〇〇円

★団体

①1/3頁 六〇〇〇円 ③2/3頁 一二〇〇〇円

②1/2頁 九〇〇〇円 ④一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十日

川柳塔社

## 新家完司川柳集(7)

# 令和元年

ご注文は、1,000円+84円切手3枚(税・送料)を  
下記宛にお送りください。

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司

# 一枚のハガキから

小島 蘭 幸

自肅生活が続く中、同級生の山内静雨君から電話がかかってきました。「麻生路郎のハガキがあるんじゃないが、いるんなら取りに來いや〜」。私はすぐに受け取りに行きました。ハガキは麻生路郎特製の写真入りでした。そこには、竹原川柳会の方裂のことを詳しく知りたい、中略、いづれにしても小生の質問に至急返事をしてもらいたい。四月十三日夜。と書いてありました。

私達同級生五人は、静雨君の勧めで川柳を始めました。竹原川柳会に入会したのは、会分裂の翌年でした。

おそらく静雨君は、会が分裂して会員が数名になつたことを父の山内静水から聞いて、私達に声をかけたのだと思います。分裂がなければ今の私はなかつたのです。川柳との不思議な縁を思い出させてくれた一枚のハガキでした。

ハガキはフェルアルバムに保護フィルムでピタッ

と貼りつけてありました。

ハガキは他にもありましたので少し紹介致します。

屠蘇酌んで我も遊ばん華胥の国

葭乃

賀状三句の中の一句です。

白芽えて神経質をのぞかれる

白柳

清水白柳氏は、会が分裂してから、たけはらゝの作句教室を担当されました。

ハワイ・ホノルル・アラモアナホテルにて

菊沢小松園、すみ子

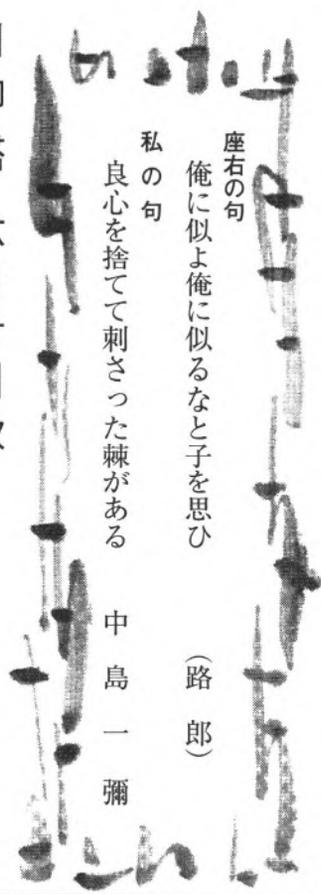
菊沢小松園氏は、白柳氏亡きあと、作句教室を担当されました。竹原の川柳大会で白柳氏に届けとばかり天に向かって披露されました。

失った何かを求めて一人旅

季 賛

五十歳の若さで亡くなった山田季賛氏の写真が二枚貼ってありました。季賛氏の一周忌法要記念句会は竹原市の照蓮寺で開催されました。

石原青竜刀、相元紋太、北川春巢、磯野いさむ、東野大八、高鷲亜鈍、直原玉青等々、表書きを楽しむことが出来ました。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

良心を捨てて刺さった棘がある

中島一彌

## 川柳塔 六月号目次

■巻頭言 一枚のハガキから……………小島蘭幸……………(1)  
題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「服部緑地乗馬クラブ」

危機感……………平井美智子……………(2)

川柳塔(同人吟)……………小島蘭幸選……………(4)

川柳塔の川柳讃歌<sup>⑧</sup>……………木津川 計……………(40)

橘高薫風句抄……………(41)

自選集……………(42)

句集の森……………浜田久米雄……………(45)

温故知新……………(45)

水煙抄……………川上大輪選……………(46)

俳風柳多留一二篇研究 84……………(64)

愛染帖……………新家完司選……………(66)

檸檬抄「文房具」……………水野黒兎・嶋谷瑠美子共選……………(70)

## 危機感

平井美智子

正直言ってコロナウイルスを軽く見ていた。「四月頃には収まるよね」とビール片手に柳論を戦わせていた二月末。

ところが、三月四月とウイルスの勢いは留まることを知らず、五月六月の句会、大会も続々と中止に追い込まれた。

筆者もやっと危機感に目覚め、完全自宅待機中であるが、月の半分位を句会行脚していた柳友たちの顔が浮かんでくる。

最近ではWEB句会をはじめ、誌上大会が花盛りである。会員が高齢化したり減少したりする中、誌上大会だとスタツフが少なくて済む上に、会場を押さえる必要が無いので出席者数の把握に悩むこともなく収支的にも安定するのであろう。今回、各句会や大会が中止になる中で誌上大会が俄然、脚光を浴びてきた。

筆者も幾つか参加させてもらった。自宅に居ながらにして投句ができ、きちんとした発表誌も送られてくる。郵便が届くところであればどこからでも参加でき

一路集	「ゆるゆる」	山下凱柳選	74
「幸い」	田中ゆみ子選	75	
■エッセー (大阪を再び文学都市に)	木津川 計	76	
英語 de Seiryu	吉村侑久代	77	
初歩教室「スポーツ」	居谷真理子	78	
川柳塔鑑賞	石橋 芳山	80	
水煙抄鑑賞	大久保真澄	82	
せんりゆう飛行船	新家 完司	83	
『麻生路郎読本』余滴	乗原道夫	84	
インスピレーション・ナビ	大西 泰世	86	
印象吟	岩崎眞里子	88	
■エッセー (ひとひらを力に)	各地柳壇 (佳句地十選 / 伊達 郁夫・古今堂蕉子)	90	
六月各地句会案内	朱夏・勝弘	96	
■編集後記 (ひとこと / 黒目ひでお)		98	

座右の句

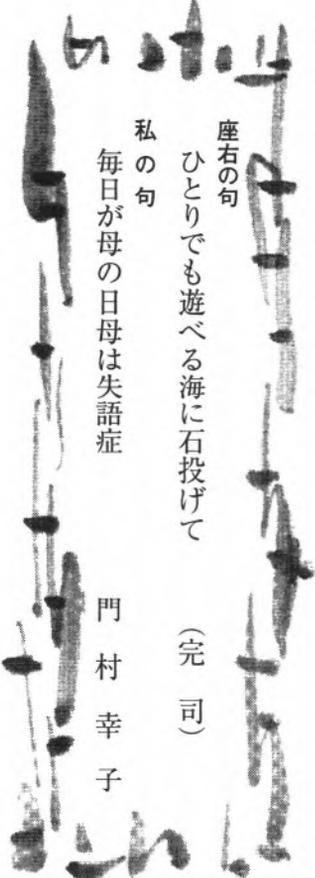
ひとりでも遊べる海に石投げて

(完 司)

私の句

毎日が母の日母は失語症

門 村 幸 子



るので参加者の層も厚い。  
だが、何となく物足りないのである。(座  
の文学)の流れを組む川柳は、やはり句  
会や大会という形で柳友の元気な顔に出  
合うのも一つの楽しみなのであろう。

つい最近、時実新子の書籍の中に左記  
のような興味深い一文を見つけた。

危機感。これは全く本能的といっても  
いい私の、文芸全般への希求である。生  
物のすべてがこの危機感を喪失したらど  
うであろうか。地球上は忽ちにして怠惰  
の海、たとえば猫はあの敏捷性を失い、  
目は糸の如く退化するであろう。花は手  
折られ倒される危機ゆえに美しく咲き、  
虫は危機の瞬時を縫って種族保存に鳴く  
のである。まして人間、生そのものへの  
危機感が愛を生み育てる。もし危機がな  
く永遠の生命が与えられたりしたら、そ  
れはもう見るも無残な悪行の巢である。  
まして、川柳、それは心のカットである。  
その切り口に血も滴らぬ鮮やかな緊張の  
危機感を見せずして、何の一句ぞ・・・。

(時実新子・六つの気球より)



小島蘭幸選

堺市 内藤 憲彦

背伸びして子がいつぱしの世辞を言う

ほどほどのところで転ぶ生き上手

次の朝名前出てくる脳回路

一足す一がやつと二になる夫婦の和

初出勤ガッツポーズを一つして

濃厚接触が子育ての基本

松江市 石橋 芳山

難しい所に君が止まってる

もちろんが並ぶ自己満足の森

白切ったままで見詰める真正面

身の置き場なくて急須の蓋になる

ケーキから走り出てくるエイトマン

空っぽの心にされてから久し

檀原市 居谷 真理子

四月という心優しい大男

ぶらんことソメイヨシノとあんパンと

まだ君は夢を煮つめているのかい

もう土に愛してもらえない素足

余生たるこの身につけているマスク

五月だね吹奏楽部なんだよね

河内長野市 山岡 富美子

臆でも人は明日へノックする

通勤車めげない戦士達の群れ

溜息をマスクの中でそつと吐く

地球儀は一つとコロナ嘔いた

ひそやかにことしの花は咲いて散る

持久戦それより他に策はない

米子市 成田 雨奇

俺は今右肩下がりでだと思ふ

コロナではないと断りくしゃみする

妄想が好きでなかなか句が出来ぬ

病名は帰宅本能欠落症

妻なぜか左袖から着せたがる

がっかりはしない自分を知っている

和歌山市 古久保 和子

踏ん切りのついた手紙の楷書体  
人生のところに貼る付箋  
にんげんも少しざらつく方が裏  
胃もたれのする新聞を朝っぱら  
身辺整理まず本箱のへそくりを  
スイッチの切れた日よう日の私

大阪市 谷 口 義

何とかなる孫の座右の銘である  
智恵の輪から出て行ったのがマイナンパー  
面白かったのは六十代だった  
残った残った無観客角力

まあ何となく腕組みしたりもして  
童顔の大関風を呼んでいる

西予市 黒 田 茂 代

わたしのサブリ庭の花の香花の彩  
終活の一つ手離す娘のピアノ  
五十年過ぎたピアノいざさらば  
ピアノの消えた応接間も心も寒い  
これが最後と思う障子を貼り替える  
ひからびた心にバラードが重い

箕面市 中 山 春 代

私の標準木が開花する  
自粛じしゅく一万本のチューリップ  
「マスク完売」貼り紙の角めくれてる

花買って帰るコロナに沈む街

パブリカの歌がしぼんで行く余寒  
キャンセルで汚れる壁のカレンダー

大阪市 古今堂 蕉子

コロナ禍にスーパームーンたじろがず  
申団子良い人なんているのかな

静かだな桜は何も知らぬまま  
好きだった筈あなた召し上れ

影もなく音もなく寄る敵のあり  
順番がきたが売り切れましたとさ

悲しみをこらえなさいと桜さく

米子市 吉 田 陽 子

伝えたいことまだありコロナ立ち去らず  
心二つが寄り添う今日の春うらら

自分のために割るくす玉が見つからず  
そろばんを弾くと暮らしにくくなる

緊急事態宣言神仏も絶句

外は雨思い出してはならぬ方

大阪市 栃 尾 奏 子

クレッシエンドもう会わないと決めたのに  
泣き尽くし窓辺の紫陽花は赤に

真二ツになれば半分ワタクシに  
花束は時に決意を揺るがせる

嗚呼きみはラムネの瓶のビー玉だ

三田市 堀 正和

菜の花を見る会ちゃんどやりました

咳しても誰も心配してくれず

自粛してテレビで世界旅行する

お互いに悪友と呼ぶ友が居る

騒がしい見舞客だと叱られる

今のうち言っておこうかアリガトウ

寝屋川市 伊 達 郁 夫

迷ってる指にトンボが止まらない

子供の目蟻の凄さを知っている

落陽に夢を点滅して生きる

美しい錯覚のまま幕降りる

故郷の風が裸にしてくれる

恋成就やつと卵が立ちました

横浜市 川 島 良 子

人間が動くとうイルスが動く

令和が走るコロナウイルスが走る

卒業祝い入学祝い別らしい

知らぬこと知らぬと言えば済む話

「ホーホケキョ」びつくりさせた春の雪

国会中継マスクは足りているらしい

東大阪市 西 村 哲 夫

いざ行かんいつまで続く漫ろ言

車椅子押してくれるは嫁でなし

餓餽道の究極見たぞ冷蔵庫

行き着かぬ道だ最初にもどろうか

断捨離もできない何もない部屋だ

パンデミック非戦と非核和の文字と

大阪市 小 野 雅 美

わたくしの桜空から見えますか

孤独なら辞書の範囲を越えました

見守ってくださいい遺影撫でながら

深入りはするなと神のホイッスル

目標をどんどん下げて生きてみる

外出とついでに酒も自粛する

三原市 鴨 田 昭 紀

原点に戻る母の塩むすび

踏み台にされて大事にされている

点滅を始めた老いの信号機

職退いて存在感のない背中

宮仕え終えて気ままな奴隷

躓いた石と昔を語り合う

岡山市 丹 下 凱 夫

魍魎魍魎という厄介なものがいる

満開のサクラの下に蒲団干す

満開のサクラの上に鯉のぼり

長閑さはウグイスの鳴く三丁目

手洗いが上手になった八十歳

春風になつて出歩きたいのだが

西宮市 西口 いわゑ

テレビからお花見も好い指定席  
チューリップ春を合唱してくれる  
白木蓮また会えましたありがとうございます  
散歩する顔いっぱいマスクして  
この辺で自分認めることにする  
咲いて散るしきたり神に教えられ

和歌山市 松原 寿子

命とや宇宙に抱かれ生き延びる  
寄り添える今大切な輪に和む  
お喋りにさせてくれたは花畑  
生きる術免許更新しておこう  
文通を重ねた昭和振り返る  
深呼吸胸のあたりに春匂う

高槻市 松岡 篤

コロナ禍で疑心暗鬼の通勤車  
手洗いの手順を孫に教えられ  
スケジュールコロナに消され何も無い  
外で飲みコロナにしっぺ返しされ  
コロナ禍で妻に散髪してもらい  
ハチ公のマスク愛嬌では済まぬ

西宮市 亀岡 哲子

春だものもやもやばかりしておれぬ  
グルメではないがおいしいものは好き  
へたつてはならぬここまで来た命

嫁さんのスマホを頼り生きている  
ペランダで花びら浴びるストレッチ  
戦争を知らぬ世代へ降るコロナ

奈良市 加藤 江里子

試練の春また会う日まで自粛する  
エイプリルフルコロナが邪魔をする  
コロナ疲れ猫の躰にほっとする  
マスクして目力強き人が増え  
鉛筆を走らせ五感研ぎ澄ます  
桜咲く地球は変わりなく在れと

香芝市 山下 純子

見る人も無い廃村の山桜  
愛でられず涙のように桜散る  
実家には娘に戻る椅子がある  
癩だけど憎まれ口に惚れました  
桜咲くあなたはどこで観ているの  
BGMは妻のおしゃべり晚ごはん

鳥取市 永原 昌鼓

寂しいね我が家の柱すでに折れ  
先場所の勝利まぐれか徳勝龍  
褒められて伸びる子今にチャンピオン  
本物だ負けて話題になる選手  
ふる里でトイレを借りる道の駅  
誰も来ぬ柱の折れた侘住まい

世界中敵はコロナと言う戦

富山市 島

ひかる

コロナなど無縁と思うのが怖い

さくら散るコロナコロナを道連れに

新大関コロナで暗い世を湧かす

高齢になって夫婦だなど思う

可児市

板山 まみ子

目覚めたら近くにコロナいる恐怖

自宅待機は懲役刑に似てる

買いおきの食糧底をつく不安

東京へ転勤の子の無事祈る

強がりとは通用しないマスク付け

愛知県

早川 遡行

久方の電話に勇気付けられる

順番という班長を任される

懼つたら諦めるしかないコロナ

人の顔見たら細菌だと思え

独り酒ますます頑固になった老い

大山市

金子 美千代

世界中コロナ一色つくし摘む

大声でお経唱えるとじこもり

巣籠りの日々持て余すスクワット

コロナ禍の今こそ世界手を繋げ

しつかりとせよと言つてるような風

ウイルスを逆手にとつて大掃除

若者が言うこと聞かぬ民主々義

ピチピチの肌で巢立ちの孫娘

日本沈没映画のようにしたくない

チューリップあげたい人の指を折り

鈴鹿市

小河 柳女

雨の日は雨だれ聞いて楽しみり

やがて一人夢の続きを編むだろう

病院の外は異界のようである

お帰りとほこほこ芋が待つていた

天に礼今日一日の始まりです

京都市

清水 英旺

コロナ菌ヒトの危うさあぶり出す

コロナ菌に恨み辛みの長電話

不吉なりお役所からの茶封筒

如意ヶ岳比叡仰いでウォーキング

カミサンの仕入れたニュース役に立つ

京都市

藤井 文代

軍事力では屈服しないコロナ菌

ひとりほっちバランスくれる甘い物

薬の効果と害のバランス知るが飲む

夫婦喧嘩もバランス保つたためにある

夕焼けの色で囲んだ明日の夢

長岡京市 山田葉子

満開の桜黙って散ってゆく  
快晴にきりしまつじ名乗り上げ  
多すぎる情報チェックしきれない  
収まるのをひたすら待っているコロナ  
一人のランチちよつと豪華に盛りつける

八幡市 今井万紗子

つかず離れずこれも名案寂しいね  
友が縫った派手目のマスク温かい  
不要不急避けて通れぬ孫の世話  
じいちゃんとする尻取り遊びもう飽きた  
ガラス越しの義母の笑顔が切なくて

大阪府 米澤俣子

戦無き平和に突如見えぬ敵  
いつからか自分に甘くなっている  
まる三月電車とバスに乗っていない  
アスクレピオス抑え給え新ウイルス  
年金で暮らせる日々のありがたさ

大阪市 磯島福貴子

一幅の絵春日に遊ぶ花と蝶  
テレビ電話顔見て安堵子や孫と  
さて今日も検温日課コロナ禍で  
自粛自粛ここが我慢の正念場  
公園を賑わす子等も皆マスク

大阪市 岩崎玲子

日課です血圧計とコンビ組み  
ストレッチ欲ばらずする続けてる  
夫から子そして孫ともつないだ手  
人さんの句でちと磨く脳の錆  
日替りでころろに一つ花咲かす

大阪市 内田志津子

アルプスに挑んだ靴が捨てられぬ  
綻んだ穴は二人の愛で縫う  
20年芸歴あつてまだ前座  
形から入った趣味は頓挫する  
コロナウイルスゾンビの顔で迫りくる

大阪市 宇都満知子

看護師の嫁黙然と使命感  
ちまちまとマスク作りにミシン踏む  
閉塞感ふつふつと出かけたくなる  
三千歩マスクで二人神社まで  
こんなことでもいいのか午後のほんやり

大阪市 江島谷勝弘

今のうち用意しとこかい遺影  
休校でどつと来ました孫五人  
五歳児がパブリカを口遊んでる  
安いハズ賞味期限が迫ってた  
ベッドにもイスにもなれるボール紙

大阪市 榎 本日の出

焼芋を囲んで笑ういい友よ  
冷蔵庫半額品に占拠され  
化粧品集めているが使わない  
側に居てくれよと言った人が先に逝き  
後世に残す言葉を探して

大阪市 榎 本舞夢

春三月友の夢見て目が覚める  
見舞にと出る直前に死の知らせ  
グルーブに抜け駆けしたと叱られる  
平常心戻り気付いた五七五  
締切り日過ぎてた投句諦める

大阪市 大川 桃花

政治家の厚顔きつと鰐の皮  
コロナ戦争ヒト科の覚悟問われてる  
一挙兩得狙うと損の倍返し  
ご飯粒零すも拾うも独りなり  
盆栽に名前を付けてかわいがる

大阪市 大治 重信

單車置き土手を枕に若柳  
客帰り待ってたように花は散り  
雀きて花動かしてレンジ窓  
泣きながら甘えた声で母の膝  
泣きごとが酒と出合ってバーの隅

大阪市 奥村 五月

比率ではコロナに負ける宝クジ  
爺の見え孫に重たいランドセル  
スポーツも花見も止めるコロナ菌  
二千万無いが惚けずに生きている  
コロナ菌離れて話困る耳

大阪市 笠嶋 惠美

見目よりも動いてやさし私の手  
黄蝶を見つけて散歩スキップも  
コロナウイルスどこ吹く風と桜咲く  
毎日がコロナコロナでああしんど  
難儀やな財布忘れてスーバーへ

大阪市 金川 宣子

新しい今日という日を楽しもう  
足止めを食らって暇を持て余し  
天国も地獄も知った船の旅  
嬰兒の鼓動を確と抱きしめる  
何度でも効くまで入る美人の湯

大阪市 川端 一步

風鎮が今日の惨事を告げていた  
いい話も間隔おいて友と酒  
贅沢な旅して菌を持ち帰り  
好きな人鏡の奥にそっと居る  
民の声耳を澄ませば天の声

大阪市 近藤 正

改ざんを強いられ無念つづる遺書  
内視鏡すすみ癌などチョロいもの  
トイレまで点滴棒を引きずって

痛術後点滴三日粥三日  
本気度はマスク二枚で見透かされ

大阪市 坂 裕之

心配をしだすとみんな怖くなる  
余ってたものが役立つ事もある

何時までか期限切ってよこの自肅  
人まばら自肅の町を走り抜け

お花見はテレビの画面一人酒

大阪市 高杉 力

マスクしてマスクの列に並ぶ朝  
コロナ菌付度かいざん吹き飛ばし

AIが従順なもの今のうち  
ステイホーム家には俺の居場所ない  
犬友とワンちゃん抜きで呑んでいる

大阪市 高杉 千歩

同じ字に迷う不思議な九十四  
取捨選択時間ありすぎ捗らず

コロナ旋風気にもならない九十四  
コロナ旋風どこ吹く風や九十四

休業要請新語聞いてる九十四

大阪市 田中 廣子

桜愛で池をまわってひとひねり  
幸いに志望校にてVサイン  
お迎えがじわりそこまで近くなり

川柳で仲間がふえて夢のよう  
友が逝き淋しさつのる老いの坂

大阪市 田中 ゆみ子

今年の桜途方にくれる春の穴  
コロナ禍にも揺るがぬたんぼの自信  
ライバル視されて嬉しいプレッシャー

春風に似合う笑顔で会いたいな  
つき離す愛情もあり葱坊主

大阪市 津村 志華子

逆らわずただ蕩々と母の河  
陽の恵み六月芋の子沢山

花満開ひとりぼっちの誕生日  
自我流で漕いだ舟ですオンボロロ  
銀河まで乗せてください花筏

大阪市 寺井 弘子

一年生カバンの中は皆笑顔  
コロナ風邪幻になる春の旅

ポケットに笑い袋とエコ袋  
血の通う五官が春を研ぎ澄ます  
灯台と信じ点滴見詰めてる

大阪市 寺本 実

カラオケでノイズのような歌を聞く  
満開の桜の下をマスクして  
去る人は去れと今では一人きり  
猫だけが自粛をしない春の夜  
また句会言われてみたい春なかば

大阪市 中井 萌

未来からメッセージ聞く糸電話  
ウイルスにリベンジ誓う閉古鳥  
息子等の気遣い嬉しこそばゆし  
人間の不安をよそに春よ春  
気が沈むせめてお日様うららかに

大阪市 原田 すみ子

あくまでもコロナ対策食べて寝る  
コロナニュース見ても見んでも湧く不安  
安全安心コロナに襲われる  
誰も居ぬ桜並木を焼き付ける  
独りの音独りのゴミを出し暮らす

大阪市 平井 美智子

たんぼぼの黄色で覆い隠す傷  
道端のカラスに声をかけている  
母だから泣かないのです子は二人  
大丈夫だよと静かな声がする  
再びを信じて散ってゆく桜

大阪市 平賀 国和

春の馳走奈良の古道のつくしんぼ  
堀越しに造幣局の桜見る  
対コロナ長期戦だと覚悟する  
積ん読を崩すチャンスか自粛の日  
コロナなどに負けず育てと鯉のぼり

大阪市 藤田 武人

恥ずかしい夢堂々と語る僕  
テレワークしても出勤印を押す  
水アメが買えず遠目の紙芝居  
定年が延びてため息出る家内  
還暦を前にひとつの習い事

大阪市 宮崎 シマ子

夢心地の六時にカーテン開けに来る  
お家でもこんなに不味いのか調理師よ  
不味い食事黙って口に車椅子  
夕食からの夜長何して過ごす老い  
ホームに入りつくづく自由欲しくなり

大阪市 山本 加お里

開店まで二時間並びマスク買う  
訃報聞き三密守り行けません  
祈るより手立て知らない私です  
丁寧に生きる命が果てるまで  
合掌のかたちになってありがと

大阪市 横山 里子

辛くとも生きるしかなし瘡手術

リハビリに家事が効くよと煽てられ

指の隙間から出ていった幸せ

一応は香典持つて行く葬儀

鮎だけやないでおばちゃんのパケット

大阪市 若本 安代

自粛ムード桜も遠慮がちに咲く

ストレスはどこへも行けず誘われず

占いに夢書き足して散歩する

人恋し散歩ひとりがお淋し

風になり明かりになつて君のそば

堺市 奥時 雄

ほんまやな広かつたんや御堂筋

お上から昼寝しとけと御指示あり

年寄りをいじめに来たかウイルスめ

就職の孫に助言もできぬまま

まさかまさかの鎖国の世の再来

堺市 柿花 和夫

おやじギヤグも言えて常連客となる

コロナ禍のشناックで聞くママの愚痴

マスクより方舟が要るウイルス禍

寄り道の味を知らない蟻の列

したたかに閉じることなし水中花

堺市 源田 八千代

斯くなるとは予想だにせぬ新年度

声聴いて元氣貰うと言うてくれ

春愁はコロナショックに尽きる日日

雑草も抜いてるうちは気が紛れ

限定の鎖国にすれば終息か

堺市 齋藤 さくら

その内に思えぬコロナやるせない

会釈してお互いマスクあんだ誰

老人と言われる年になつている

喧嘩するほどの体力持つてない

おとなしくしてますコロナ去るまでは

堺市 坂上 淳司

エンディングノート机上で白いまま

遺言と書き出したまま以下余白

悔しいが碁敵は白僕は黒

白イチゴ甘い赤い味が無い

夫婦喧嘩白旗上げるのは私

堺市 澤井 敏治

核よりも怖いコロナという兵器

被害より加害防止のマスクする

回り道損だと決めることはない

午前五時人目を避けて見るさくら

握手ハグよりもお辞儀という礼儀

堺市 遠山 唯教

老いてなお攻めの暮しを忘れない

苦勞性支え合いつつ分かち合う

思ひ出が褪せることなく甦る

不安な老いさいなまれても挫けない

花冷えに二人で鍋をつつく宵

堺市 矢倉 五月

昼食を忘れてしまふ長電話

泣かないで留守を頼むとワンコイン

男ならマタニティー見て拝むべし

散歩友達ベビーカーには老犬が

若いスター同じに見えて名が出ない

池田市 太田 省三

とび職の父がホームでモテている

五杯目はライムとレモン分らない

口々にいつ死んでもと老人会

卒業式恋の火種がまだ残る

迷走の果てに中止のクラス会

貝塚市 石田 ひろ子

主婦業の卒業これからが佳境

ほうっとして時どき充電しています

ささやかな喜び生きるエッセンス

訳ありのりんご見栄切るリンゴジャム

手作りのマスク転地の子に送る

河内長野市 大島 ともこ

ハンドケアゆるり心もときほぐす

孫誕生膨らみ過ぎた祝い金

古里が顔を見せよと夢に出る

活躍が過ぎて育ジイ疲れ気味

おっとりといらちで隙間埋めている

河内長野市 梶原 弘光

冗談はさておき国の一大事

捨てるのに躊躇かすった億のくじ

冗談を真に受け走り続けていた

朝ドラがハッピーエンドでなかった

しょうもないモンに拘る形見分け

河内長野市 木見谷 孝代

スケジュールすべてコロナに潰される

朝は描き昼は畑で夕散歩

お茶しよう気軽に言えぬもどかしさ

独り居のライン電話の長話

うきうきと歛取る軍手土香る

河内長野市 黒岩 靖博

ママチャリが世界を制覇超人気

技術国原発惨事摩訶不思議

幸不幸心が決める弥次郎兵衛

幸一番金か愛かな健康か

無位無官正義つらぬくグレタさん

河内長野市 辻村ヒロ

言い訳がとても上手に溢れ出る

デイの日は早起きできる身勝手さ

久久に手作りマスクミシン踏む

可愛い婆ちゃんでいるころさし

大小の錠剤ならべ生きている

河内長野市 中島一彌

風まかせひらりふわりと春の蝶

さあ帰ろう雨の匂いのする畑

南天の実の熟れ頃を知るメジロ

会えぬ母コロナ自粛の重い春

甘夏の皮剥く妻の小さき手

河内長野市 藤塚克三

指折って百まで数えたい余生

心の隅に若き日のゴミ秘めている

神棚に鉛筆供え匂を捻る

飼い犬も妻より俺を下と見る

素面では隠しきれないこの無念

河内長野市 村上直樹

雑草のまま雑草らしく生きて来た

サクラの咲いた孫と背伸びのハイタツチ

もぐら叩きヒト科を脅すウイルス禍

冗談のように主治医のガン告知

生けとし生けるみんな綺麗でみんな好き

河内長野市 森田旅人

幼子にきれいと言われ花の舞い

花の名はチューリップだけ言えた父

病む夫に春が来たよと紋黄蝶

蝶が来た花が咲いたと話す幸

世界はひとつやつとわかったかとコロナ

河内長野市 山室光弘

喜んでもらう喜びボランテニア

簡単に出来てた事が今出来ぬ

ありがとう言葉に出せば出る元氣

百歳時代支える人が居る社会

支え合いのサイクル回し見る未来

岸和田市 岩佐ダン吉

会うたびに夢を語っている傘寿

廃線が延び星光るふる里よ

しっかりと五弁を抱いて散る椿

踏み絵だと思いがひとり手を上げる

聞き上手ただそれだけでいいだろう

岸和田市 宮野みつ江

コロナめに春の遊びをもつてかれ

ウイルスへの不安恐怖へと変る

春風に心の縄れ解かれる

朝掘りの筍届く午前九時

初物の水茄子浅漬けで旨し

岸和田市 雪 本 珠子

貴方とはめぐり逢うのが遅すぎた  
幸運の女神がやっと振り向いた  
ありがたい言葉が耳に心地よい  
褒め言葉だけでは人は育たない  
娘が逝って悲しみ癒す旅に出る

四條畷市 吉 岡 修

百歳は仏と医者に托しとこ  
しめ込みになると鬼にも負けぬ面  
税務署は何十年もパスして  
期待した一票だったのに空し  
燃料はこの魂だまだ飛べる

吹田市 太 田 昭

介護二でも川柳詠めるこの至福  
蟻の列が軍歌うたえば凄かろう  
新型コロナ東京五輪遠ざける  
国会中継横に見ながら飯を喰い  
冬眠から覚めぬニホンを叩き割る

吹田市 野 下 之 男

新型コロナウイルスなんだろう  
近寄るな普通のカゼと違うんだ  
観客はいないが力は出てる  
ブルベンの勇士はいつも勇士だ  
かべにつるすかぶとの絵見て元氣だせ

高槻市 片 山 かずお

新型コロナ句会中止を流行らせる  
流行りもの好きだがコロナだけはイヤ  
生活の知恵で低姿勢で生きる  
気がつくアレ摺り足になつて  
脳細胞が減った気がする昨日今日

高槻市 島 田 千鶴子

我慢してスマホ動画でする花見  
後期ですさてこれからと策を練る  
集合写真いつも後方左寄り  
癩の種花にも実にもなれませんが  
ピンヒール履いて転んだ過去がある

高槻市 初 代 正 彦

今はただ悪魔に耐えているマスク  
散歩だけはベットのようになかせない  
苦勞人だろ穏やかな語り口  
オンライン句会もいづれ要るのかも  
コロナ籠り今断捨離のチャンスです

高槻市 杉 本 義 昭

運不運神のいたずら紙一重  
無防備の街を覗いているカメラ  
マニユアルにない客が来て身構える  
しくじった昔話に座が溶ける  
外出自粛散歩するしかない夫婦

高槻市 富田美義

あの笑顔カラクリだったいま気付き

あの彼の呪文一つで燃える日々

80億いても味方は一人です

決裂になると指輪は知っていた

あの時のハートはとて華奢だった

高槻市 富田保子

物事を知らないだけの明るい日

トンネルだきつと明るい出口あり

鉄腕アトム見るとまだまだ血が騒ぐ

大らかに生きる女に花がある

小津映画騒ぐ世を背に家族愛

高槻市 原洋志

AIがやがて秀句を独り占め

コロナ騒ぎ知らぬボツンと一軒家

出来立ての春を探しに行く散歩

献立に迷いデバ地下二周する

生命線消えて脱線ばかりする

高槻市 安田忠子

よく食べてよく寝て遊ぶ有難さ

行間に滲み出ているお人柄

好きな事している時は元気です

お呼ばれに少し派手めのイヤリング

バスツアー今日の客筋読むガイド

豊中市 池田純子

賑わいを知らず今年の桜散る

家猫と共に籠ってストレッツチ

夫とも保っています二メートル

毎日を鈍感力でやり過ごす

頑張ろう桜の国の私達

豊中市 上出修

地球から笑い奪った新コロナ

コロナ舞い豊かな社会萎縮する

コロナかも皆が遠のく花粉症

妻上座居場所を探す定年後

ほめ言葉若手どんどん伸びてくる

豊中市 きとうこみつ

作った人の気持で食べている御飯

安倍昭恵庶民の気持理解せず

松葉ガニロシア産とはちがうぞよ

被災地の立場わからぬ都市暮らし

キャッシュレス立場なくしていく小銭

豊中市 藤井則彦

がむしゃらに進めば前途面白い

はったりも見栄も見せない蟻の列

コンプレックスも時には人を強くする

身と心のアンバランスにある魅力

ひとときの孤独味わう日暮れどき

豊中市 松尾 美智代

大丈夫なんて言えない見えぬ敵  
電車に乗って半日仕事眼科歯科  
集まりは中止ひとりですクワット  
話してるのは私夫はひとり囲碁  
病から逃げてみんなは春籠り

豊中市 水野 黒 兎

十年も空家の庭に春の色  
いさぎよく散るもさくらと言う白寿  
世話をされて閑かな路地暮し  
知らぬこと多くてこの世おもしろい  
知らぬふりして聞いている猫の耳

富田林市 片岡 智恵子

明日あると思う心は隙ばかり  
丸い輪の中あの人もこの人もいる  
手づくりのマスクでコロナ迎え撃つ  
九十の身の振り方よむくげ咲く  
スーパームーン暗いコロナを消すように

富田林市 中村 恵

桜さくらこの世おおかた通り抜け  
言の葉を透かすと燦燦と光  
それぞれが笑顔の連鎖生むひとり  
贅沢は言えぬ足許見つめたら  
余力まだあるかと問うてくる歩幅

富田林市 山野 寿之

歓声の沸かない席へホームラン  
吉本も臨時休業新コロナ  
毎日の十品目に妻の愛  
天地返し春の息吹を裏返す  
連翹がここから春と葉差す

寝屋川市 富山 ルイ子

日本中コロナウイルス増え続け  
百貨店行きたいけれど我慢する  
近くの店にも行くなど言われている  
生協で買物すまず少しだけ  
変な草庭にあちこち生えている

寝屋川市 平松 かすみ

困ったなパンデミックになるコロナ  
行くところ無いので遊ぶ針と糸  
お二階へ上がり下りして暇潰し  
髭ダンス真似てた頃はよい時代  
引越しの友の元気を柳誌から

寝屋川市 森 茜

春なのにタートルネック放せない  
小うるさいけれど氣遣つてもくれる  
とほとほと私の影は前のめり  
腹立ちをやんわり溶かす母の自負  
まっすぐに主張まっすぐに背骨

羽曳野市 磯 本 洋 一

昨今の味噌汁お湯でプロの味  
入院中妻には内緒ああ旨い  
桜見は今年スマホで楽しむよ  
所作に惚れうなじに惚れて茶をすする  
鯉幟アイロン浴びて生き返る

羽曳野市 宇都宮 ちづる

散つてゆく桜も人も悔いだらけ  
三密守り人恋しくて長電話  
籠の鳥こんな気持か自粛中  
愛犬も二メートル空け散歩する  
リーダーの弱気コロナを拡大し

羽曳野市 徳 山 みつこ

コロナ蔓延神の怒りに触れたらし  
前頭葉絞った筈がまた没に  
先長し老人大へ入ろうか  
アリガトウ一杯詰めて封をする  
新コロナへ地球ワンチームで挑む

羽曳野市 藤 原 大 子

濟みません添えて断り丸くなる  
過ぎた日がフツと浮かんで責めてくる  
晴れの日はひときわ高く鳴く小鳥  
桜へのやきもちなのか雨が降る  
咳するもされるもヒヤリ新コロナ

羽曳野市 三 好 専 平

思い出す力さえない脳で生き  
わたくしの生活いつも無観客  
命より株の下落に紙面割き  
旅役者と別れたあとの春の泥  
コロナ禍に消えた首相のスキヤンダル

羽曳野市 吉 村 久仁雄

だぶだぶの服でゆるゆる生きている  
冗談の中で大汗かく本音  
へたくそなギャグで会話を丸くする  
一日だけの幸で一年生きていけ  
山笑う季にコロナに泣かされる

東大阪市 佐々木 満 作

茶の間から突然消えた志村けん  
コロナ禍で自由奪われたヒト科  
不透明な未来孫達の世を憂う  
半世紀反省繰り返すばかり  
日曜日料理は僕が腕揮う

枚方市 丹後屋 肇

フルムーン鍾乳洞で手を繋ぐ  
冗談が飛び出る回復の兆し  
新コロナマスクの俣に花粉症  
いちご狩り糖度にメロメロのハウス  
焼き立てにスタチを垂らす旅の宿

枚方市 藤村 亜成

藤井寺市 鈴木 いさお

プライドが眉間の皺を深くする  
お互いをゾンビのように見るコロナ

3密の全てに該当する句会

案の定出た許せぬコロナ詐欺

3密と手洗いだけで防ぐ敵

枚方市 山口 弘委智

風を呼び風を彩る吊し籠

迷っても路地に思わぬ魅力あり

この十年よきもあしきも妻たよる

花冷えの散りゆく夢の鮮やかさ

許すという言葉の出口暖かい

藤井寺市 太田 扶美代

辛党が孫のクッキー食べてます

チューリップもわたしも春を慈しむ

空っぽになるまではしゃぐ淋しがり

神様に罪を被せた事がある

介護という森は途方もなく深い

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

春キャベツ妻の瞳が輝いて

豆ごはん故郷忘れたりしない

二枚目が兎をあやしてる五月晴れ

コンパスを使わず円が描けました

逝く人のみな美しき夕茜

廃村になってもわたしふる里

生きている内に逢いたい人がいる

おじいさんだから大目に見てほしい

預金ゼロ借金もゼロそれでいい

入院のベッドで詠んだ八十句

藤井寺市 高田 美代子

さりげなく見てる貴方のお人柄

B面で個性を磨くのも女

怒ったら負けになるからガマンする

河豚の肝ためしに食べてみませんか

わたくし土鍋もこわれ易いもの

藤井寺市 吉田 喜代子

ウィルス怖し観客のない大相撲

令和二年新聞テレビで見える桜

人疎ら春の草花咲き誇る

コロナ去る静かに静かに待っている

古い二人コーヒー持って出掛けたい

箕面市 大浦 初音

お互いにつかず離れず夫婦道

手の平を朝日にかざす5分間

暮しむき中の中なら良しとする

喋るだけ喋って後は知らんけど

年金の目減りじんわり首しめる

箕面市 酒井紀華

ほんのりと五感くすぐるコロナ風  
なるようになるコスモスゆれる自然体  
コスモスの怖いものなし乱れ咲く  
いくつもの視線に耐えて咲いてます  
少々の皺老いの品格自覚する

箕面市 出口セツ子

病院に行くのも不安なるコロナ  
イベントも花見も我慢籠の鳥  
終息まで先が見えないから疲れ  
あと何回親子で祝う誕生日  
プレゼントの旅行去年にしてセーフ

箕面市 広島巴子

元気だな桜菜の花パツと咲く  
入学の孫写メールでVサイン  
髪伸びる長さ我慢のパロメーター  
新型コロナ味覚嗅覚試してる  
庭先の新芽やわらか日向ほこ

八尾市 内海幸生

葉桜に趣きのあり見て飽かず  
御見舞に行きたい足が動かない  
あの堅い種割り芽吹く梅の芽よ  
叱られた孫にも言い分たとあり  
散る花にかける言葉が見当たらぬ

八尾市 寺川はじむ

いざ百へチャージ満タン歩を運ぶ  
人様を籠に閉じ込むコロナ菌  
いざ甲子園球児涙のコロナ劇  
ブレイキもアクセルも踏む好奇心  
最高のもてなし五輪閣のなか

八尾市 村上ミツ子

値上りのトイレペーパー買いました  
スーパで三步離れてご挨拶  
コロナ禍へスーパからチラシ消える  
チラシなく買物予定たちません  
ご近所の親切いただいてばかり

八尾市 山根妙子

テレワーク一泊おいて来る返事  
ランドセル背負う日待つ始業式  
賑やかに公園で聞く子等の声  
技のある日本でマスク不足とは  
ひとの愚痴我が身に置いて考える

神戸市 上田和宏

コロナ怖し夫婦そろって引き籠り  
マスク越し確かめ合ってこんにちは  
素手洗いにくきコロナに立ち向かう  
かちやかちゃん妻は元気な台所  
人情が今もわくわく古川柳

神戸市 奥澤 洋次郎

豆の花菜の花と居て花粉症

コロナ自粛白さが重い花並木

迷惑は見えてはいないスマホの目

ウイルス禍冷え冷えと舞う花吹雪

手探りの病予防で八十路入り

神戸市 敏森 廣光

しゃべるより黙ると怖い僕の妻

オリンピック一年延びた見れるかな

あの仕種女性は永遠に魔物です

激論を交わした友と芋焼酎

身を賭してリスク教えた志村けん

神戸市 富永 恭子

家飲みは気心知れたママが居る

ゼラニウムそろそろ外に出せと言う

若葉燃ゆコロナ感染よそに見て

悪役ものぞむところだ春風

土を押し芽吹くじゃがいものポジティブ

神戸市 山口 光久

愚かにも甘い言葉を信じ込む

勢いでついつい嫌み言う愚か

清貧を生きたサイフはへこたれぬ

だめだなあ酒のはずみでポロを出す

疑わず有りのまんまを信じよう

神戸市 山崎 武彦

穏やかに眼を見て話す医者が好き

窓明り待つしあわせを知った膳

明日の詩切り株の芽に諭されて

臥す母の余命いくばく髪を梳く

コロナより恐い巣籠り引きこもり

明石市 糀谷 和郎

老いの指湿らせ捲る新刊書

鼻唄の洩れくる窓に妻の影

スマホかて欲しかるページ捲る風

いただいた命先祖へ感謝する

誤字脱字貼った付箋がくす笑い

尼崎市 永田 紀恵

五回目か今年が最後同窓会

その頃は生きてないから嘘並べ

錯覚に支えられてる老いの恋

考える時いつも便座でロダンする

休校を持って余す子と喜ぶ子

尼崎市 藤井 宏造

のど飴は口臭防止にはならず

友の葬儀友の素顔を少し知る

夕方に電池切れてくる身体

痛い目にあってもバラの毒に酔う

余計なこと言い出しそうでマスクする

尼崎市 藤岡りこ

よいしょと背負った老母は軽すぎた

コロナ禍で家族揃って夕ご飯

花の香も風の匂いもしない春

コロナ禍で手作り料理増えました

桜咲いたが並木道には人は来ず

尼崎市 藤田雪菜

お葉が効き過ぎました副作用

春陽の河川の土手で初音聞く

コロナ菌友とのランチ御破算に

荒れた手を優しく撫でる春の風

アスファルト雑草の芽が春の息

尼崎市 山田耕治

初出勤母がネクタイを直す

保険証も生きろと言ってくれている

胸元で手を振る人と今別れ

初恋の先生が弾く卒業歌

今晚は誰が出て来る夢の中

加西市 山端なつみ

死で示すコロナの恐さ志村けん

大丈夫だあ元気に言って欲しかった

今死ねば葬儀に誰も来てくれぬ

コロナ禍が地縁血縁切っていく

3Kだけど三密でない農家です

川西市 山口不動

五七五詩える幸よ春一番

クラスターオーバーシュート恐ろしげ

鶯はコロナウイルス無関心

外に出ずフジコヘミング聞いている

逝く時は私がずっと居てあげる

三田市 足立つな子

啓蟄の病葉払い春を待つ

彼岸会の馴染みの顔の先祖講

若鮎の門出を祝う弾む声

へトへトの体に水の活入れる

ひとりより寄り添う二人絵になるね

三田市 上田ひとみ

守るもの両手いっぱいあるのです

チューリップほめて欲しくて咲いている

ランドセルかあさんの手を離さない

お出かけを待っております三輪車

この風に納得なんてするものか

三田市 大西重男

下戸だった親父に逆らい今日も飲む

咳すると隣の人が席を立ち

八十路まで生きてウイルス怖さ知り

ウイルスの感染恐れうつ病に

使い捨てマスク三回使います

三田市 尾崎 一子

不要不急コロナウイルス春の闇  
手際よく引越し荷物積み上げる  
巣立つ子に何度振ったかこの両手  
「これあげる」くれたTシャツチョット派手  
わたくしを若くした孫との四年

三田市 九村 義徳

信念を曲げぬ頑固に金メダル  
習わしと言う名の殻が邪魔をする  
礼節に尻尾踏まれてる無謀  
妻の愚痴何も言わずに聞いてやる  
妻の振るタクト信じて平和です

三田市 多田 雅尚

GWもう要らないと子の悲鳴  
感染に二の足を踏む医者通い  
危機管理試されている日本人  
不要不急照らせばみんな出歩けず  
来月も黒塗りされたカレンダー

三田市 谷口 修平

スキンケアもう手遅れと言う鏡  
子を見れば親のマナーが見えてくる  
休耕田先祖の汗が乾き切る  
年金が生活保護に負けている  
山菜の香り豊かな春の膳

三田市 野口 真桜子

世界地図コロナが赤く塗りつぶす  
忍ぶれど木霊は嘘を返せない  
惜しまれ逝く人 嫌われ生きる人  
ポケットにイコカとアメとニトロ入れ  
追伸の乱れた文字が叫んでる

三田市 福田 好文

理屈抜き笑いをくれた志村けん  
問診表酒の量だけ鯖を読む  
バブル期に奢ってくれた友が逝く  
恋をして嘘が上手になる娘  
白黒を付けずに生きる道もある

三田市 松本 ゆかり

蛹だったと人に言わずにいて欲しい  
仰ぎ見る桜のむこうひそむ哀  
紅白の梅を従え天守閣  
梅園に吟行というよい言葉  
新型コロナ時疫とかいう古語のあり

三田市 村田 博

野良仕事今日は精出す明日は雨  
意気込んで独り相撲でずっこける  
運転を止めれば免許ゴールドに  
オリンピックを人質に取るコロナ  
ライバルはさくらだと言う雪柳

高砂市 松尾 柳右子

オーパーを重たくさせる春霞  
信楽でオーケストラになる狸  
手のこんだ料理目を引く祝膳  
雨降りの結婚式で固まる地  
親族が増える挙式の握手攻め

宝塚市 丸山 孔一

断捨離のはじめアルバム全部捨て  
素直とは自我を殺せと言うことか  
昼ごはんどうするつもり妻が聞く  
なんでやねん犬にだけ言う標準語  
二階にも灯が無く隣今日も留守

丹波篠山市 北澤 稠民

真っ直ぐに生きて火の道風道の道  
ウィルスを酒で毎日消毒する  
コロナ禍を就職活動孫愛し  
病む国も平和な町も同じ月  
今が旬年重ねても今が旬

丹波篠山市 久保木 剛

孫ひとり我が家の未来背負わせる  
守り札新車のときにつけたまま  
なんやかや言っても妻が居てくれる  
セルフレジ監視カメラに挙手の札  
横顔でまだCMに出る小百合

丹波篠山市 酒井 健二

何でやる暗い詩歌が身になじむ  
朝ドラで妻は普通の人になる  
恐慌やテレビが言うが僕もふと  
軽症のコロナで七転八倒か  
きっかけが聞けないままに孫に子が

丹波篠山市 長谷川 善輔

人影のなき春寂しコロナの翳り  
驚も声潜めたる怪し春  
予定表中止と書き込む日の寂し  
試練とも思し召しとも思う世の中  
壮大なマーラーを聴く空しき夜

西宮市 秋元 てる

家族さえコロナがへだて会われない  
動けない身に病院食のまずさかな  
唯一つの食べる楽しみ消え失せた  
書く事は不平不満をへらすこと  
かゆい所へ手が届くとは風呂だった

西宮市 緒方 美津子

桜木蓮三日天下に酔いしれる  
おにぎりを頬張らせたい飢餓の子に  
もつれたら早目に解くそれがコツ  
孫五人元気に走るのが自慢  
札束を見ると猫にはなれません

西宮市 福島 弘子

ポーンポーンのんびり時計日向ほこ

肥後守今も現役手に馴染む

コロナ禍に負けるな今日も鳥の声

なりふりも自分に甘くなる傘寿

忘れたを笑って許す子に甘え

西宮市 福田 正彦

落ち込んだ世の中見据え顔上げる

日捲りに空欄見せぬ元気者

迎え撃つコロナ退治は原始的

過ちて身の処し方で浮き沈む

寡黙だが喋る一言重みある

南あわじ市 萩原 狸月

生活の公転止めた新コロナ

ウイルスが消しゴムになる予定表

終息の見えぬコロナに旅自粛

マスクして飲み食いなしの花見客

抗体の無いまま消えた街あかり

奈良県 安福 和夫

ウイルス禍視界がゼロの大ピンチ

感染ルート見せぬコロナの陰湿さ

肘タツチしたいが傍に近寄れず

3密のスキを逃さぬコロナ菌

平和ボケ若者たちの危機意識

奈良県 谷川 憲

疫病が感染地図を突きつける

入社式同期の仲間見れぬ年

自然破壊止める老爺の蓆旗

コロナ禍に勝って明日に夢描く

ガンリン車歴史遺産になる世紀

奈良県 中原 比呂志

禁足令飲み放題とはいかぬ家

厄除けの神も閉門蟄居中

平成の生まれでマスク縫えません

春本番黄砂花粉にウイルスまで

輝きも緑もいたたく深呼吸

奈良県 中堀 優

覚悟すりゃやがて開ける明日の世

何もかも忘れたまには酔ってみる

極楽の門を閉めると鐘が鳴る

夕日だって山に隠れて燃えている

僕は地球父は太陽母は月

奈良県 長谷川 崇明

二度と来ぬ八十歳の花見酒

酔うてそろう今年は無理と花筏

いい天気今はコロナとする昼寝

辛抱という拷問に苛められ

コロナ禍にひとつよかつた戦なし

奈良県 渡 辺 富 子

ふくらんだつぼみと明日の話する  
コロナ禍の愁いマスクに閉じ込める  
明日の命約し地ぞうはほほえんだ  
なだらかな曲線たどり過ごす老い  
マンネリを笑い合つて今日も無事

奈良市 宇 賀 史 郎

半年後句会出来るか天に訊く  
飲み会の中止が続く電話音  
熱爛に目刺し三匹自粛中  
鹿見ても盲導犬はじつと耐え  
恐れんとやつてみなはれ運も友

奈良市 大久保 眞 澄

かろうじてわかるマスクの下の顔  
ウィルス乗せて夢が悪夢になった船  
濃厚接触他に言い方ないものか  
外出自粛肥満が増えてくる巷  
塔誌発行自粛してよろしいか

奈良市 高 橋 敬 子

朝の道次ぎ次ぎ白いマスク行く  
ニユース朝からコロナ尽くしの影広げ  
ばあちゃんは家への声を通せん坊  
外出控え家で渋渋草むしり  
美しい春家に籠もらすコロナ菌

奈良市 辻 内 げんえい

気晴らしの散歩もやはり裏通り  
ウォーキング人の通らぬ道探す  
脳トレのパズル解くまで寝られない  
胴回りピツタリだけど長すぎる  
バーゲンでもブランド品に違いない

奈良市 山 本 昌 代

桜散る怖いコロナを憂いつつ  
今日もまた小さな発見する小道  
最適な暮らしご飯が炊きあがる  
あつたかい気配り少し老いたかな  
励ましに釣られて一歩前に出る

奈良市 米 田 恭 昌

君は聞いたか少女グレタの叱る声  
竜馬在りせば地球まるごと洗うだろう  
世代交替会社もうちも進まない  
孫からのエールが僕の力水  
AIを基敵にしてまだ勝てず

生駒市 飛 永 ふりこ

どっかりと御霊を宿すアマリリス  
ピンポンの会話が癒す鍼治療  
きらきらとすべすべ君の眩しさよ  
心身の加減がわかるスクワット  
木瓜の花名前負けせぬ風格が

香芝市 大内朝子

川柳にぶつけるコロナへの思い

三密を武器にウイルスとの戦

当り前の暮し恋しい春嵐

手づくりのマスクへ花のアップリケ

世の中の賢者よワクチンを頼む

桜井市 安土理恵

うぐいすへ応える口笛はまだまだ

黄色い帽子めっきり減った通学路

古傷にとうとうカビが生えてきた

ぐったりへのんびり寝てとは心外な

空腹なだけです放つときゃいいのです

和歌山市 上田紀子

自己愛の強いメロンが香を放つ

聴き慣れたイントロ流れ口ずさむ

実篤の野菜それぞれ自己主張

人間は弱いものだを知るコロナ

家庭内自粛も案外疲れます

和歌山市 柏原夕胡

さくらさくら三年ぶり逢えました

さくらさくら貴女のせいで泣きました

いのちとやソメイヨシノの淡すぎる

コロナウイルスへ孤立をする桜

六十三歳人間性でも磨こうか

和歌山市 坂部紀久子

何か良いニュースないかと庭眺め

テレビつければしゃしゃり出るコロナかな

丁度いい時に来たねと豆ご飯

メールも電話もなくみんなどうしてる

マイナスマイナス眠るしかない日々

和歌山市 土屋起世子

生かされて花も嵐もある八十路

手抜きして三食ちゃんと食べてます

生き辛い時も生きよと星が言う

心配ごと持ち込む娘ファイト湧く

幼い日も緊急事態生き延びた

和歌山市 福井菜摘

凡人と悟ってからの身の軽さ

プライドの壁低くして風を入れ

壁ひとつ越えて向き合う嫁姑

和解して春のリズムを手に入れる

リセットが生きる力を倍にする

和歌山市 堀富美子

チャンネルで花の命をいとおしむ

籠らせた心の晴れを待つ明日

ぴりぴりとコロナの怖さ付いて来る

終息の平和へ自粛する命

時来ればお会いしましょう電話口

岩出市 藤原 ほのか

志村さん笑い届けて華と散る

意味がある想いをのせて散る桜

馬鹿殿の君の姿を忘れない

スクラムを組んでこの日を乗り切ろう

メッセージ受けて行動見極める

海口市 小谷 小雪

フルートに癒されてゆく早春賦

銀行の書き心地良いボールペン

つばみにも風情を足して小糠雨

大の字にならせてくれたレンゲ畑

コロナ禍を避けて田舎に疎開する

紀の川市 山東 日出男

朝のサラダボールに緑が跳ねる

天気図を緻密に読んで山登り

アリバイの証しレシート取っておく

健診に限り結果はいつも優

ウグイスの声に誘われ山歩き

橋本市 石田 隆彦

朝一番笑顔に触れて出る元気

ファイト出た妻のエールの手弁当

観光客途絶えしつとり雨の京

紙芝居見てるがごとき日は過ぎる

荒れ狂う漁場に今日も未収入

鳥取県 池澤 大鯨

アルビノも生きる権利を持つている

檻のライオン吠えることなど忘れてる

あなたですと言いたいけれどそれは無理

新築の家につつてジンマシン

湿地帯樋門開閉生命線

鳥取県 門村 幸子

今年また桜吹雪の中に立つ

日本語の訛り土着の匂いする

コロナ菌一人っきりの映画館

隠れん坊解かれたように土筆出る

わたくしの心耕す本を読む

鳥取県 斉尾 くにこ

たんぼぼは春の大地のマスコット

あなたってわたしの中のシャンデリア

戦うは他人にあらず戦うは

会いながらきみを探していたかつて

シロップの香りで茶店からメール

鳥取県 竹信 照彦

鳥取も安心中止になりました

安心に出来る投句と野良仕事

臺が立った野菜畑へ埋め戻す

さあ次は苗植えトマト茄子が待つ

実る頃会再開できるよう

鳥取県 細田裕花

寝坊助の桜ようやく咲きました

雨降ってお色直しの若葉たち

自肅の世春のマーチは聞こえない

カレンダ―の予定を消していくコロナ

街に出て土の匂いを忘れ去り

鳥取県 山下節子

学業は卒業出来てまだ無職

二千万ようやく貯まりすぐに逝く

貸し借りのけじめしつかり身につける

八十路きてまだ立ち上がる趣味を持つ

立ち上がるまでが長びく膝小僧

鳥取市 奥田由美

耳からも金運逃がすピアス穴

パパコンプレックスの娘が選ぶパパ似彼

我が家とは布施が違うか長い経

兄も逝き実家放棄の墓守り

回忌ごと実家が敷居たかくする

鳥取市 加藤茶人

ロボットでは出来ぬ感覚耳掃除

ライバルで今日は観音明日は夜叉

手を添えて見れば小さくなった母

口実は後から付ける飲み仲間

性格が大抵悪いのが美人

鳥取市 岸本宏章

パプリカを子供のように踊れない

街でふと出会った友が老けていた

味噌醤油借りた昔のとなり組

大切なことは相手の目に聞かす

長生きのお陰で見えたダイヤヤ婚

鳥取市 岸本孝子

恩返し年忌供養は欠かさない

日に一度探し物するなさげなや

目に見えぬ菌が人間もてあそぶ

桜咲けどうきうきさせぬコロナ菌

立場上言えぬとうまく逃げられた

鳥取市 倉益一瑤

言い負けて笑うしかない影法師

酸欠の私に孫からのメール

自画像が描けないままに雨期になる

きよろきよろと五七五の種がす

何時までも卒業出来ぬ主婦業だ

鳥取市 坂本とも湖

広辞苑たすけを借りて没ばかり

山陰道無料でいいよスイスイだ

夫の寝顔きつとだれかと逢っている

つかのまの夕焼けが燃え恋も燃え

補聴器もつけて黄泉路の旅へ立つ

鳥取市 田賀 八千代

一番星の横で未来凶光らせる  
温めた思い出少しずつ流す  
今ここで止まれば椿散りそうで  
何もかも許して桜一人咲く  
借りた恩返さなメダル色褪せる

鳥取市 田中天翔

傘寿まで借家の星がいい心地  
ついに来た鳥取市にも新コロナ  
感染予防三密さけて犬散歩  
押入れが片付き嬉し新コロナ  
ストレスの解消ひとり舞稽古

鳥取市 棚田 大

桜見てコロナウイルス忘れてる  
赤ちゃんもコロナウイルス睨んでる  
自然から借りているのに感謝せず  
腹立てるそれがおいらの得意技  
今の世はまさかの事態どんと増え

鳥取市 谷口 回春子

頬撫でる春風恋の匂いする  
力不足を棚に上げては得意顔  
幸せのキーはいつでも妻の胸  
ぐうたらの不要不急はお手のもの  
よそ事があつという間に自分事

鳥取市 中村 金祥

手術待つこの瞬間を忘れない  
看護師の元気な声に癒される  
絶食の後の重湯に星三つ  
退院の朝を祝うか青い空  
ここで一句最後の締めで盛り上がり

鳥取市 夏目 一粹

ストレスの増殖は寝不足からだ  
老いゆけば何もかも遠ざかりゆく  
気ままな風が残り火を再燃す  
同じことまた言いかけて飲み込んだ  
恋の熱やっと引いたよ八十路過ぎ

鳥取市 副井 ゆたか

旅の宿つい食べ過ぎるビュッフェ食  
一冊の本で変わった生きる道  
コロナ禍で孫のお世話は夢心地  
離職後も元の職名付き纏う  
朝ほらけ猪口一杯が身に沁みる

鳥取市 前田 楓花

タラの芽が届いて春の膳にのる  
何処でも生きるとスミレ崖に咲く  
ライバルと上を目指して共に咲く  
増税にやってみようかダイエット  
晩ごはんひと手間かけたのに一人

政治にコロナとばつちり受け泣く桜  
鳥取市 山下 凱 柳

三密で人影消えた繁華街

花香る風情マスクで味わえぬ

コロナ菌で嬉しくもないみどりの日

休会继续句作る脳もサボリ気味

鳥取市 吉田 孔美子

フエーク失せつまらん奴になっている

君のフエークに僕は舞い上がっている

読み切るに手頃となった週間誌

深呼吸晴れてる山を丸のみに

水零す猫にストロー立ててやる

鳥取市 吉田 弘子

食べこぼし時が来たかとちと不安

良い事はないが耳掻き手離せぬ

十人十色譲り合ってるワンチーム

小規模の会合弁当持ち帰り

ああ母校生きているかと寄附募る

倉吉市 猪川 由美子

新型コロナ命や食の危機迫る

総理夫人森友自死へ知らん振り

ウイルス蔓延総理日本を救えるか

自粛自粛で世間どんどん暗くなる

拉致担当相ココロココロ替わり捗らぬ

倉吉市 岡崎 美知江

風こばまず走っています年女

シナリオのないどたん場劇がなつかしい

だんまりも抵抗策の一つです

わだかまり解けて楽しくなるひなた

斉場の煙突父が空を舞う

倉吉市 田中 紀美恵

メールでは春の香りは運べない

優しさを運んでほしい床の母へ

勢いよく愛した夫の胸で泣く

傘寿なり子には従い耐える日日

八十年耐えて耐えぬきピエロ役

倉吉市 牧野 芳光

パレットに暖色系が満ちて春

見つからぬように咲いている山桜

ふと触れた指に静電気が走る

山の向こうを知らねば山は描けない

妄想を妄想にする歯を磨く

倉吉市 山中 康子

生きている家族の恩を受けながら

外歩き早くしたいと思う日日

放送のコロナ攻めにはうんざりだ

感染しない鳥取もやはり不安

診察日医師の言うまま成すがまま

米子市 池田美穂  
今日こそはコロナもらつて帰るかも  
やる気出ずこれもコロナの症状か

五七五指折り過ぎて腱鞘炎  
脳みそがコロナを恐れ休句中  
国会はまさに三密心配だ

米子市 伊塚美枝子

春うららカエルと競う畑おこし  
花見酒今年は家で一人飲み  
生きて来た歴史を語る武骨な手  
指先の魔法を作る母の味  
無観客まわしをたたく音ひびく

米子市 後藤美恵子

児童の服伸びる見込みかだぶだぶだ  
酒たばこ止めた自慢は眉唾だ  
降圧剤デートに忘れ弾めない  
カラオケのマイク空咳して逃れ  
職人は職人なりの指かたち

米子市 竹村紀の治

水飲みに行った蛍が戻らない  
肝臓が横から文句ばかり言う  
アドバールンひとりで浮いているつもり  
止むを得ず酒屋コンビニ診療所  
ウイルスに静かにしると脅される

米子市 中原章子

サクラ咲く地球の未来信じ咲く  
世界中コロナを的のいくさする  
毎日の我慢の日にも笑顔持つ  
食欲の出る路を炊きおすそ分け  
夏野菜作るシャベルを買い替える

米子市 野川宣子

親と子でものさし違うしあわせ度  
粗食でも大満足の胃も腸も  
小さなことも満足出来た母だった  
すいすいと逃げきる手立て部下がする  
年寄り子供閉じ込められる日本中

島根県 伊藤寿美

コロナ蔓延法の網目にまで搦む  
ガード下の靴磨き続けた人が逝き  
病む友よ囀る雲雀聞いたかい  
リメークしたモリハナエ着る昭和着る  
アキエフジンイイコデオンモテナイデネ

松江市 藤井寿代

うっかり履いてしまったガラスの靴  
桃色のハート死ぬまで女です  
スツピンの笑顔が最高の化粧  
笑って許す女の武器をまた使う  
失敗だらけの人生に乾杯

松江市 松本 知恵子

若葉萌えつばめ来たのに先見えぬ

在宅でマスク作りの針仕事

見直した母が描く大人のぬり絵

人絶えた道路鳥たち舞い下りる

花冷えに悲しすぎます喜劇王

出雲市 伊藤 玲 峰

お花見の中止に桜梢気もせず

爛漫の桜幼児の独占に

経済も人の命も揺れている

コロナウイルス球児の夢を取り上げた

優しさに囲まれ五体よく動く

出雲市 岸 桂 子

崩してはならぬ平和の字の重み

もみじ手で合掌をするあれ以来

一軒を磨きつづけて姑になる

会釈して行き交う遍路仏道

遠雷やわたしのみくじ凶と出る

雲南市 菅 田 かつ子

早朝の新聞受けの青蛙

此処で今口を出すなど目で合図

この頃は手抜き上手になりました

水たまり跨ぐによいしょどっこいしょ

儲けにはならぬ事だが楽しくて

雲南市 松本 昌

行く春や新型コロナどこへゆく

平和だな窓のカーテンゆれている

野次飛ばす野党の姿あわれなり

孤独死は淋しかりけり花の下

前向きに生きようガンを友として

岡山県 高岡 茂 子

コロナなど存じませんと花が咲く

絵心があれば画きたい花吹雪

ジム休み家でははずまぬスクワット

御祓も等間隔で受ける氏子

祭典の後厄除けの餅切りわける

岡山県 田 中 恵

味噌汁のパワーコロナに立ち向かう

さくらさくら前頭葉に灯を点す

五七五のリズムでボチが吠えている

趣味の会全部コロナに奪われる

おだやかな日和欲など捨てました

岡山県 山 縣 のぶ子

ばあちゃんも背筋伸ばして向くカメラ

流れには逆らえないと四股を踏む

写し役の亡夫の写真は無いままに

孫が来てこぼれる笑顔置いて行く

乱れ過ぎ運命線は信じない

岡山市 大石 洋子  
整理整頓頭のなかはぐつちやぐちや

B型でいつもお腹が痛みます  
カバン持ちしながら帰る夕焼け小焼け  
連帯を学んでいますまだ途中  
解きほぐす言葉探して生きています

岡山市 工藤 千代子

証拠隠滅私の日記捨てました  
突然の計報しばらく動けない  
師と私黄色い糸もありました  
アルバムをひっくり返し師と遊ぶ  
四月馬鹿命日さえも川柳で

岡山市 永見 心咲

立て付けの悪いふすまがよく笑う  
色褪せぬ父の記憶よ帽子掛け  
凸と凹そんな夫婦の娘でワタシ  
水色になるまで心開ききる  
ピアスきらきら小さな夢のかたちして

岡山市 前田 恵美子

布マスク柄いろいろと花が咲く  
筋トレも手の消毒とマスクして  
喋り止めマスクが役に立つかしら  
不織布のマスクも洗いまた使う  
コンピニの「マスク」夜中にやって来た

笠岡市 藤井 智史

そこそこ素敵な春がやって来る  
愛というワイルドカード引き当てる  
恋でした君にほろ酔いする桜  
愛ゲット脱オタクした冒険記  
裸電球一個勉強続く

広島市 岸本 清

惚けるとはこういうことか老いて知る  
アドバイス広い心で受け止める  
コロナ禍に心うらはら距離をおく  
うつむいてカタクリの花人招く  
苦勞した人の話は耳を貸す

竹原市 石原 淑子

レモン柄手作りマスクいただいた  
ゲームにユーチューブ現実逃避にも  
誕生日夫と祝える半世紀  
コロナ撃退延びた五輪を観るつもり  
帽子にマスクやつと気づいた優しい瞳

竹原市 岩本 笑子

話相手はバラかもライトアップして  
菜の花の静かさ咲いているらしい  
病院の花は呼吸してますか  
そうですね葉はたと飲んでます  
デザートが少しづつ増える

宇部市 平田実男

白旗を仲々揚げぬ安倍総理  
齡よりも若く見られるのがサブリ  
同郷と分かり自然に出る訛り  
私が私を叱る二度の事故  
本當の敵が味方にいる怖さ

下松市 有海静枝

右へ做え出来ず波風また怒涛  
静観をすれば体力要らぬのに  
小鳥だけ鎮守の杜に舞う桜  
人柄が透けて見えだすコロナの禍  
ステイホームひなたぼっこの猫に成る

防府市 坂本加代

コロナ禍に川柳ひねる家籠り  
握手する手にも消毒コロナ菌  
生命体バランス取って生き延びる  
染まらないこれがわたしの生きる知恵  
ルノワール思い浮かべる風呂の中

松山市 栗田忠士

朝掘りのタケノコ春が匂い立つ  
タケノコの背中と腹を知ってるか  
集いたい逢いたい杯を交わしたい  
あの世でも笑わせてるか志村けん  
老化とは眉毛が伸びることらしい

松山市 古手川 光

コロナで始まりコロナで一日が終る  
病む妻に面会謝絶通せんば  
満開のさくら癒してくれている  
桜見る会なくてにつこり咲く桜  
子供の声もつと聞きたい子供の日

松山市 宮尾みのり

手紙書く心を整理するように  
雑学をいっぱい持って独りぼち  
下り坂私のまりが見付からぬ  
良識のラインかすんできた日本  
投句発表二ヶ月先が今読めず

松山市 柳田かおる

幸せの危うさ思い知るコロナ  
スイートポテトより焼き芋が性に合う  
かすみ草薔薇と一緒に輝ける  
自分史の中の昭和が基礎にある  
雑音になつて雑音気づかない

西予市 西田美恵子

君を見つめるために輝く瞳だよ  
へソクリを数える度に出るうふふ  
金策に走る幸せ不仕合せ  
輪から出て初めて聞いた風の音  
老いらくの恋は楽しくあるように

東かがわ市 川崎 ひかり

それぞれの立場で座る春の椅子

鈍行に乗り換え余生楽しんで

普通からがらりと暮らし様変わり

新緑の森に生命が匂い立つ

本当にマスクでコロナ防げるの

土佐清水市 辻内 次根

敗戦を知ってる人に降るサクラ

三月の明るい海を見て帰る

陽の光はつきり春が動きだす

ハイイと返事立ったら風の音だった

春眠が覚める小鳥の囀りに

唐津市 坂本 蜂朗

飢えていた日本で育てられ感謝

食欲はあるのに妻が禁止する

確実に進む老化と渡り合う

暖冬も老いには辛い日日だった

秘めた恋なら僕も持つてる

唐津市 山口 高明

揚げ潮に乗ったお方に逆らえぬ

咳すれば周りの方の目が刺さる

姑さんの持病が痛む雨つづき

三分で責任果たす砂時計

足止めの島で碁盤と睨めっこ

北九州市 小松 紀子

虐待のニュースキリりと胸痛む

うぐいす鳴いた又鳴いた日和ぼこ

散歩道やすらぎくれる石地蔵

沢ありの野菜好きです同じ味

長生きはしんどいと言う姉九〇

熊本県 岩切 康子

着ぶくれて測定エラー血圧計

郵便受けの前で休刊思い出す

堅い爪夫の力借りて切る

電話あつた伝える名前出て来ない

リハ散歩相手も散歩続けよう

熊本市 杉野 羅天

コロナ禍を悼んで木蓮の紫墨

コロナ禍に人の叡智が占われ

桜並木無人の道もおつなもの

シクラメン皆立ち上がる恋兵士

手仕事に指紋無き指褒められる

札幌市 小沢 淳

長命にサプリメントのせめぎ合い

碁川柳できる私のポランティア

一歩先出て叩かれる若さ欲し

その先の先が読めないもどかしさ

弾まないピアノシーラカンスの僕

弘前市 稲見 則彦

桜から勇気をもらうはずでした  
祭り中止楽しみひとつふたつ減り

予定表一気に消され拗ねている  
素のわたし少年Aと言いました

ティータイムだと言つて飲む赤ワイン

弘前市 今 愁 女

郵便切手舐めずに貼れる新時代

北上のサクラは何処草を引く

花粉症がなんだ言いたい時世なり

地球から逃避もできず折るのみ

ひたすらに待つはコロナの終息を

塩竈市 木田 比呂朗

毎日が不要不急で梅雨に入る

ポケットのスマホ火急と騒ぎ立て

留守番で気づく隣家の笑い声

重症は二割ですよと事もなげ

覚えたくないカタカナ語クラスター

東京都 川本 真理子

水槽の魚に何やらある順序

娘からのお下がりがりばかり積みあがる

面白いでしょうと念を押してくる

曾祖母の顔思い出す丸めがね

座敷わらし心の隅にいてくれる

東京都 まえで とよこ

いつのまにかうつらうつらと春のいす

エプロンの紐むすぶにもひまかかり

新型コロナウイルスにきり国境描きだす

看護師の母を誇れと出勤す

戦争に似て戦争ではない世界地図

八王子市 川名 洋子

解決のカギを探して裏返す

春なのに外出させぬコロナ菌

娘から女になって他人めく

延延と羊と遊び日が昇る

じゃんけんで食器洗いを決めた頃

横浜市 菊地 政勝

忘れたと素直に言えぬ意地がある

病院と飲み屋で会つて笑みかわす

出がらしの話をまたも聞かされる

内緒ごと話して味方してもらおう

居合わせてついでのように誘われる

さいたま市 星野 育子

冗長の総理の話にストレス

ハチ公もマスクをしてる良かったネ

こんな中災害あればどうするか

今だからあの名勝負再放送

戦闘機不要不急で買わずすみ

上尾市 中村伸子

六秒ルール怒り鎮めるらしいです

大丈夫私はかからないと十代

お隣の車も鎮座テレワーク

今日からは軽いコートでの散歩道

散り初めし桜並木の散歩道

朝霞市 前田洋子

春うらら花見を死語にするコロナ

降って湧いたコロナに支配されている

命の選別をされるその時は

除菌剤でどろんこの孫追いかける

売出しに狙った品が出ていない

越谷市 久保田千代

予想だにしないウイルスコロナの変

令和ってこんな悲しい出出しとは

何かおかしいこんな地球の異変とは

コロナのお蔭お隣さんと初しゃべり

命あるものみな愛し今生きて

(前月分) 和歌山市 柏原夕胡

陰口を言った心が寒くなる

いろいろとあり幸せな位置に居る

家計簿へ病院代のデカい顔

遊ぶのにああ毎日が忙しい

親友に教わる事が山とある

(前月分) 高知県 小澤幸泉

窓越しに見える山々君遠い

涙眼にかすむ御国みくにの春とおい

眼が覚めるまだまだ朝がやって来ぬ

君の話やつと聞けます歳ですぬ

四十年やつと仲良くなりかける

## 水煙抄

(つづき)

奈良市 仲西賛郎

最終章のらりくらりと老いの道

自然の猛威うまく逃れて生きている

知らぬ間に手すりにすがり降りる癖

東大阪市 秀斧

共感力なくして人は老いてゆく

貧しさが美しかった昭和の子

小島蘭幸川柳句集

『再会Ⅱ』 領価 千円(送料共)

ご希望の方は川柳塔事務局まで

TEL 06-6779-3490



# 橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

百濟観音

秋なれば酒買ひ仏パリーまで

唐津くんち 三句

勢い獅子赤青金の息を吐き

闇を来て珠取獅子は闇へ消え

鮎荒く鯛のあと追う うねりかな

寅年に候 寅の年の旦

箸紙もいの一番は匠殿

四つの手が卍となりぬ歓喜天

冬の酒 唐竹割りに胃へ落ちる

正月も梅より薔薇が似合いだし

寒月に三々五々の通夜の客

旅人は焚火を借りて別れけり

大晦日老いはしらずかに箱に居る

悼 竹原はん女

雪涅槃 竹原はん女舞いおさめ

この齢にぺんぺん草の風が見え

仏の座ここに好啓ここに藻介

つらら解けT i P T O P T a P 珈琲館

鯉のぼり図圖の身の置きどころ

なつかしや友七十の丈くらべ

今朝会うた南無帰依仏の白い蝶

来し方や合縁奇縁相半ば

温泉で卵のようになる女

おふくろが呼びにくるはずないんだが

養老の酒 年金で飲むべからず

しみじみと妻の長所がわが短所

四方拝 今年も足袋の豊かなれ

同期の桜

三人は松竹梅よお正月

顛顛と鳩尾で聞くバイオリン

悼 北川絢一朗氏

禅僧のたたずまいもて逝かれしか

弟も鉢がもてるようになり

祝 五楽庵さんの古希

庵主古希百楽庵を目指しませ

孫の二人たこ焼きの前気を合わせ

# 自選集

小島 蘭 幸

ウイルス花粉掻き分けながら生きて来た

換気扇廻し続けている自粛

窓全開せめて書齋を春にする

コロナコロナ妻よあつちを向きなさい

外出自粛続く空気が澄んでくる

山 本 希 久 子

足すものと引くもの余生あるがまま

朝の街マスクとマスクすれ違う

コロナ菌ひたひたと波足元へ

あいまいなルールざっくり生きてきた背骨

時々転んで自分いましめる

板 尾 岳 人

オーイ・コロナ

十九時になるとコロナは昼寝する

オーイ コロナ戴草食べて消え失せろ

オーイ コロナびっくりするなよポン煎餅

オーイ コロナじゃんけんぽんであいこでしょ

川 上 大 輪

金太郎飴です母の笑顔です

厳選したら足りなくなつた豆

コロナコロナ今日一日をどう生きる

ペン先がひとり歩きをして困る

言の葉に迷い詩人になり損ね

北 野 哲 男

五頁に余る思いを五七五

半熟の昼寝にさせた救急車

閻魔さん笑う亡者は苦手らし

ああ卒寿友みんな老いたんと逝き

禁足に花の溜め息聞えそう

木 本 朱 夏

コーデイネットしてます手作りのマスク

春は春は 春はと自粛しています

収束はいつ三密という魔界

コロナ以前世界に色は溢れていた

コロナ以後みんな歌をうたおうよ

新家完司

はるばるとサノオからの七五調  
別嬪のメールが届く花の下  
老残や手話も点字も読めぬまま  
行きつけの酒場が消えた暗い春

コンパスも地図も失くした酔っぱらい

高瀬霜石

裏表紙ご覧よ本音知りたけりや  
間違っても吉とは出ない副作用  
戦力外と言われてからの臍の位置

負けて勝つそんな余裕はありません  
いい所だけを見ていこうと誓う

竹治ちかし

叱咤するように私の陽が昇る  
一眼に二足と婆の知恵が言う

三途の川を転ばぬように眼の手術  
ニューヨーク晴れだと過疎の雨が聞く  
休日の晴れ間タンブの甲羅干し

津守柳伸

三寒四温桜きっちり咲き競う  
縫い留めたマスク遠出を待っている  
クラスター身内の絆袈裟斬りに

残念なキャンセル感染は怖い  
決済はスマホ任せのキャッシュレス

都倉求芽

家にいるだけで世間の役に立ち  
春日永洗濯ものをとり忘れ  
散るまいと身をそらして遅ざくら

だんだんと字が書けなくなったウツ  
遺影から絶えず微笑のエールくる

西出楓楽

神仏に頼り甲斐などありやなし  
ひたすらに駄句を捻って春籠もり  
鈍感力老人力という味方

病名が五つも付いたわたしの胃  
コンビニへせめてマスクのお洒落して

仁部四郎

ポストまで一分に住み春の雨  
申又でいて叱られた夏の雨  
友達の失恋話秋の雨

月給日直線帰宅冬の雨  
歌えます昭和ヒトケタ「四季の雨」

三宅保州

手紙出すとメールで返事くれる母  
寅さんが降りて来そうな無人駅  
村民が総出演のエキストラ

雑踏の中で私を見失う  
休日には人で溢れる無人島

福士慕情

森山盛桜

スギ花粉罪は無くても俺きらい  
桜からりんごへ津軽花盛り

騙し絵のハートにやつと気が付いた  
AIの世に押しピンの一徹さ

人間の笑顔うれしい八重桜  
晩学の花を咲かせる輪が温い

芥しかティッシュは触れた事がない  
何というシンドロームかのめり込む  
どこなりと持ってけテレポーテーション

ポケットからヒラリと落ちた花名刺

乗合バスと我が旅

松本文子

八木千代

選者さまOKいずも創立九十五

ドライバーは神さま いのち引受ける

自己主張して咲いて散る山桜

意志と小銭があればどなたも乗合わす

磨いても光らぬ石も石のうち

シルバーシートなれど運命共同体

未来図を描こうトンビが舞うように

過ぎてしまった かなりの数の停留所

六道湖が見守っている死後の夢

小さい荷を括り終点では降りる

三浦強一

コロナ菌忍者の如く攻めて来る

### 麻生路郎語録

外出自粛読書三昧ともいかず

情報過多生きにくい世になりました

肩書きは人間そんな名刺持つ

元氣元氣言って気合を入れている

村上玄也

長生きの秘訣僕にはやはり無理

脳細胞徐々に壊れてゆく予感

妻が先免許返納して不便

年寄りに不便なだけの三連休

句会中止突然の暇持て余す

川柳とは人間及び自然の性情を素材とし、  
その素材の組合せによる内容を、平言俗語  
で表現し、人の肺腑を衝く一七音字中心の  
人間陶冶の詩である。

(「川柳雑誌」NO・218より)

## 森の集句



### 『凡人』

浜田 久米雄  
はま くだめお

卒業へ鯛一匹のほがらかさ  
春の夜の無邪気は花を折りたがり  
桃娘ここは備前の匂いがし  
いのちある句がほしいなと文化の日  
焚火の輪一人が寄れば一人去り  
また酒のとりことなるか花だより  
さかづきの上にも秋の香がさらり  
制帽でわが行く道のはるかなる  
勤続のある日は虫にさも似たり  
凡人へもつたいなくも湯があふれ  
ふるさとの道が曲つていてたのし  
沈黙は銀なり無口さからわす  
父がいるだけで茶の間の灯が明し  
老いらくの恋ハンカチにしわがあり  
朱に染まるなよと門出の子をさとし

(昭和38年11月3日 発行)

### 温故知新

小出智子川柳集『露の臺』から

息子には話しておこう川の幅  
秋深し父の位牌の軽さにも  
お弁当をまだ作らせてくれている  
たいがいの事は洗濯機で回す  
アルバムに貼るとはにかむ癖がある  
五十九歳これから川へ洗濯に  
他人だと思つてからはよく眠る  
こんなに腹が立つのにまん丸い月  
あやまちのひとつふたつは風の中  
水ぬるみ私は少し油断する  
火がついて来たのでやおら立ち上る  
生きるべし玉葱の芽が出る如く  
人よりも早く目覚めても籠の鳥  
根負けをしたのか雨が止んでいる  
清め塩人の絆は断ちやすし  
みちしるべ昨日と違う道を行く  
夫婦にも黄門さんの来る時間

# 水煙抄

## 川上大輪選

岐阜市 喜多村 正儀

雲の湧く山の向こうが眠る場所  
爪あとの深さまだまだ生きられる  
山門にしがみついている蟬のから  
パレットに溶かす今年の夏の夢  
花ひらく音をひろった調律師  
そのうちが続いてあせる未完の絵

寝屋川市 廣田和織

コンパスで書いた円から出られない  
AIにおふくろの味盗まれる  
記憶力どこかに置いてきたような  
言い訳の時には動く加齢脳  
前頭葉に行燈の灯をともし  
死ぬまでに乗っておきたい霊柩車

八幡市 武田悦寛

何もない一日終わり平和です  
巡礼も煩惱消えず遍路旅  
忘れものしたような僕の人生

好評につき限りなく生きてみる

時は老いがエラそうに出しやばる  
溜まってた愚痴月末にシユレッダー

大阪府 奥野健一郎

サングラスとれば一層怖い顔  
お世辞には輪をかけた世辞返しとく  
本心を掴みたいので怒らせる  
腰掛でやったバイトが天職に  
はやきつつ落とし所を探ってる  
負けて勝つそれが出来れば苦勞なし

三田市 稲角優子

書いて消す夜半迷える父の背な  
汗で書く地図に迷いの道はない  
愁う春そぞろに歩く思惟ひとつ  
あの余裕あふれる愛か陽炎か  
憂う世も花は苦勞を語らない  
夕風にささやく声は母なのか

泉大津市 助川和美

ハイチーズ撮つてる君もいとお顔  
無観客相撲行司の声響く  
どこ行こかついでに磨く祖父の靴  
マスクして疑心暗鬼の顔隠す

買わされるかもと試食はスルーする  
妻に感謝生きてるうちに言うてえな

沖繩県 宮すみれ

貸した金返せと言えぬ気の弱さ

ラミネート悪いうわさがくすぶつて  
オムライスふわふわ卵こぼれおち  
夕焼けと一体化する波の色

合言葉除菌しましょうマスクもね  
温暖化つばみのままの咲かぬ花

三次市 伊藤寿子

君想う心何万キロを飛ぶ  
運命と生命線をなでてみる  
神さまがくれた一人の時を愛で

搾る知恵浮かんで消えまた浮かぶ  
何度もなんども囁まれた犬を捨てられぬ  
最後まで見捨てぬ水の泡だとて

横浜市 長島亜希子

入学式待てず桜とハイチーズ  
同じ桜なのに浮き浮きしてこない  
夫子供 元気で留守がやはり良い

年上に頼まれ歳と断われぬ

何とかなるさ今まで無事に生きてきた  
お幸せそうだぼつんと一軒家

和歌山県 三枝真智子

この辺で負けるが勝ちと手を結ぶ

初恋の記憶を辿る万華鏡  
旅立ちの時が来た日の潔さ  
透き間風が吹いて空気が尖つてる

雨止んで忘れた傘の恍惚  
嫁ぐ日へ父の背中が揺れている

黒石市 石澤はる子

引導を渡される日を考える  
何もしていないのにまた赤信号

鈍感力に磨きをかけている痛み  
日に三度必ず笑う処方箋

かすみ草に支えられてる薔薇の位置  
春風の気まぐれ立位置を揺らす

和歌山県 西川千鶴

雑草と呼ばれて奮起するナズナ  
生真面目で融通きかぬ腹時計

友に出くわし思わず放す見切り品  
ピクニック鳥と分け合う握り飯

絵手紙にキュンと来た日はパンを焼く  
長生きの秘訣を亀に問うてみる

名古屋市 富田末男

沢山の罪を見ている信号機  
それぞれの涙に個性見えてくる  
まだ元氣張り切る汗は持っている  
信じ切る力で汗が光り出す  
古里へ帰れば心風になる

江南市 脇田雅美

所見ない人間ドック青い空  
譲られた席でこの世を語る古い  
棒読みの答弁にない人情味  
古い見据え捨てる捨てない採める日日  
嘘つけば言葉のリズム続かない

豊橋市 西郷紀美代

飲むと愚痴老いのわがまま聞き流す  
咳までも九官鳥が真似してる  
来る地震原発ゼロにせぬゆくえ  
ふる里の景色も人も入れ替わる  
咳聞こえ早早にして切る電話

大阪府 高木道子

ウイルスを横目に桜の乱れ咲き  
少しだけ心当たりがあるお世辞  
籠もる日々積んどく本の斜め読み  
マスクマスク日頃のずぼらが姦しい  
志村けんの追悼なのに大笑い

大阪市 石田孝純

駆けてきた春の土足は咎めない  
スマホから逃れ自由の海に出る  
旅先の古刹に置いてきた悩み  
AIに母のぬくもり計れない  
神の手が痒い背中に届かない

大阪市 柴本ばっは

細々とくらししてますが肥えてます  
元氣です皺も白髪もプラスして  
エンジン快調白いご飯がメチャ旨い  
嘔み合わぬそれでもずっと夫婦です  
有無を言わせぬ男料理は高くつく

大阪市 中村峰子

わが暮らし不要不急のことばかり  
暇だけどすることなくてスクワット  
暇だなあゴミでも捨ててひと仕事  
若返れマスクで変身背筋ピン  
悲しみも恨みも全て五七五

大阪市 樋口眞

朝昼夜体操をする自粛中  
テレビ好き外出自粛苦にならず  
コロナ禍を敬老パスも嘆いてる  
予定表この二か月は白いまま  
傘寿超え妻にすんなりありがとう

大阪市 降幡弘美

だまされたフリして聞いています嘘

ジイちゃんと孫が大好き時代劇

見物人減り伸び伸びと咲く桜

親も子も少し不安なクラス替え

自肅中完司氏の本読みこむぞ

大阪市 森 廣子

菜の花桜こんなに咲いて気が晴れぬ

一〇〇歩さえ叶わぬ今日の歩数計

塀に並んで時に愛嬌のある雀

地下道のそのまた下の蟻とパン

おいでおいで散った桜も浮雲も

堺市 楠井輝子

好かん奴めった切りする縄のれん

ン十年添うてやつとこ波長合い

断捨離も終活もなくあるがまま

嘘少し混せて空気を和ませる

さりげない無色透明のやさしさ

池田市 上山堅坊

飲むほどに本音しんみり吐く仲間

逃げ場ない事は言わない縄のれん

しっかりと仕舞った物が出てこない

深追いせずムード楽しむ老いの恋

根性がないぞと笑う亡妻の影

池田市 倉本一弥

かつこ良く見えて借物とは言えず

食欲も色気も失せて老け出した

うぶなんだ恋に理屈をつける君

金なくば健康までもへたり出す

すんだこと触れぬが肝の四十年

貝塚市 吉道あかね

まあまあで妥協しているコンバクト

夫婦にも時々ぼかしかけている

巣ごもりでふたり静かな音になる

昨日と同じ変わらない日がいとおしい

こんなこと掠り傷だと手を摩る

河内長野市 原熊知津子

これが私めそめそしてる暇はない

初夏の風受けハミングしてるロープウェイ

テンションの高さが弱者疲れさせ

明日への一歩今あるものを壊さねば

可愛がられ誉められて殻破れない

河内長野市 穂口正子

バラ少し買って贅沢楽しむ日

忘れずに身に纏ってる亡父の恩

顔みても私なんにも言いません

人は人私流です悪しからず

まず食べる明日が幸せ連れてくる

高槻市 三谷 白黒

無理するな今日から後期高齢者  
一本の長い眉毛が威張ってる  
コロナしか浮かんで来ない句作りで  
他人でなく妻に言われて腹が立つ  
今回は命がけです診る医者も

豊中市 貝塚 正子

話すほど心の垣根取れ楽し  
ジャンボくじ当たると怖いので買わず  
抱きあつて眠ろう同じ夢見よう  
女優ではないけどマスク サングラス  
信号が無くて迷った田圃道

豊中市 齋藤 奈津子

春うらら電車に乗って舟を漕ぐ  
外出自粛なんで知ったか野良猫も  
宅配値上げ小さな箱に詰めかえる  
長電話チャイムが鳴って切るチャンス  
バカ殿様だいじょうぶだあと出て来そう

寝屋川市 岡本 勲

点滅をしてから長い老いの道  
捨てられぬ夢があるから生きられる  
線香花火のどのあたりかな我が命  
老い深し又同じ文字めくる辞書  
年金が生きてますかと聞いてくる

神戸市 石川 克美

予定表バツバツのカレンダー  
ともすれば日にち曜日がわからない  
元気かとお隣さんへ電話する  
会えずとも川柳誌にて達者知る  
無事という幸せいつも忘れてる

神戸市 近藤 勝正

三密は夢でも避けて身を守る  
新型コロナ素知らぬ顔の金魚鉢  
孫家に卒業入学知らぬまま  
行くあてもないから家でサスペンス  
予定にはないが生きてくアドリブで

神戸市 斎藤 隆浩

歳ばれた演歌を聴いて口ずさむ  
交響曲ほくも知ってるジャジャジャーン  
トロフィーもカップも今はみんなゴミ  
明日のこと分からへんので今日も飲む  
思いつきりいこうぜどうせ波高し

伊丹市 岡村 風琴

遠回り見えないものが少し見え  
笑みひとつ陽だまりの輪がでかくなり  
逆らわず相手に合wash伸びるゴム  
オール一本漕いで人生夢無限  
蓋取れば糠漬けの底祖母がいる

尼崎市 清水 久美子

花粉症最中にコロナ現れる  
コロナ騒ぎを置き去りに桜散る  
差し当たり灰色になる上半期  
遣る瀬ない思いを分かつ長電話  
受け売りで強気発言してしまう

伊丹市 延寿庵 野 鶴

強力な助っ人がいる電子辞書  
なりふりをかまわず曾孫よく拗ねる  
脳トレの絵筆で描く明日の夢  
一度だけ覗いてみたい地獄釜  
能面のような顔行く都市砂漠

三田市 生 田 えい子

金婚に初めて気付く玉の輿  
娘も嫁ぎ雛壇相手ひとり言  
笑い袋閉ざした心隙埋める  
煮て笑い焼いて笑った母が逝く  
定年に追つてた夢が宙に浮く

三田市 辻 開 子

満開のさくら並木で深呼吸  
休校で母妻悩む新コロナ  
視聴率回すチャンネル新コロナ  
テレビまで老いの楽しみ取りあげて  
アルバムに卒入のない思い出を

三田市 馬 場 貴美江

夢うつつ囁くラジオ心地よい  
墓掃除ご苦労さんと風が吹く  
コロナ戦悲惨な数字気が滅入る  
孤独でも幸せ村はここにある  
月冴えるお伽噺は消えていく

三田市 森 玲 子

豊かさも昔の苦労知らぬ子ら  
今青春五十年ぶり友と会う  
手が届かぬ処にいつも夫の手  
登山道足より軽い姦しい  
満開の桜寂しく客もなく

宝塚市 太 田 としお

コロナに明けてコロナに暮れる日々である  
がんばろうじつと我慢の時である  
負けるのもいいもんですよたんまには  
孫結婚式は挙げぬと言うてくる  
愛妻は神さまからの贈りもの

三木市 山 口 ヨシエ

かつこいい生き方したい第二章  
酒に酔い情けに触れて花の下  
歩を緩め自省してます花曇り  
振り向けばひとりぼっちの風の中  
ゆつたりと上り下りの人生譜

奈良県 室田 行久

同義語をスマホで探し数合わせ  
付き合いかかつけ浪費金時間  
家計簿にゴメンネと買うルイヴィトン  
未曾有時の対処に見えるキャパシティ  
ベストセラ―小粋な濡れ場散りばめる

和歌山市 北原 昭枝

風邪引くな手紙よこしたままのひと  
捨て切れぬ手紙ころろの中に置く  
絵手紙に元気をもらう四季の風  
それからのあのひとに出す古手紙  
仏壇のちちははに書く一行詩

和歌山市 倉橋 悦子

見上げればしだれ桜のフラダンス  
春なのにこころ晴れないまま五月  
見て見ない振りも上手になってきた  
立ち話採み消す今日の言葉尻  
備忘録書き込むことが多くなる

和歌山市 佐藤 まき

欲しがりません耐えて育った私達  
不眠不休お医者さんとして生身です  
献身の愛を感じて手を合わす  
衣食住平和にも慣れ我儘に  
籠る日を癒すテレビのありがたさ

鳥取県 下田 茂登子

バス廃止買物出来ぬ過疎一人  
一番の自慢病氣のことばかり  
ウィルスの怖さ炬燵の中で聴く  
愛憎も消えております八十五  
生きた人死にたい人と湯の仲間

倉吉市 大羽 雄大

自家製のマスク コロナに立ち向かう  
目に見える黄砂の風がまだ良いか  
背伸びなどありのまんまで生きてみる  
マネキンの値札をそつと見てしまふ  
ご褒美のビールは汗をかいてから

倉吉市 宮田 風露

忘れまいと覚えた花の名が出ない  
すみません呆けない薬ありますか  
深呼吸したら脳味噌落ち付いた  
組板の音が目覚し起きようか  
るるんと今朝の化粧はのりが良い

倉吉市 若松 由紀子

また一軒更地になりし高齢化  
新型コロナ外出せずにマスク縫う  
夕暮に急ぐ事なし老い独り  
凶星です返す言葉が見つからぬ  
帰り来て灯る明かりのない我が家

境港市 藤原久直

ストレスを笑い飛ばして再始動  
さわやかな朝陽を浴びてウォーキング  
入浴剤露天湯めぐり癖になる

身の丈で生きておりますこれからも  
この背広二十歳の匂いしてならぬ

米子市 川本美津子

花を生け自己満足の日曜日  
変わらぬ日日記に記す事もなく  
散りそうで散らぬ桜の強さ知る  
春が来て明るいニュース待ちわびる  
長すぎた昼寝で余計出る疲れ

米子市 妹能令位子

まつりごと民のモラルにそっぽ向く  
破るから固い約束してしまふ  
言の葉がふわりと降りて五七五  
パスワード忘れへそくり凍結中  
年金が人並み以下で生きている

安来市 原德利

距離あけてマスク美人に囲まれる  
一筆を添えた手紙にある余韻  
膝ポンの句にあふれ出るドーパミン  
散る美学そんなに甘くないあの世  
癌手術あれから五年澄み渡る

雲南市 永見安子

日替わりの痛みに耐える生きている  
口喧嘩できる人あり良しとする  
新しい畑作ってボケ防止  
鎮静剤張って畑にいそぎ足  
歯車もいつの間にかみ合わず

笠岡市 小野美那子

さすがだね軸足だけは庇つてる  
本当はわたしも出せる馬鹿力  
乗ったけど大変でした口車  
間髪を入れぬ駄洒落で輪が和む  
ジンクス破り荒地に白い君の花

津山市 高橋由紀女

おぼろ気な記憶目覚めた言葉尻  
田起こしの先で微笑むすみれ草  
話し下手いつかいつかと列に居る  
夕焼けを何度見ただろお留守番  
良い事は長く続かぬ夢の中

広島市 田桑恵子

春日和浮きたつ心置き忘れ  
孫子来て老いのくらしに活入る  
前線の医師らの献身ただ感謝  
老若男女行き交う人は皆マスク  
買い出しの人があふれたデマの罪

広島市 常 國 喜 好

謝っているが正しいのは僕だ  
無駄遣い国を助けているつもり  
貧しさへ付度しない消費税  
叱られてぶらり出て行く猫の顔  
転ぶのは油断しているくんだり坂

広島市 松 尾 信 彦

悪筆を見事にフォロー絵が憎い  
暇つぶしノルマ求めぬ草捲り  
汗だけが次のハードル目差してる  
平凡な暮らして四季のリフレイン  
粗削り春のキャンペーンが研磨材

竹原市 若 年 幸 子

忍者のごとジワジワ迫るコロナ菌  
お花見もお弁当無く通り抜け  
温水器故障お風呂はどうしよう  
若いもんの言う事きけと諭される  
ピンチには差し出す友の手の温み

三原市 笹 重 耕 三

結論は桜が咲いてからにする  
取りあえず乾杯だけはしよう春  
なだらかな上りに今日も騙される  
思い出すとなんだと嗤う忘れ物  
路地裏を曲がれば騒ぐ好奇心

松山市 郷 田 み や

近道を選び無口になりました  
食材は家にあるものおもてなし  
いつもの朝いいえ昨日と違う朝  
雨の日は雨の音だけ楽しむ日  
恐いなら目を瞑ればと言う二歳

今治市 永 井 松 柏

風景に溶け込み父祖の田を守る  
ノーと言う勇気をいつも持っている  
目に見えぬ敵がガードをすり抜ける  
コロナ禍がアベノミクスを吹き飛ばす  
アイーンと笑って喜劇王が逝く

今治市 渡 邊 伊 津 志

蜻蛉の思案の羽根を閉じ開き  
マニフェストでは塞げない障子穴  
話し合う心に笑顔零れ出る  
紫陽花と語り合ってる蝸牛  
知恵の輪のような子離れ親離れ

大洲市 花 岡 順 子

急がねばメールの指が動かない  
取りあえず知識詰め込む新入社  
動揺は見せぬ毘だと知っている  
都会とのギャップ島には島の良さ  
神様の名前は知らぬけど拝む

高知市 三 谷 松太郎

ウイルスはいつもそこらで悪ふざけ

買物はコロナの敵と接近戦

若作りウイルス逃げてゆくかもね

終活をあたふた始め嫁拍手

S Fじゃ地味な話のウイルス禍

福岡県 本 田 さくら

校庭の桜満開さびしげに

雑草抜くかわいい花よごめんねと

あと五年金婚式よがんばろね

断捨離がもつたいないにすぐ負ける

ホーホケキョコロナいやだと鳴いている

宮崎県 黒 木 栄 子

古くとも大事に使う亡父の傘

古稀近し背中ちよこつと丸くなる

ずる休み上司またかと舌を打つ

晴れは晴れ雨は雨なりする仕事

マスコミの餌食タレント押し黙る

黒石市 北 山 まみどり

女子会の醍醐味だろウプチ旅行

投げ出した手足をなでている湯花

アルコール度数をあげていく夜更け

献立のヒントをもらおうバイキング

現実に引き戻される道の駅

栃木県 廣 瀬 良 磨

春うらら静かなままで散る桜

内緒です我家にもある特措法

五月病ゆるりゆるりと忍び寄る

買いだめに行くな行くなと言われても

満月になぜか奥歯がうずきだす

横浜市 加 藤 佳 子

庚子の異変はコロナだったとは

外出の自粛疲れに鞭を入れ

東京都重い政府の腰を蹴る

宣言下選別されていく業種

コロナには安安やれぬこの命

伊勢原市 小 田 幸 子

解体の最後に残った門構え

この場なら全部の桜見渡せる

こっち来て同じ桜を見たいから

風に散る桜見上げて犬威嚇

歩み寄る亡父が見上げた桜の木

富士見市 中 島 通 則

一人旅老いて不安が先に立つ

短針の速度で過ごす冬一日

喉元を過ぎてなかつたモリとカケ

いつもなら花見の誘い二つ三つ

ガガーリンの青い地球は今どこに

石川県 堀本 のりひろ

反省の畠耕し恥埋める

猫の目に映る私の寂しい目

八十路坂まだまだ遠い無の境地

もみにもまれて角を無くした好好爺

名古屋市 山本 三樹夫

三本の矢でもかなわぬ新コロナ

漁火に忘れた恋が燃え上がる

政治家の常套手段尻尾切り

団らんで微笑を交わす至福時

豊橋市 小松 くみ子

見つめ合う二人コロナが邪魔をする

他人事でなくなつて来た検診後

検査日へ身辺整理しないまま

足を出す夫とアンカ使う妻

大阪府 大浦 福子

目覚ましなど要らぬ昭和の鶏の声

妻は愚痴アサリ砂吐く台所

古代杉抱いて命の鼓動きく

薄氷を踏んであなたに逢いに行く

大阪市 阪本 秀子

会いたくてけれどもやっぱ遠い人

さ迷つてあなたの胸に落下傘

勤勉なアリはまがり角をしらぬ

アルバムの父母にあふれるメモワール

大阪市 中村 民子

一言で空気が変わる倦怠期

公園へ青い空気を吸いに行く

留守番でひとり大の字もて余す

会える日を指折り数え老母の顔

大阪市 前川 善之

老人をいきいきさせる介護風呂

生きるのに美食求める人の欲

咲く桜呑んだお酒も酔わぬ春

コロナウイルス街も無人で動きな

大阪市 松田 聰

くいとめろコロナ感染手を尽くせ

何事もセルフになつて便利かな

働かぬ蟻も二割はいるらしい

貧しくも心豊かであればよい

堺市 羽田野 洋介

冗談は休み休みにしてほしい

テストではあんなにうまく出来たのに

相手なくめつきり減つた飲む機会

アクセサリーつけない方がすつきりと

堺市 古川 光雄

年老いて丸くなるより突り出す

インスタ映え気にして料理味落ちる

冬の朝あったか便座にホッとする

学校のコロナ休みに孫が来る

河内長野市 渡邊 修

詠んだ句を妻が笑えば天を取る  
今日だけと毎日叫ぶテレシヨップ  
惜しまれる髭のダンスが先に逝く  
空を見て杖が傘かを迷う朝

四條畷市 西川 ひろし

無口でも安倍批判なら止まらない  
駅ピアノ人生を弾き笑顔生み  
二十代自分の八十路考えぬ  
サプリメント健康器具で百までと

吹田市 岩 口 のぞみ

卒業の思い出みんなマスク顔  
人混みが懐かしくなる異常事態  
行きつけの店のぞきつつ通り過ぎ  
子供デイスタンスなんは言うても10センチ

豊中市 荒 木 郁 子

地図広げ旅の楽しみ追いつける  
家に籠り衣類の整理じつくりと  
テレビ消し気持切り替え写経する  
皿数で日頃の手抜き挽回を

豊中市 松 田 蟻 日 路

若き日の二重瞼も今じゃ贅  
病巣が俺を見上げるジヨグの道  
じたくたいきジイジせんりゅうボクしゅくだい  
人まばら鳩たわむれているホーム

寝屋川市 川 本 信 子

ウィルスの恐さを知ってからの鬱  
恙ない暮らし今年は削除する  
手も足も動くが脳が動かない  
取りあえず脳の充電だけはする

寝屋川市 坂 本 ミヨノ

お呼ばれに行く手土産は何が良い  
ダイケアのおやつぜんざいおいしすぎ  
休日で音楽を聞くカラオケだ  
池の鯉大口あけて春飲んで

枚方市 谷 英 也

満開の桜恨めしコロナ君  
コロナ禍を吹き飛ばそうよ川柳で  
人紡ぐ縁を壊すコロナです  
人生の留年つづけ白寿まで

八尾市 田 邊 浩 三

楽しそう家族のマスク作る妻  
入社式無くても給料振り込みで  
満開の桜にマスクしてやろか  
キャンセルを恨む相手が多すぎる

神戸市 青 山 ひろし

私なら座れる席に居るリュック  
丸写し いえあちこちの貼り合わせ  
甘くないケーキ二つ目手が伸びる  
今日も行く先の見えないリハビリへ

神戸市 大頭 としお

自己主張聞いて上げます春の花  
釣りバカと寅さんを見てウサ晴らす

経歴は逝くとき全て灰になる

心寄せ合い花束になる笑顔

神戸市 輿水 弘

持病五つ問われてすつと出てこない

元氣交歓別れは杖を振り回す

あぜ道をしっかり固め雨を待つ

流れ星はかない人生みちを考える

神戸市 米田 利恵子

ワルツからタンゴ生き方上手だな

引退後カビもはえてるハイヒール

良い人にされてあれこれ頼まれる

熱心に同居を誘うバリアフリー

神戸市 松倉 正美

コロナめは三つの密が好きらしい

メイドインチャイナのコロナ世界中

各地ではコロナ封じの神頼み

一安心普通の風邪と知らされて

神戸市 山根 弘華

逆鱗にふれて下座にかしこまり

泣きやまぬ子どもなだめる母のえみ

九十年生きて我が身の幸を知る

ウィルスに負けじと今日もペンを研ぐ

芦屋市 新阜 義朋

川柳のお陰で古希に友が増え  
終活の鐘が鳴るのも他人事

探してたマドンナ今はドラム缶

介護する立場になって見えたもの

尼崎市 寺嶋 恵美子

布マスク二枚ですかあ安倍総理

財務省給付しぶって口歪め

キャベツネギ卵米有る生きられる

年の瀬はガハハと笑い過したい

尼崎市 山田 厚江

風が押している君に会いに行こう

コロナ来て真価問われる安倍政権

欠点はどこに置いたかわからない

ゴキブリにも嫁も子供もいるだろう

伊丹市 平井 富夫

新型コロナ新聞テレビうんざりだ

マスクしろもごもご言われ聞きにくい

説明に苦慮した処新型コロナ

桜見る中止理由が新型コロナ

三田市 木村 マユミ

無観客相撲の神事知りました

春嵐花びらたちの舞踏会

断捨離でモデルルームになりました

被害者にも加害者にもなるコロナ

三田市 幸田厚子

標本木菌にも負けず五輪咲く  
通学の声さえ聞けぬ春の朝  
晩酌は妻の釘煮で増える量  
お行儀は親がお手本子は習う

三田市 住吉美和子

ゴミ収集マスクの数だけ重くなる  
子を叱るママの声日々高くなる  
咳ひとつ疑心暗鬼の電車内  
花見頃今年はマスクの花が咲く

三田市 東内美智子

春のセンバツ婆のたのしみまた消えた  
鉤針棒針仕上がる物は手編み物  
老眼鏡何より貴重な私の眼  
お蔭さま寝付き寝覚めもすこやかに

三田市 中山昭美

目障りな上司なぜだか風邪引かん  
楽しさも八掛け位ズル休み  
おおげさな相槌打って怪しまれ  
花吹雪風を選ばず舞っている

宝塚市 岸田万彩

ウイルスに恫喝されている日本  
日本中シャッター街にするコロナ  
医療費をケチった国がまずダウン  
仕事も恋も目力勝負

丹波篠山市 澤良子

春一芽季節味わい舌つづみ  
自分だけ苦勞話を宝とす  
鉄柵に集うスズメの情報会  
種を蒔く笑顔のえくぼ待ち遠し

三田市 中山寅男

出世道隠す捨て去る黙ってる  
年毎に厚さを無くす志  
コロナって鼠算をば地で行くよ  
春風に三密無縁の八十路越え

丹波篠山市 藤井美智子

喜劇王奪った憎い新コロナ  
老若男女かまわず襲う新コロナ  
新コロナ前代未聞の恐ろしさ  
新コロナ命とお金いくら食う

丹波篠山市 横溝安子

寒椿想いをよせる恋心  
お誘いをことわりしたら次がない  
逢いたいよコロナがこわい来ないでね  
布マスク我が家は四人不足です

西宮市 高橋千賀子

息子から卒業できぬ老いた母  
コロナでも空はこんなに青いの  
春なのに春がどこかに行っちゃった  
遠足で歩いた頃が懐かしい

奈良市 尾畑 なを江

こんなにもマスク要るとは知らなんだ  
やりくりを上手にしても知らぬ顔  
自粛には馴れております昔から  
焼きイモはおやつと決めて二十年

生駒市 兒玉 規雄

一仕事終った気分健診後  
ナンプレを解くまでトイレ出られない  
丸い物すべてコロナに見えて来る  
コロナより愛嬌のあるタンゴ虫

和歌山県 森下 よりこ

コロナウイルスに翻弄されている地球  
あの悩み何だったのか過去になる  
満開の桜車で通り抜け  
コロナシヨックに普通のくらし見失う

和歌山市 定松 宏枝

失恋も春の野菜もほろ苦い  
ストレスに家の周りをぐるぐる  
此の際に地球丸ごとマスクする  
朝ごはんおいしいことはいいことだ

和歌山市 鍋嶋 澄子

こころ寂しさくらヒラヒラ散りまどう  
咲き乱る花の共演蝶あそぶ  
栓ひねりゃ水とめどなくありがたし  
人の力砂漠に奇跡用水路

和歌山県 まつもと もとこ

とつくりのくびれた部分熱い酒  
胃の中で不平不満を溶かして  
桜咲く自粛している空の下  
パスワード無しで明日は生きてみる

和歌山県 福島 一雄

隅田川土手もお舟も人出なし  
入社式なしで淋しげ会社員  
店仕舞い今日限りとに買う気湧く  
土産ものの底は浅いが意味深い

岩出市 村中 悦男

血圧もよし今朝の日課の薬分け  
書き終えた文に一息君恋し  
席譲る気のあるありそうな前に立つ  
完食を褒めれば妻は誇らしげ

鳥取県 飯野 菖子

和やかに囲む家族の楽しい輪  
戦後から辿り着いたか令和まで  
これからも跳ねて令和を生きて見る  
この指も草の力を知っている

鳥取県 西谷 悦子

学校休み一人ぼっちの子の淋し  
透析と薬のおかげありがたい  
夫の癖ガミガミ言わず許してる  
草取りが趣味へんな趣味だと思ふ

鳥取県 橋谷 静江  
余生とはあきらめないで頑張らず

土弄り土にまみれて種を蒔く  
老犬を老婆がつれて散歩道

コロナ菌正常生活いつ出来る

鳥取市 大前 安子

音痴でもベツトは顔を見て聞いて  
チャレンジを忘れていたと気付く春  
軋んでも泣かないなんて決めてない  
朝シャンで夜の決断勇氣沸く

鳥取市 山野 すみれ

言い訳をつぶやくたびに下げる価値  
げんこつをくれる人からもらう愛  
失敗のたび本心を確かめる  
見栄張って千円募金箱に入れ

鳥取市 上山 一平

いつまでも話し弾んだ無二の友  
弾んでは尾ひれがついて愚痴も出る  
ほめことば聞こえぬふりで天仰ぐ  
ずり落ちる足をかばって砂丘ゆく

倉吉市 伊藤 嘉昭

血糖値朝の散歩が下げました  
若き日は家が雀荘妻嫌う  
パソコンはお金かからぬインドア派  
鉛筆が川柳作れと催促す

倉吉市 堀 かずこ  
年ですが今朝も元氣よスクワット

しゃぼん玉飛んだこわれずもどつてね  
つまずいて泣くな嘆くな明日は来る  
さらさらと小筆で描く字が走る

境港市 中井 虎尾

どっこいしょ人がいなけりや無言立ち  
妻と俺紅白二人ボケくらべ  
おもてなし考えて見りや裏の事  
咲いた花サクラいろして笑ってる

松江市 相見 柳歩

正直に咲けば笑ってくれますか  
地味だった影が主役になってくる  
飛ばされて着地したのは君の胸  
うれしいね大人になって褒められる

松江市 山根 邦代

気がつけば雲が静かにみつめてる  
コンセント一つはずして春座敷  
毎日を弱気にならずルンロンと  
正座して投句の清書しています

出雲市 黒目 ひでお

春うらら夢の蕾を咲かせたい  
巨星落つコロナに負けた志村けん  
買いだめも品切れもありパンデミック  
コロナ禍に3密守り自己自衛

益田市 篠原 紋次郎

春の陽がふんわり乗った三輪車  
真冬でも夜空が語る物語  
母の顔今日も見えまます浮かびます  
何を言うあれは夜中の酒の声

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

米寿には米寿の手毬はずませる  
蝶が舞うたった一句の句の中で  
罪一つ水に流して髪を梳く  
即席でみそ汁の味忘れられ

美作市 岡本 余光

しみじみと自然の中のこの命  
老いてくる涙腺涸れてない安堵  
円卓に上下はないというけれど  
テレビからお上の声がよく届く

尾道市 小川 道子

温度差が距離を隔てている壁だ  
現など抜かして居れぬ昭和史よ  
ひと昔信じた過去がノックする  
冷静になって気付いた有頂天

尾道市 小畑 宣之

我が妻のにつこり後が高くつき  
何よりも元氣一番親孝行  
狼の優しさ注意SNS

若さより年相応にチョイ元氣

竹原市 土井 輝恵

蟄居して働く事の楽を知る  
パンドラから這い出してくるコロナ菌  
断捨離へ金目の物は何もなし  
地球儀の喧騒富士の沈黙よ

府中市 岸田 武

マスクした地球を神が覗き込む  
二重丸つけた行事も中止とか  
ウォーキングマスクが溝に捨ててある  
咲き切つて過労死でしよう椿落つ

松山市 大内 せつ子

ハクモクレンの下で出逢つて散つた恋  
無添加な風にぶきつちよ笑われる  
強炭酸のシュワーに解けたわだかまり  
泣きたい時に「今はだめ」つて言うでしょう

阿南市 小畑 定弘

冷や水にならぬ程度のラブゲーム  
春を跳ぶネクタイ一本引き抜いて  
温め酒今日という日はほほほほだ  
花時計止まったままの二週間

佐賀県 真島 久美子

恋に効くビフィズス菌が死んでいる  
ぬいぐるみダニの話をして困る  
手作りのマスクをくれる魔女がいる  
報告があるとシロツメクサが言う

唐津市 岩崎 實

他人には譲りたくない裏の山

晴れ舞台奪ってコロナどこへ行く

電話での葉の処方できますよ

大きい鉢植え替え黄バラ匂い出し

唐津市 前田 廣幸

タラレバで買わず楽しむ宝くじ

生け花の剪られ曲げられ見詰められ

合格の笑顔が見えぬマスクかな

咳ひとつ視線が八つ突き刺さる

沖縄県 あら さくら

筋トレの器具はいつしかお蔵入り

雨の日も習慣づいてウォーキング

貸し借りも出世払いとやる気出す

どこへ行くフエイクだらけの世がこわい

沖縄県 禱 モモト

サークルはお互い礼儀忘れずに

付き合いは即かず離れず悩まずに

活動の外出自粛ストレスに

命までコロナワクチンまだですか

弘前市 高森 一呑

雨の日は梅も静かに物想う

ライバルの背中が壁で進めない

盲点の壁を打ち抜く弁護人

おみくじに願えばかりを背負わせて

五所川原市 むらの ひとり

散乱も写真に撮れば芸術性

コンビニで香典袋とアンパンと

雨の窓ジャコメッテイの女行く

姥捨がおぼろに見える新コロナ

山梨県 小林 金剛

ひるまずに病見つめる時の音

苦しさにちよつぴりだつこ雪ダルマ

ゆるやかに冬はくれます耳鳴りと

父さんと呼ぶ女房のいとしさよ

東京都 高岡 弥生

久々の投句郵便値上がりし

新型で忘れていたよ花粉症

コロナ離婚お互い譲り感謝して

ランチしよいつになつたら出来るかな

横浜市 巖田 かず枝

空耳か愛犬忍び振り返る

膝腰に油を注ぎ医者通い

マスクして美人美男の人の波

老い二人テレビの音の大きさよ

京都府 北野 クニオ

トランプもコロナ菌にはお手上げだ

新学期別れと出会ひ忘れまじ

一人立ち記念に贈る腕時計

沈丁花甘い香りに心晴れ

(秀爺さん、仲西賛郎さんは39頁にあります)

# 誹風柳多留——二篇研究 84

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男・山田昭夫

石川道子

清博美

721 十五日から八おほこの声がハリ

小栗 おほこは、①ういういしく、まだ世馴れぬこと。またその人(男女)。②鱷ほらこの幼魚(江)。

鱷は、ごく小さい稚魚をオボコまたはスバシリ、淡水にはいつてくるころをイナ、海に帰って成熟したものをボラ、きわめて大きい成魚をトドなどと呼ぶ(日)。

少々悩ましい句である。

(一)「おほこの声変わり」は、「おほこ」と呼ばれるような初々しい子供が成長して声変わりし、大人に近づいたという意にとれるのだが、実はそうではなくて、ボラの幼魚の「おほこ」のことだというのが技巧という句とする。

『東都歳事記』(東洋文庫)の「六月十五日」

の項に、

芝浦小鱷網 十四日迄製禁にて、今日よりおろし、十六日より売初る由、前板に

云り。今此沙汰なし。

とあり、また同書の朝倉治彦氏の注に、

小鱷網 例えば「江戸総鹿子名所大全」に「同日(十五日)芝浦にて小鱷網はじめて下す。当日迄は禁制也」

とある。

察するに、鱷の乱獲を防ぐために六月十四日まで禁漁で、十五日から解禁になるのだが、その頃には「おほこ」の鱷も「すばしり」にまで成長している。主題句はそのことを、人間で言えばちょうど声変わりの時期だと詠んだものだろう。

六月十五日の天下祭と「すばしり」を詠んだ句がいくつかあるのはご承知の通りである。

金屏風立々にやうられぬ肴也 傍一三

すばしりをそへて金びやうぶをかへし 一二八

(二)ただ、次のような「声変わり」の句を見ると、少々不安になる。

瀬戸物と娘われると声替 六四二

かんにうの入た娘は声かわり 二八五

わられたで近江のおかね声かわり

太棹を遣ッて娘の声替り 一一六三

つまり、「女は男を知ると声変わりする」という俗信があったのではないか(確認できないのだが)。とすると主題句は、娘と見せ

かけて鱷のことだという事ではなくて、逆に鱷と見せかけて娘を詠んだ句ではないかとも思える。すなわち、天下祭のとさくさで男を知ったおほこ娘という設定である。さて、如何であらうか。

おほこ娘も祭から気がそれる 傍二一三

細井(一) 説のように思われます。天下祭のとさくさで、ということがあったとも思えず。

田舎の祭礼なら充分考えられますが……。

伊吹(一)と(二)の二重構造か?

山田(一) 説だけでしょう。(二) 説は考え

すぎなるべし。

清（一）だけでよいと思う。

### 722 蛤を捨て命をひろふなり

小栗 何か寓意があるかどうか分からず。ただそれだけの句とすると、汐干狩りに行き夢中になって蛤を採っていたら、いつの間にか潮が満ちてきて危険な状態になったので、蛤も捨てて這々の体で舟に戻ったというような光景を想像すればよいのだろうか。今一つ釈然としないが、「捨てる」と「捨う」が対になっているところがミソというだけの句ということしておく。

汐干かりあまりけん気てふかミ也

安二満一

汐干にハ舟の無いのか先キへにけ 明元義4

清 賛。

### 723 目二ツが千両につくとんだ事

小栗 よく分からない句。柳雨氏も一応「江戸歌舞伎」に採ってはおられるものの、「不可解」としておられる。

そこで、「目一つ」と「千両」をキーワードに関係ありそうな句を拾ってみると、次の

二つ。

一ト目千両花みちのきくの蒸

九二一六

千両の折りがミまなこ壱つなり

安五満一

両句とも「江戸歌舞伎」に採られているが、甲句については注釈なく、乙句については、三面子先生が「五世半四郎は太夫と称し俗に目千両の名があった」とした上で、「此句、五世半四郎とも二世团十郎とも両様に解せらる」と述べておられる。（ただし、五世半四郎は一七七六年〜一八四七年の人。安五の句とは時代が合わない。三面子先生の勘違いか）。

いずれにしても、この二句からみて、主題句の「目一つ」は「一個の目」（隻眼）の意ではなく「目だけで」の意と思われ、歌舞伎役者のことを詠んだ句としていいのではなからうか。句意は、目だけで千両の値打ちとはいやはや凄いな、というような事と思うが、具体的な役者をさしているかどうか、わからない。

細井（九二一六）の「一ト目」のように「一と目見るだけで」という礎説でいけるように思えます。声など聞かなくても……。

山田 賛。一目千両。

清 賛。

### 724 茸狩も内府八手前芸者也

小栗 手前芸者は、自力で営業している芸者。自前の芸者（主題句引用）（「日国」）。

謡曲「盛久」を題材にした句のようである。謡曲では、平家の侍である主馬盛久が、捕らえられて由比ヶ浜で処刑されようとしたとき、観音経の霊験で首切りの太刀が折れてしまふ。これに頼朝も感動して盛久に盃を与えて舞を所望するのだが、この時のワキ（土屋某）が次のように述べる。

いかに盛久、盛久は平家譜代の侍武略の達者、その外乱舞堪能のよしきこしめし及ばれたり。一年小松殿北山にて、茸狩の遊路の御酒宴において、主馬の盛久一曲一奏の事、関東までも隠れなし、ことさらこれは喜びの折なれば、ただ一さしとの御所望なり、急いで仕り候へ。

主題句はこの件を踏まえて、内府（小松内府重盛）は茸狩りの時の酒宴でも、自前の芸者（家来の盛久）に踊らせたというのである。

やはなあそびハたけがりに男まい 三〇二七  
奈ただけの中で盛久まひを舞 明二仁2

清 賛。

# 愛染帖

## 新家 完司選

(投句278名)

金魚鉢洗えば僕がすつとする  
尼崎市 山田 耕治

(評)金魚の為に洗っているのだが、鉢がピカピカになると気分もスッキリ。水垢と一緒にストレスも消えた。掃除の効用だ。  
豊中市 きとつこみつ

つくし一緒に摘んだ夫はもう他人

(評)ツクシが出る頃になると仲良く摘んだことを思い出す。あれから歯車が少しずつずれて、とうとう他人になってしまった。  
鳥取市 奥田 由美

さよならと区切りが出来ぬ片思い

(評)喧嘩別れならスツパリ諦めることもできるが、心の中で一方的に恋しているだけなので、なかなか「さよなら」が出来ない。  
大阪市 江島谷勝弘

せめてせめて六十代に戻りたい

(評)青春時代に戻りたい、などと賢沢は言わない。せめて十年ほど前までに戻れたら遣り直したいことがあるのだが…。

温泉が出たらいいなど畑を掘る  
米子市 伊塚美枝子

(評)温泉がダメなら石油でも埋蔵金でもいい。何か金目のものはないかと掘ってみるのだが、出てくるのはミミズぐらいである。  
堺市 澤井 敏治

パンデミックなんて言葉を知る不幸

(評)この度のコロナウイルス禍で初めて耳にした「パンデミック」なる言葉。何も無ければ知ることもなかった不愉快な言葉。  
箕面市 中山 春代

ゴミ出しの日だけになった予定表

(評)コロナ騒ぎで川柳の句会も大会も中止。コンサートも演劇もグランドゴルフも中止。予定表には「ゴミ出し」しか書いていない。  
堺市 奥 時雄

閑居して不善もなさず句もできず

(評)不要不急の外出は控え、人との接触を8割減らすようにとのお達し。だが、「暇になつたら句が出来る」ものでもなさそうだ。  
神戸市 近藤 勝正

株主じゃないが気になる空のバス

(評)街をぶらついていると鞭で叩かれそうな雰囲気のコロナウイルス禍。バスは空っぽタクシーも欠伸。体力のない企業は破綻だ。  
大阪府 高木 道子

志村けんの追悼なのに大笑い

(評)コロナ肺炎で他界した志村けんの追悼

番組で「バカ殿」等を観て大笑い。不謹慎ではあるが、志村けんにとっては本望だろう。  
益田市 篠原紋次郎

美しい日本があった昭和初期

昭和ちよい覗きたい時サザエさん  
唐津市 山口 高明

フーテンも竹の子族も居た昭和

羽曳野市 徳山みつこ  
白塗りの下は過ぎにしあれやこれ  
三田市 堀 正和

タワマンにポツリ一人で住んでいる

西宮市 緒方美津子  
何でだろ家では読まぬ週刊誌  
札幌市 三浦 強一

認知症テスト怖くて先送り

米子市 池田 美穂  
分単位でしあわなこと見つけよう  
唐津市 仁部 四郎

賢妻のアクセサリーで米寿です

岡山市 永見 心咲  
ペットボトルマイク代わりにUS A  
土佐清水市 辻内 次根

早くいけばよかつたと思う歯医者

黒石市 北山まみどり  
食欲と目盛りがケンカばかりする  
倉吉市 牧野 芳光

次々に地球がベルを鳴らしている

雪囲いほどけば春が躍り出る  
黒石市 石澤はる子

泣いた日の桜 笑った日の桜  
大阪市 平井美智子

自粛して桜愛でつつ散歩する  
大阪市 平賀 国和

団子より花を愛でよと天の声  
河内長野市 中島 一彌

桜愛で池を廻ってひとひねり  
大阪市 田中 廣子

ため息をたくさん聞いて散る桜  
松山市 郷田 みや

菜の花と話せばレモン味がする  
鳥取市 大前 安子

いかなこの不漁が妻を不機嫌に  
宝塚市 岸田 万彩

風邪引いて寝こめばそれが休肝日  
弘前市 高瀬 霜石

ありがたい苦言に箸が進まない  
和歌山市 古久保和子

天敵はおはぎ・まんじゅう・さくらもち  
おふくろと呼ばれ一瞬身構える  
広島市 松尾 信彦

定刻の田舎のバスに乗り遅れ  
案の定雪不足には水不足  
高槻市 安田 忠子

武者飾り独り居になり出しもせず  
産寧坂七味を買って旅終わる  
高槻市 安田 忠子

早蕨を味わう舌へどんと春  
奈良市 山本 昌代

五分だけと蒲団にもぐる春の朝  
高槻市 片山かずお

使うあて無くて貯まっていとお金  
富田林市 中村 惠

空気だけは有料にしてほしくない  
鳥取市 岸本 宏章

AIには数値出ぬ勘持つわたし  
京都市 藤井 文代

脅す医者それが起点の万歩計  
高槻市 富田 美義

夕方になると食べたい物を作る  
大阪市 谷口 義

カメレオンアーマーを着て仕事する  
笠岡市 藤井 智史

川柳は神様からの賜り物  
神戸市 大頭としお

セカンドライフ川柳杖にのんびりと  
岸和田市 雪本 珠子

生き様が見え隠れする五七五  
奈良市 尾畑なを江

鉛筆もあくび菓ごもり句も飽きた  
西宮市 福島 弘子

夢の字のくさかんむりが錆びてきた  
寝屋川市 川本 信子

逡巡の心を吐いてボールペン  
鳥取県 門村 幸子

佳句目指しチビた4B躍らせる  
尼崎市 寺嶋惠美子

佳句できた心弾ませ句会場  
鳥取市 山下 凱柳

形状記憶句会の後は二次会へ  
池田市 上山 堅坊

鏡の前誰も見てないファッションショー  
長岡京市 山田 葉子

面取りをしながらこれからの話  
松江市 石橋 芳山

蒸し芋になる温熱敷布団  
岡山市 大石 洋子

生き様は泣いた笑ったずつこけた  
神戸市 山口 光久

無観客となつていきますお葬式  
鳥取県 斉尾くにこ

傷だらけの膝をかかえて日向ほこ  
府中市 岸田 武

明日開く蘭食い尽くす蝸牛  
沖縄県 禰 モモト

老成と老衰の距離測りかね  
枚方市 山口弘委智

相統が終われば他人この時世  
三田市 丹羽 美惠

性感帯枯れて肩の荷をおろす  
丹波篠山市 酒井 健二

頑張ってニンニクうなぎ生卵  
寝屋川市 伊達 郁夫

丹波篠山市 長谷川善輔  
春寒がコロナとやらを持ち来たり

香芝市 大内 朝子  
コロナショック今年の桜笑わな

三田市 大西 重男  
桜だより見ても行けない自粛です

尼崎市 藤田 雪菜  
コロナ菌桜窓から眺めよう

河内長野市 黒岩 靖博  
コロナ菌今年は庭で花見酒

米子市 後藤美恵子  
この世相に観るひとまばら桜散る

西宮市 高橋千賀子  
ウイルスが春の予定を消してゆく

岡山県 高岡 茂子  
また延期ならんで買った入場券

長野県 丸山 健三  
学校も職場も休み春の闇

香芝市 山下 純子  
夫婦でも二メートルよと距離をおく

奈良県 安福 和夫  
濃厚接触辛い今はとんと無し

佐賀県 真島久美子  
クシャミすら出来ぬマスクの奥の闇

橿原市 安土 理恵  
マスクして悪女も淑女らしく居る

貝塚市 吉道あかね  
手作り夫婦と分かるペアマスク

弘前市 稲見 則彦  
母ちゃんの手づくりマスク乙なもの

米子市 吉田 陽子  
薄っぺらなマスクに命かけて出る

和歌山市 土屋起世子  
マスクかけ曇る眼鏡も私も

堺市 内藤 憲彦  
孫に送って僕にはマスク貰えない

大阪市 古今堂蕉子  
見える敵いとやさしいと思ひ知る

鳥取市 前田 楓花  
この時期に主治医が風邪をひいている

岡山市 丹下 凱夫  
宝くじ買いにコロナの街に出る

八尾市 村上ミツ子  
自粛要請はいはいと聞いている

高槻市 富田 保子  
全力でただ今自粛しています

米子市 成田 雨奇  
ひと声でみんな自粛の気味悪さ

大阪市 横山 里子  
高齢者外へ出るなど群雀

下松市 有海 静枝  
ステイホーム無口の行に似る独居

箕面市 広島 巴子  
自粛中一花咲かず案を練る

神戸市 山崎 武彦  
こうなればばつんと一軒家で暮らす

越谷市 久保田千代  
日本の影が恐怖に揺れている

和歌山県 森下よりこ  
逼塞蟄居我慢出来ませぬ日本人

奈良市 米田 恭昌  
引きこもりたまに換気もしています

河内長野市 木見谷孝代  
あんなにも集えた日々がなつかしい

松山市 栗田 忠士  
お喋りにはきつい「3密」の自粛

東大阪市 佐々木満作  
三密を避けてパズルと詰め将棋

大阪市 宇都満知子  
負けないぞ誌上句会で手を繋ぐ

尼崎市 清水久美子  
3カ月会えぬ酒友へ恋心

三田市 村田 博  
自粛自粛赤提灯は泣いている

八尾市 山根 妙子  
居酒屋も端と端とに二人だけ

鳥取市 田中 天翔  
アマビエよコロナ退治を頼みます

芦屋市 新早 義明  
あんたより最期の頼りECMOしか

神戸市 松倉 正美  
感染者ゼロと言ひ張るお国柄

大阪市 森 廣子  
もうここいらで許しておくれ新型コロナ

京都市 清水 英旺  
コロナ菌なんぼのもんじゃ酒あおる

朝霞市 前田 洋子  
飲めるうち飲んでおかねば新コロナ

大阪市 藤田 武人  
駅弁とビールお家で旅気分

米子市 竹村紀の治  
胃袋と手の消毒も忘れない

三田市 上田ひとみ  
もう少し闘うために飲むお酒

美作市 岡本 余光  
雑念がふくらんでくる只の酒

羽曳野市 吉村久仁雄  
酒なして観てもつまらぬ雪月花

和歌山市 北原 昭枝  
満開の桜おぼろに酒に酔う

安来市 原 徳利  
爺ちゃんはナイトケアに酒を飲む

奈良市 大久保眞澄  
柔軟に対処できます休肝日

今治市 永井 松柏  
欲望を増幅させるアペリティブ

河内長野市 森田 旅人  
赤ワインすこし分かつてきた傘寿

富士見市 中島 通則  
産直のプリに魅かれて縄のれん

三原市 鴨田 昭紀  
三杯も飲むとわたしが溢れ出す

三田市 北野 哲男  
起爆剤 消火剤にもなるお酒

松原市 森松まつお  
ほろ酔いの時が一番ボクらしい

堺市 楠井 輝子  
しみじみと酔うて候禁酒明け

藤井寺市 鈴木いさお  
オベ終えて先ず訊く「呑んでいいですか」

三田市 福田 好文  
隠すもの何もなくなる泌尿器科

石川県 堀本のりひろ  
キャンサーと闘う友へ応援歌

池田市 奥園 敏昭  
闘病の友の立場で見る菖蒲

熊本市 杉野 羅天  
人災も天災もあり生きにくい

鳥取市 夏目 一粹  
死ぬことに触れず微笑む老い二人

松山市 大内せつ子  
片道切符だけでじゅうぶん海に逢う

豊中市 上出 修  
くねくねの道が大好き天の邪鬼

岡山県 田中 恵  
三ツ星に負けない母の団子汁

鳥取市 山野すみれ  
はるばると来た甲斐あった地元メシ

堺市 坂上 淳司  
暮敵の忌に佛前で棋譜起こす

四條畷市 吉岡 修  
墓守る兄の息子に感謝する

西子市 西田美恵子  
子の継がぬ田畑へ今日も耕運機

藤井寺市 太田扶美代  
役に立つ婆ちゃんぶりを見てもらう

大阪市 高杉 力  
コナモンで大阪らしいおもてなし

大阪市 大川 桃花  
運動不足掃除で少し補填する

鳥取市 副井ゆたか  
キャッシュレス小銭欲しいが貯まらない

大阪府 米澤 俣子  
愚痴ひとつ言うたび皺が増えていく

瀬戸内市 宮宅比佐恵  
笑いじわ笑顔しすぎと褒めておく

松江市 相見 柳歩  
幻のままで初恋しまいこむ

箕面市 出口セツ子  
ネバーギブアップ明日へ恋をする

鳥取市 倉益 一瑤  
お隣のニュースを美容院で聞き

福井県 伊藤 良一  
モノクロの老いの暮らしに妻の紅

横浜市 加藤 佳子  
友の愚痴ポディーブローが効いてくる

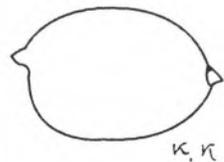
唐津市 岩崎 實  
長崎駅待っていますよ新幹線

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句365名)



「文房具」 水野 黒兔 選

君セーラー僕パイロット十二歳  
 消しゴムと鉛筆喧嘩好きらしい  
 算盤が歴史語っている老舗  
 けしゴムが丸くいとしくなっていく  
 暗号がおどる私だけのノート  
 サッチャーンも逝ってしまった絵日記帳  
 コンパスよりお椀を伏せて描いた丸  
 6Bで描くとやさしい父になる  
 チビた鉛筆も長いキヤップへ生きてきた  
 クレヨンの手作り暦家族の輪  
 平仮名の名前が残る竹の尺  
 つつましい暮らしの中にある四宝  
 目の保養文房具屋の待ち合わせ  
 好きな匂の花丸用に赤いペン

唐津市 仁部 四郎  
 鳥取市 中村 金祥  
 弘前市 福士 慕情  
 三田市 上田ひとみ  
 八王子市 川名 洋子  
 神戸市 奥澤洋次郎  
 岡山市 工藤千代子  
 明石市 糀谷 和郎  
 三次市 伊藤 寿子  
 河内長野市 辻村 ヒロ  
 堺市 坂上 淳司  
 橿原市 居谷真理子  
 箕面市 中山 春代  
 豊中市 齋藤奈津子

「文房具」 鴨谷 瑠美子 選

アイパッドこれも私の文房具  
 メモ帳がスマホに変わり字は書かず  
 自分史のノートに記す入選句  
 受付に苦手な筆が置いてある  
 落語家は扇子を箸に筆に変え  
 此れが最後十年日記買いました  
 公文式孫と始める英会話  
 点と点繋ぐ定規のリズミカル  
 筆ペンをみんな試してあきらめる  
 コンパスで描く丸には味がない  
 赤ペンを持つているので嫌われる  
 どの筆で描こうか妙の夕茜  
 万年筆インクはいつもピュアブルー  
 指先も筆記用具の仲間入り

東大阪市 西村 哲夫  
 大阪市 坂 裕之  
 河内長野市 藤塚 克三  
 和歌山市 福井 菜摘  
 豊中市 貝塚 正子  
 藤井寺市 吉田喜代子  
 堺市 内藤 憲彦  
 東大阪市 佐々木満作  
 米子市 竹村紀の治  
 高槻市 片山かずお  
 黒石市 北山まみどり  
 大阪市 津村志華子  
 弘前市 稲見 則彦  
 鳥取県 斉尾くにこ

手帖から予定を消した春の凶	和歌山市	倉橋	悦子
菓ごもりに鉛筆弾む五七五	大阪府	大浦	福子
赤ペンで地球に描くバツ印	和歌山市	西川	千鶴
鉛筆を削る正義の剣として	今治市	永井	松柏
シュレッダーにからぬ想い今も抱く	松江市	藤井	寿代
消しゴムの屑は推敲知っている	河内長野市	中島	一彌
消しゴムが知ってるわたくしの本音	三原市	笹重	耕三
消しゴムのクズに強気を注意され	奈良県	長谷川	崇明
青春は色鉛筆の十二色	和歌山市	定松	宏枝
点と点繋ぐ定規のリズミカル	東大阪市	佐々木	満作
消しゴムのカスに抗弁させている	米子市	竹村	紀の治
春の野に燥ぎ過ぎだよ絵の具皿	大東市	小川	賀世子
消しゴムの滓がたまつてゆく頭	下松市	有海	静枝
鉛筆舐めて書いた手紙に嘘はない	鳥根県	伊藤	寿美
丸文字のノート無限の海光る	三田市	稲角	優子
顧みてわが人生はH・B	河内長野市	村上	直樹
鉛筆の先に生まれるのはポエム	大洲市	花岡	順子
6Bに翼が生まれ一行詩	河内長野市	原熊	知津子
筆箱にたつぷり詰めておく明日	西予市	黒田	茂代
文具屋を覗くと青い匂いする	越谷市	久保田	千代
分度器はいらぬ愛を撃つ傾斜	笠岡市	藤井	智史
分度器の等分ピザが美しい	神戸市	富永	恭子

どっこいしよ鉛筆握り脳に喝	堺市	齋藤	さくら
鉛筆が弾んでくれる答案紙	枚方市	丹後屋	肇
キャップ付け鉛筆いのち長らえる	札幌市	小沢	淳
気合い入れ喜寿新品の文房具	羽曳野市	藤原	大子
封開けてインクの匂いする便り	三田市	丹羽	美恵
悪筆を助けてくれぬモンブラン	堺市	柿花	和夫
弘法じゃなし筆はやつぱり高い方	尼崎市	山田	厚江
代書屋のペンは知ったかぶりをする	藤井寺市	高田	美代子
ペン持ったままで逝いたら最高だ	大阪市	川端	一步
文房具脳の衰え知っている	羽曳野市	三好	専平
パソコンが書道の文化消して行く	西宮市	福田	正彦
墨汁は失礼だぞと怒る筆	南あわじ市	萩原	狸月
画用紙を提げただけで画家になる	倉吉市	牧野	芳光
ボールペンも鉛筆買った店で買う	大阪市	宮崎	シマ子
移りゆく時代文房具の進化	鳥取市	夏目	一粹
付けペンで追伸に書く花ことは	伊丹市	延寿庵	野鶴
追伸の想い自筆で認める	羽曳野市	吉村	久仁雄
入学祝い万年筆と決まった	三田市	九村	義徳
表彰状記念品にはボールペン	鳥取市	土橋	螢
キティちゃんで統一してる一年生	豊中市	池田	純子
無限大の夢詰め込んだランドセル	奈良県	渡辺	富子
児の描くクレヨン画には父は居ず	唐津市	山口	高明

妬心溶いても溶いても足りぬ絵の具皿

西予市 西田美恵子

鉛筆を削る閃き消えぬ間に

堺市 柿花 和夫

文房具脳の衰え知っている

羽曳野市 三好 専平

鉛筆の先の世界は無量大

神戸市 敏森 廣光

片っ端からスマホが退治文房具

宝塚市 岸田 万彩

霞が関でよく売れている消えるペン

寝屋川市 廣田 和織

指先も筆記用具の仲間入り

鳥取県 斉尾くにこ

テストでは委縮していた文房具

米子市 池田 美穂

鉛筆とメモ紙あればほとくの勝ち

弘前市 高瀬 霜石

手放せぬものに修正液がある

土佐清水市 辻内 次根

自分史を綴る消せないボールペン

大阪市 石田 孝純

亡夫の文具すべてタバコが匂ってた

大阪市 柴本ばつは

白が勝つ色鉛筆の背比べ

大阪市 藤田 武人

色鉛筆好きな色からやせ細る

三田市 福田 好文

6Bが今は私の分身だ

倉吉市 田中紀美恵

ガラバゴス尻目に進化文房具

唐津市 前田 廣幸

どの品もいとし家業の文房具

和歌山市 堀 富美子

鉛筆をとがらせて書く素の心

鳥取県 門村 幸子

プライドの高さを分度器で測る

松江市 石橋 芳山

文房具苦勞の日々は語るまい

高槻市 富田 保子

キラキラの夢に羽ばたく文房具

長野県 丸山 健三

一房のブドウ貧しき文房具

藤井寺市 太田扶美代

文具屋を覗くと青い匂いする

越谷市 久保田千代

集めると売るほどになる文房具

豊橋市 西郷紀美代

ペンで書きコロナが消した予定表

奈良県 長谷川崇明

文房四宝まずキイボードプリンター

河内長野市 森田 旅人

ピカピカの文具揃えて式未定

三田市 幸田 厚子

双児入学名書き印押し腱鞘炎

羽曳野市 磯本 洋一

物差しを腰にヒーローだ

岡山市 大石 洋子

ホッチキスばちんと綴じている秘密

和歌山市 土屋起世子

一筆箋選るたのしみの鳩居堂

寝屋川市 森 茜

鳩居堂の便箋にするいい知らせ

松山市 宮尾みのり

消しゴムの屑は推敲知っている

河内長野市 中島 一彌

ボールペンやっとメジャーになりました

東大阪市 秀 斧

文具屋を溜り場にした昭和っ子

犬山市 関本かつ子

定規で線引く生真面目な人惚ぶ

和歌山市 松原 寿子

亡夫の文具すべてタバコが匂ってた

大阪市 柴本ばつは

分度器の等分ビザが美しい

神戸市 富永 恭子

好きな匂の花丸用には赤いペン

豊中市 齋藤奈津子

筆箱を象に踏ませたコマージュナル

愛媛県 玉井 勝順

6Bが玉座を占めるペンケース

鳥取市 谷口回春子

テストでは委縮していた文房具

米子市 池田 美穂

文房具自宅待機に哭いている

安来市 原 徳利

巣ごもりに鉛筆弾む五七五

大阪府 大浦 福子

ホッチキスでは絶対留めぬお札状  
墨汁は失礼だぞと怒る筆

鳥取市 岸本 宏章  
南あわじ市 萩原 狸月

コンパスの円にふたりの守備範囲

長岡京市 山田 葉子

コンパスで描くと冷たくなった丸

大阪市 若本 安代

コンパスの範囲以内で抱く慕情

和歌山市 古久保和子

拜啓もかしこもはぶく一筆箋

和歌山市 松原 寿子

分度器に地球の歩き方がある

鳥取市 岸本 孝子

コンパスの輪を抜け出せぬ共犯者

岡山市 永見 心咲

白い記憶カラフルにしてペン走る

鳥取市 倉益 一瑤

この文具証拠隠滅ほう助罪

奈良県 渡辺 富子

分度器を当てる凶器になる角度

高槻市 松岡 篤

句箋紙の海で鉛筆狼狽える

佐賀県 真島久美子

未来爆発クレパスのなぐり描き

神戸市 山崎 武彦

人を斬るペンに修正液は無い

羽曳野市 徳山みつこ

核よりも強いペン持つ人に会う

松山市 柳田かおる

この星を最後に救うのはペンだ

羽曳野市 吉村久仁雄

物差しを変えて程良い幸福度

大阪市 栃尾 奏子

三角定規の尖った先にまだ戦

橋本市 石田 隆彦

秀 句

大阪市 森 廣子

コンパスで描く被爆のシーベルト

松山市 栗田 忠士

文鎮の威厳私にまだ足りぬ

生駒市 飛永ふりこ

反戦を喋るノートの旧字体

和歌山市 土屋起世子

心ばかり気持を込めて筆で書く  
もう一度行つてみたいな購買部

寝屋川市 富山ルイ子

官僚が好きそう消せるボールペン

泉大津市 磯野不二夫

消しゴムで消せる適度の嘘も混ぜ

松原市 森松まつお

文房具にもありました貧富の差

奈良県 中原比呂志

ケシゴムを借りた戦後のあの苦さ

宇部市 平田 実男

キーボード文房具だと名乗り出る

吹田市 太田 昭

一本のペンで大賞いただけた

米子市 妹能令位子

ホッチキスでは絶対留めぬお札状

倉吉市 田中紀美恵

鉛筆とメモ紙あればほくの勝ち

鳥取市 岸本 宏章

ストレスがペンの先から解けて出る

弘前市 高瀬 霜石

未来爆発クレパスのなぐり描き

寝屋川市 廣田 和織

筆箱の鈴が闘争心を生む

羽曳野市 徳山みつこ

油性ペンうっかり遺書に試し書き

佐賀県 真島久美子

消しゴムで消せない昭和史の汚点

宝塚市 岸田 万彩

読めぬ書写文房四宝重すぎる

奈良県 安福 和夫

正眼の構えて削る肥後守

弘前市 福士 慕情

プライドの高さを分度器で測る

広島市 松尾 信彦

秀 句

札幌市 三浦 強一

文鎮の威厳私にまだ足りぬ

松江市 石橋 芳山

君セーラー僕パイロット十二歳

生駒市 飛永ふりこ

一筆入魂墨は濃い目に磨っておく

唐津市 仁部 四郎

秀 句

香南市 桑名 孝雄

「ゆるゆる」

(投句 239名)

山下凱柳選



まやかしのタガの外れた自由主義  
距離保ちゆるゆる長いお付き合  
涙腺がゆるゆるとなる孫の声  
卒寿へとゆるゆる歩む八十路坂  
ありのまま流れのままに生き八十路  
ああ余生ゆるりゆるりとまいます  
自粛疲れ警戒心がゆるくなる  
ゆるゆると地球を攻めるコロナ菌  
涙腺がゆるゆる過去の込み上げる  
ゆるゆるで隙間だらけの赤い糸  
ゆるゆるとローカル線に乗る余生  
ゆるゆると老化進んでいた五感  
ゆったりと四季の流れにのる命  
ゆるやかな空気の中に幸つなく  
ゆるゆるの笑顔を孫につけ込まれ  
ゆるゆると船こぐ夢の日向ぼこ  
ゆるゆるの絵文字を添えて来る便り  
二千万ないがゆるゆる生きのびる  
断捨離へ口ばつかりの重い腰  
ゆるゆるとおいでと亡夫の声がする

倉吉市 牧野 芳光  
下松市 有海 静枝  
鳥取県 山下 節子  
大阪府 磯島福貴子  
大東市 小川賀世子  
香芝市 大内 朝子  
箕面市 出口セツ子  
豊中市 松尾美智代  
河内長野市 梶原 弘光  
橋本市 石田 隆彦  
八幡市 武田 悦寛  
大山市 金子美千代  
高槻市 原 洋志  
堺市 遠山 唯教  
羽曳野市 吉村久仁雄  
明石市 糍谷 和郎  
八尾市 山根 妙子  
寝屋川市 川本 信子  
三原市 笹重 耕三  
大阪市 津村志華子

ゆるゆるが嫌でせかせか生きている  
つまんでもお肌が元に戻らない  
10%の税がゆるゆる首絞める  
色あせてゆるゆるとなる赤い糸  
ゆるゆるの絆になった老いふたり  
ゆるゆるの結び目でいい老いの恋  
ノーブラの解放感が癖になる  
ゆるゆるの二人にもある起爆剤  
ゆるゆるの夫婦の絆締めなおす  
ゆるゆると歩くと妻と離れちゃう  
ゆるゆるへピシッと妻の楕が飛ぶ  
ゆるゆると暮らせばボケが忍び寄る

佳句

白寿過ぎゆるゆる生きるこれからは  
ゆるゆるの脳を騙して生きている  
ゆるゆるのネジを締められぬ平和ボケ  
ゆるゆると歩いてきたがはや八十路  
疲れたな老いがゆるゆる来るらしい

人

百歳へゆるゆる生きや無理しなや  
地  
ゆるゆるとまいるか余生風まかせ  
天  
止まること忘れゆるゆる夫婦独楽  
軸

米子市 伊塚美枝子  
松山市 柳田かおる  
堺市 坂上 淳司  
八王子市 川名 洋子  
奈良県 渡辺 富子  
池田市 池田市 上山 堅坊  
豊橋市 西郷紀美代  
河内長野市 森田 旅人  
香芝市 山下 純子  
鳥取県 竹信 照彦  
大阪府 原田すみ子  
鳥取市 岸本 孝子  
大阪府 榎本 舞夢  
大洲市 花岡 順子  
長野県 丸山 健三  
枚方市 谷 英也  
米子市 成田 雨奇  
堺市 内藤 憲彦  
大阪府 大浦 福子  
鳥取市 夏目 一粋

「幸い」

(投句 233名)

田中 ゆみ子 選



幸いにも四季が巡って来る日本  
我慢強さ互いにあつて五十年  
幸いをたずねて山の一軒家  
海に千山にも千の幸がある  
ジャンボくじ当たらないのも幸せか  
幸せはあふれる水の国に住む  
パレットに春を溶かしている至福  
なんとなく越えて来ましたあれやこれ  
不幸よりちよつと幸福寄りにいる  
訊かれたら幸せですと答えます  
幸せはふるさとあつて温い風  
幸いに私は祈る武器を持つ  
転げたが幸い鼻は低かった  
山の彼方の幸い今も信じてる  
チリメンジャコに小さなエビを見つけたよ  
幸せの感じ方にもある個性  
ナイトクラブもライブハウスも縁がない  
幸いは隣に君がいてくれる  
幸いと思えばみんな幸いに  
幸いだ命大事と気がついた

河内長野市 中島 一彌  
大阪市 原田すみ子  
岐阜県 喜多村正儀  
橿原市 居谷真理子  
鳥取市 岸本 宏章  
豊中市 松尾美智代  
神戸市 山崎 武彦  
三田市 上田ひとみ  
東京都 川本真理子  
岸和田市 宮野みつ江  
鳥取県 山下 節子  
香芝市 山下 純子  
米子市 後藤美恵子  
羽曳野市 吉村久仁雄  
豊中市 水野 黒鬼  
三田市 堀 正和  
松原市 森松まつお  
富田林市 中村 恵  
大阪市 内田志津子  
西宮市 緒方美津子

躓いて欠点自覚できた幸  
心にも空にも余白埋める夢  
おはようの笑顔が揃う目玉焼  
ことさらに昨日も今日も変化なし  
躓いたところに落ちていたチャンス  
幸甚と言うべきなのか酒がある  
びりびりとした神経を持つてない  
生きている事が幸いだと思う  
幸いはこのあばらやにありました  
つつましく暮らして待てば年金日  
ラッキーと思えば角も丸く見え  
幸いにもまだ歩けます笑えます

池田市 上山 堅防  
枚方市 山口弘委智  
河内長野市 落葉 ふみ  
越谷市 久保田千代  
明石市 糍谷 和郎  
岡山市 丹下 凱夫  
土佐清水市 辻内 次根  
高槻市 富田 保子  
松山市 栗田 忠士  
河内長野市 木見谷孝代  
富山市 伴 よしお  
堺市 澤井 敏治  
南あわじ市 萩原 狸月  
倉吉市 岡崎美知江  
弘前市 高瀬 霜石  
和歌山市 福井 菜摘  
堺市 奥 時雄  
横濱市 菊地 政勝  
弘前市 福士 慕情  
大阪市 平井美智子

人間に生まれて幸いだと思う  
平凡な日常というありがたさ  
コロナに勝つ人は叡知を持っている

天  
軸

## 大阪を再び文学都市に

— 川柳の役割に期待して —

立命館大学名誉教授 木津川 計

今年の番傘新年会「番傘フェスタ2020」で冒頭こんな挨拶をさせていただいた。

いま大阪は大変な事態に陥っている。大企業の本社が東京へほとんど移っただけではない。人材もまた東京へ流出、大阪はかつてない人材払底都市になってしまったのだ。

大阪自由大学という市民で支える生涯学習大学がある。その事務局から私に電話がかかってきた。「三代目の学長を選ばねばなりません、学長と恃むに足る人物が大阪にいません。どうしたらいいでしょうか？」実際、そんな人物が大阪にいない。早い話、50年代から90年代の大阪は一大文学都市で、名立たる作家がひしめいていたのだ。順不同だが、こんな作家だ。

井上靖、山崎豊子、小松左京、筒井康隆、黒岩重吾、花登篁、藤本義一、眉村卓、

土井行夫、宮本輝、有明夏夫、館直志、阪田寛夫、伊東静雄、安西冬衛、生田花朝女、石浜恒夫、桂信子、田辺聖子、長谷川龍生、橋本多佳子、杉山平一、小野十三郎、長谷川幸延、香川登枝緒、井上俊夫、司馬遼太郎、富岡多恵子、小田実、金時鐘、鈴木六林男、塚本邦雄、飯干晃一、難波利三、新橋遊吉、阿部牧郎、岡部伊都子、道浦母都子、有栖川有栖、高村薫、島田陽子、梁石日、玄月、後藤正治、かんべむさし、堺屋太一、開高健、山口瞳、秋田実、長沖一、庄野潤三、富士正晴、庄野英一、黒川博行、東野圭吾、玄侑宗久、これら作家に加え、川柳の岸本水府、麻生路郎がいた。それに戦前派の藤沢恒夫に織田作之助を加えると優に六十人になろうという盛観である。

いま在阪で健筆中の作家は有栖川有栖に高村薫ら五、六人でしかない。これら大阪における文学の貧困が大阪における人材払底状況をことに露にするのである。なんとしても文学者を生み出し、育たねばならない。その手掛かり足掛かりを私は川柳に求めたいのだ。

大阪は最大の結社、番傘、相競う川柳塔発祥の川柳の都なのである。詩に短歌、俳句の都を特定し難いに比べ、川柳の都が大阪であること、世人も納得してくれよう。

大阪を再び文学都市に復権させる。その先頭に大阪の川柳が立ってほしい。

大阪が人材払底都市になってしまった原因は、大阪の都市格が低下したことによっている。大阪は魅力ある憧れの都市でなくなつたのだ。「がめつい」に「ど根性」に「どケチ」に「ど派手」な情報ばかりを発信してきたツケが回ってきたのだ。

私たちは麻生路郎の残したことを忘れていない。「川柳は人間陶冶の詩である」。岸本水府も「あくまで川柳は文学でなければならぬ」と記した。大阪を川柳の都にした二人の先達の高い志を大阪の川柳家は受け継いでいるはずだ。その志で大阪の川柳を盛り上げ、大阪の文学を復権させてほしい。

(葦群53号より転載)

## 英語 de Senryu ⑩

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

思ひきり惚れて 毒婦とは 知らず死に

*he fell in love with her  
and he died without knowing  
her dark purposes*

金ですむ恋もさみしきものうち

*one of the saddest things  
is when love ends  
because of money*

fell(fall 原形) in love 惚れた died(die 原形) 死んだ without ~なしに knowing 知ること  
dark purpose 悪たくみ saddest いちばん寂しい love ends 恋が終わる because of ゆえに

### ～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句④ 英語ハイク・センリユウの創作法

英語ハイク・センリユウは海外でも国内外で盛んに作られています。一方で、英語のハイクやセンリユウに興味はあるが具体的にイメージがわからないとか、日本語の俳句・川柳さえできないのに英語では無理との声を聞きます。英語によるハイクもセンリユウも作句の形式はほぼ同じです。ハイクを例にして作り方を説明しましょう。

俳句の有季定型や切れ字の約束事は、英語ハイクでは5-7-5音節(17音節以内)で書き、季節感を入れ、切れ字はダッシュやカンマで表します。現在の瞬間や観察を重視し、3行分け、無韻、現在形で書きます。次の例では10音節を持つハイクになっています。

*thunder peal— (3音節) thun·der(2) peal(1)  
water spilling (4音節) wa·ter(2) spill·ing(2)  
from the vase (3音節) from(1) the(1) vase(1)*

(雷鳴や花瓶の水のこぼれ落つ) Mariko

切れ字の詠嘆、3-4-3音節の短さで勝負しています。花瓶の水がこぼれるほどの雷鳴の激しさを捉えていまね。作者は英語のハイクも日本語の俳句も初めての挑戦です。

次はヨーロッパの名勝地クロアチアから届いたセンリユウを紹介しましょう。鎌の動きとともに揺れる胸元に作者の目線が注がれて、面白く粋なセンリユウですね。(庭仕事鎌のリズムに胸ゆれる)と日本語を付けてみました。

*garden work—  
a woman's breast moves  
to the rhythm of the hoe Stjepan Rozic*

作者のステファンさんは、クロアチアを代表するハイク・センリユウ詩人です。

# 初歩教室

## 題一 スポーツ

### 居谷 真理子

いまさらですが、川柳は五七五、十七音の文芸です。たまにベテランの作者が破調（十七音以上、または以下）の句を作られますが、あれは計算づくで効果を狙っていること。初歩のうちは真似ない方がいいでしょう。上五だけは少々音字数が増えても、中七下五でリズムを整えて下さい。表現を変える、言葉を探す、それが勉強です。自由すぎる句を巧い句と勘違いしてしまうことも無きにしもあらず。今回は特に破調句が目につきました。

（原は原句 参は参考句）

原野球相撲の勢いでコロナやつつけられないか

（東）美智子

全部で24音！あれこれ並べずポイントを具体的に一つに絞って

参あの張り手でコロナやつつけられないか

原芽が出ずでスポーツ万能選手

マユミ

16音。

参万能と言われた選手目が出せず

原あの強さ幻だったか徳勝龍

勝正

五八六。

参幻か徳勝龍のあの強さ

原宝ものマラソン賞状ひとつもち

開子

五八五。

参マラソンの賞状いまでも宝物

原少年の汗は未来のホープまっしぐら 眞智子

20音。スポーツを感じさせたい

参少年の汗まっすぐに甲子園

原薬よりスポーツが良いと医者が言う 光雄

五八五。

参スポーツの方が効くよと医者の方

原春の選抜ウイルスに負け泣いている (南) 廣子

参センバツがウイルスに負け泣いている

参センバツが悔し泣きする不戦敗

原門先で朝のひととき子とキャッチ (澤) 良子

17音にまとめたくて「キャッチ」。やはり

苦しいですね

参父と子のキャッチボールの朝の道

原睡眠栄養スポーツ守って喜寿

寧

言いたいことはよく分かります。リズムを

大切に

参睡眠と食事運動守り喜寿

原つり合わせスポーツウエアと技量が令位子

参ウエアだけ一流選手並みだけど

原スポーツウエア丁度合うのが見つかった風露

もう少しうぬぼれて川柳にしましょ。

参スポーツウエアこれなら十は若返る

原金と銀僅差で分かつ運不運 (豊) 良子

参金と銀ほんのわずかな運の量

原ジム通い朝な夕なに風呂替わり マキコ

参朝な夕な風呂を目当てのジム通い

原走るは無理鉄棒ならと蹴りあげる えい子

参鉄棒ならできるはずだと蹴ったけど

原スポーツも勉強もできモテている 亜希子

いますよね、こんな人。もう一押し。

参スポーツも勉強もできイケメンで

原聖火リレーコロナウイルス水をさす 一平

参ウイルスが聖火リレーを通せんば

原ウォーキング土手を真っ直ぐ影2つ 厚江

土手を真っ直ぐ行く、影が土手に真っ直ぐ

落ちる、どちらでしょうか。「2つ」は「ふたつ」

または「二つ」に。

参ウォーキング今日も土手行く影二つ

原アプリカの出番失う甲子園 通則

参 バブリカも出番失う甲子園

原 もくもくとリハビリ励みまだまだと 千代

「もくもく」「まだまだ」、並べると面白い

言葉です。もつと生かしましょう。

参 もくもくとリハビリまだまだと励む

原 机上では学べぬ教ええたとある (川) 信子

題のスポーツを匂わせたい。

参 机上では学べぬものをグラウンド

原 後で飲むビールのうまさゴールン 義明

参 ゴールンうまいビールがさあ飲める

原 ラグビーは俄ファンでもりあげた ゆき

説明だけに終わらず、もうひとひねり

参 ラグビーの俄ファンの生き残り

原 八十路過ぎベツトに引かれ散歩です 英也

「犬」と言った方が情景が鮮明になります。

参 八十路過ぎ犬に引っぱられて散歩

原 リハビリをスポーツならば楽しめる 貴美江

参 リハビリをスポーツとして楽しもう

参 リハビリもやはりスポーツ精神で

原 スポーツの時間を奪い去るスマホ 紀美代

参 指だけを運動させているスマホ

原 スポーツで流す涙は真珠色 正美

真珠色の涙：ロマンチックですが作りすぎ

の感あり。

参 スポーツで流す涙の透明度

原 太つてるだけでなれない相撲取り 道子

面白い句ですね。もう少し丁寧

参 太つてるだけではなれぬ相撲取り

原 大食漢スポーツジムの帰り道 閑

参 飲んで食うスポーツジムの帰り道

原 スポーツは小中高でワンチーム 紋次郎

スポーツの種類をはっきりさせたい

参 草野球小中高でワンチーム

原 スポーツと言わず趣味なら続きそう 一弥

参 スポーツとまでは言えないこれは趣味

参 水泳と言えない趣味の水遊び

原 スポーツが苦行となつてはや余生 秀 彦

参 スポーツが苦行となつてから余生

原 スポーツがもはや苦行となる齢

原 その昔運動会は好きでした 千賀子

好きでした、と過去形なので「昔」は不要

参 万国旗運動会は好きでした

原 スポーツジム初歩で足腰傷めてる ミヨノ

参 スポーツジム初日で故障足と腰

原 無観客選手に届け熱視線 のぞみ

いいですねえ、この句。ここは助詞を加え

て強調したいです。

参 無観客の選手に届け熱視線

原 体脂肪スポーツジムで削ぎ落す 三樹夫

真面目な句に少し面白みを加えて

参 体脂肪ジムに落ちてるちよつとだけ

原 遺伝子がつきり出てるアスリート 泰 宏

参 遺伝子の闘いであるアスリート

参 アスリートやはりカエルの子はカエル

原 球春に心がはずむ野球ファン ひでお

この句のようになつてほしかったです。

参 球春にファンの心は冬のまま

「佳句」

招致したおもてなし美女今は母 厚子

週二日ZUMBA踊つて解き放つ (加) 佳子

丹前でピンポンをした草津の湯 (貞) 正子

マラソンにシューズの底が加勢する 奈津子

ガチンコの汗降りかかる砂かぶり 行久

「今月の推せん句」

横綱がいよいよ土俵の緩い土 まつもともしこ

おすもうさんなんと素敵なネーミング

ラグビーボール人生なぞるように跳ね 磯野不二夫

伴 よしお

# 川柳塔鑑賞

同人吟 石橋 芳山

— 5月号から

たこ焼にたこがない時たまにある

きとうこみつ

たこ焼きの楽しみの中にあるタコの触感ですよ、そのタコがないのは欠陥商品とか、詐欺とかに分類されるのではないのでしょうか。たこ焼き屋さんにご注意するべきですよ！絶対。

私より目立つ男はみな狡い

伊達 郁夫

男はプライドが高い生き物。少なからず自分が一番と思っているところがある。自分が中心でないと気に入らないのに、他の男が目立つのは面白くない。そんな男は狡い奴なのだ。

雰囲気気を付けながら泣きました

太田扶美代

空気が読める人なのでしょ。しかしこれでは傷ついた心を涙で癒すことが出来ない。誰もいないところで思いつ切り泣いてください。

使わなくなったら溜まりだすお金

永田 紀恵

当たり前前のことを、平然と述べているようですが、これがなかなかうまくいかない。お金の貯め方を教えて欲しい。

人様と比較するのをやめてみる

小野 雅美

人の行動や考えを聞いてから見てから、自分がどうするか決めるのが、当たり前のように思うけど、それをやめるのは勇気がいるだろう。意外と自分の新発見があつて面白いかも知れない。

マスクしてます隣座っていいですか

鴨谷留美子

この句を読んだときには、ビックリした。今の世情がこの句を読むだけで、はっきりと掴むことが出来る。しかし、いつになったらこんな配慮の要らない生活が戻るのだろう。

いい人と言われる内は平社員

榎本日の出

ごもつともな事と思います。人の上に立つと、嫌なことも言わなければならず、嫌われ者になっていく。平社員ならそんなこともないだろう。

腹立ちをギョウウザの皮で包み込む

寺本 実

腹立ちをどのように抑えるか静めるか、まさかギョウウザの皮に怒りを包むとは思ひもつかない。

バーゲンを巡るベンツの燃料費

藤田 武人

高級車とバーゲンとの落差が面白い句になっている。でも意外とこれが人の欲を表している現実なのかも知れません。

ウクレレを習う前からアロハ買おう

太田 省三

恰好から入るタイプなのでしょう。上機嫌でウクレレに向かうのだが、直ぐに飽きるこれが現実だろう。

土曜日は息子がふつと消えるのだ

野下 之男

息子さんも成長されて、自分の世界を持つ様になったのでしょね。彼女でもできたのかな？青春ですね。

## 憧れのベンツに乗れる霊柩車

谷口 修平

ステータスはベンツなのです。それに乗れたときに霊柩車。憧れを掴み取るにはそれ相応の努力が必要だと思います。そのステータスへの努力が人の生き方なのでしょいか？

## 液体の石鹸どうも頼りない

堀 正和

いまは液体石鹸が主流で、固形石鹸はほとんど見なくなつた。固形から液体に代わるころなんとなく、この句のような氣持があつたように思う。昔の使い慣れた日用品を懐かしく思い出す。

## 権力はレッドカードを突く走る

酒井 健二

権力者はなんでもできと、勘違いしやすいパワハラがそれである。ただ大声を出しているだけの無能な権力者が多い。

## デキシーで派手に送ってほしいって

安土 理恵

私も同感です。湿っぽく静々と涙で送られるより、派手に賑やかに踊って笑って送ってもらいたい。生前に曲名を指定してお願ひしておきます。

## いつからか飾りボタンになつていた

福井 菜摘

先頭を走つて旗振りなど一生懸命やつていて、リーダーの存在だと自負していたら、いつの間にか飾りでしかなくなつていた。時代遅れの存在になつてしまつたのか、淋しさだけが残る。

## 二十四時間使い切る目と切れない日

古久保和子

アクティブに動き回つてそれなりの成果を得て充実感を感じた日と、その逆の日のことか、いずれにしても充実した毎日を送つておられる。

## 咳すれば遠巻きになる白マスク

大石 洋子

まさにコロナウイルスの感染の真つただ中にあり、周りの人たちも神経質なほどに敏感になつている。外出の自粛をして感染収束を待つしかないようです。

## いつからか首輪がグイと食い込んで

永見 心咲

失礼だが怠惰的な生活からの太りだしの、プレスレットの食い込みですか？はたまた、リーダーになつての制約がきつくなつてのことかは不明です。

## はぐらかすゆらす空気は読まぬもの

斉尾くにこ

思いやりからなのか、興味が無いからなのか話し相手の、話したくない空気は読まぬものと、スルリと体を交わす言葉に「・・・ゆらす」との表現がさらりとしていて憎さを感じる。

## 死神と甘い約束してしまつ

竹村紀の治

死神さんとは懇意の仲なのでしょうが、私は会つたことも連絡方法も、知りませんので約束などできません。死神さんを紹介してください。

## 画像見る主治医の顔を読んでいる

稲見 則彦

この氣持ちよく分かります。レントゲン写真見てもよくわかりませんので、ついついドクターの表情で良し悪しの判断をしている。私も小心者です。

## そう言えばヒアリはその後どうなった

金子美千代

そう言えばそうなのですよね、数年前はヒアリがどこで何匹発見とか騒がれていましたよ。それが今は全国・全世界でコロナなのです怖い時代です。

# 水煙抄鑑賞

— 5月号から

大久保 眞 澄

混浴でちよつとドキドキした足湯

常國 喜 好

カモシカもゾウもクマも、裾をたくし上げて湯に浸る。足湯といえど混浴ではないか。純な心が騒ぎ出す。わかります。ふて寝していると余計に腹が立つ

花岡 順 子

腹が立つからふて寝。結局そのことばかり考へてなお腹が立つ。残念ですね。あかん事鬼の居ぬ間にしたくなり

楠井 輝 子

思い切り散らかしたままでいたい私。輝子さんの「あかん」はどんな事ですか。お蕎麦屋でこころ豊かになる二人

上山 堅 坊

フレンチでもカフェでもなく蕎麦屋さん。垣根のない、いいお付き合いをされている二人にも、この句にも拍手です。

ロボットのボヤキは人が聞いてやる

廣川 和 織

しんどい事はロボットにお任せ。でもロボットだつてしんどい。ボヤいてください。ボヤくロボットはエライい。

けんか腰なつかし今は及び腰

奥水 弘

言うべきか此処は大人になるべきか

米田 利恵子

青臭さが抜けて言葉を飲み込む大人になる。認めたくはないが及び腰になっている自分に気付いて、何だか悔しいデス。

返らぬと知つてる金を貸す辛さ

岸田 万 彩

貸した金は返ると思うな。母がよく言いました。大人は辛いのです。よつほどのことで昼から飲んでいる

中筋 弘 充

飲み助でも昼間から飲まない。よくよくのことでしょう。許してあげましょう。もう揺れぬはずだと舟に乗っている

妹能 令位子

乗った舟が木の葉だったのかもしれない。でももう大丈夫。信じて乗っていきましょう。まさか泥舟ではないでしょうね。

真つ白な方が遺言書と思つ

月波 与 生

心余りて言葉が足りぬのか、遺すことを不遜だと思ふのか、後のことは良きに計らえ、とは究極の遺言かもしれません。氣ばつても水は油になれませぬ

太田 としお

水は水で、油は油でしか生きられない。無理は禁物。とは言え、お互いを少しでも理解しようとしてこそ人間なのかも。

ご近所は性善説でおつき合い

大羽 雄 大

人には添うてみよ。これも母がよく言つてました。いい人ばかりですよ、きつと。こちらの気持ちには伝わるものです。

縁側でふわりふわりと浮いている

廣瀬 良 磨

マンションでは味わえない縁側の居心地。浮遊感にも似た、心身共に空気に委ねた感じ。横に誰かがいたりして…。

絵心は無いがピカソは知っている

藤原 久 直

ヒト様の、まして巨匠の絵を云云するのは気が引けますが、私だつてピカソの名前も絵もよく知っていますよ。



物体を見詰める (3)

人間の暮らしを変えた発明品はいろいろありますが、そのトップは「モーター」でしょう。今回の扇風機はもちろんですが、冷蔵庫の圧縮機を動かしているのもモーターです。

電気毛布仕舞う頃には扇風機

高原の花をイメーシ扇風機

守備範囲きつちりこなす扇風機

扇風機 仲をとりにもつかの如く

私のようにきこちない扇風機

時計めがねブラも外して扇風機

最近ではエアコンが普及して扇風機の出番が減ってきたようにも思えますが、就寝時にタイマーをセットして使用する人も多いようです。また、エアコンを敬遠する高齢者にとって強い味方で、まだまだ姿を消すことはないでしょう。

文句も言わず首を振る扇風機は几帳面な仕事人の姿。スイッチオンで直ぐに風を送ってくれるのも嬉しい限りです。

冷蔵庫にも聞いてみる晩ご飯

開けたまま考えるなと冷蔵庫

入れ過ぎの警報ほしい冷蔵庫

暗闇に光 冷蔵庫がくれる

冷蔵庫の中に逃げたい熱帯夜

停電にたちまち困る冷蔵庫

買い置きのお菜や冷凍食品を保管しておくのに欠かせない冷蔵庫。開けている時間が長いと「ピーピー」と警告音がで

ますが、「ピーピー、満杯です！」の警報はまだのようです。特売品を衝動買いする奥様方には必要でしょう。このように便利な道具も停電になるとたちまちお手上げです。

掛けているときは私の椅子である

眠くなる椅子とならない椅子がある

折り畳み椅子で世相を傍受する

気を付けて坐ろうコマのついた椅子

適当に呑んでぐるぐる回る椅子

もらい泣き椅子もいっしょに泣いている

公園のベンチもレストランの椅子も、不特定多数の人が入れ替わり腰掛けます。しかし、自分が座っている間は、誰にも邪魔されることのない「私の椅子」に違いありません。

同じ椅子でもコマの付いたのやクルクル回る回転すは転

げ落ちる恐れあり。特に酔っばらには要注意です。

黄信号おいでおいでと呼んでいる

赤になるたびシグナルが睨まれる

赤信号犬がちらりとこちらを見る

行く予定ないが信号青になる

青信号安全だとは限らない

外人の前では守る信号機

信号の赤は「止まれ」で青は「進め」ですが黄色は曖昧です。停止線の手前で黄色になれば「止まれ」なのでしようが、車の位置や速度によっては通過した方がいいでしよう。

青信号で渡っていた歩行者に車が突っ込む事故が多発して

います。信号は命の保障まではしてくれませんが。外国人の前

で礼儀正しいのは「恥の文化」の象徴とも言えます。

簡井 祥文

古久保和子

松山 芳生

足立千恵子

藤井 智史

高森 一呑

井丸 昌紀

牧野 芳光

七反田順子

有澤 嘉晃

村上 玄也

廣田 和織

早川 遯行

長沼 暢子

鈴木 道子

斉尾くにこ

松尾美智代

松尾柳右子

# 『麻生路郎読本』余滴 (58)

## 路郎の「川柳人協会」⑥

葉原道夫

昭和14年10月号に、「川協名譽會員十四年度の顔振れ」が報告されている。

〈柳界の向上發展を期するため、昭和十四年八月から昭和十五年七月までの本協會の名譽會員が左の通り推薦された。

順不同・敬稱略

- 榎田竹林 (静岡) 藤本蘭華 (京都)  
石原青龍刀 (北京) 龜井晟修 (函館)  
伊志田孝三郎 (名古屋) 村田周魚 (東京)  
森 東魚 (豊中) 中澤濁水 (高知)  
大谷五花村 (福島縣) 蛭子省二 (朝鮮)  
早川右近 (横濱) 池田可宵 (朝鮮)  
川上三太郎 (東京) 小林不浪人 (青森)  
前田五健 (松山) 前田雀郎 (東京)  
中島紫痴郎 (長野縣) 大島壽明 (大連)  
坂井久良伎 (千葉縣) 相元紋太 (神戸)  
安川久留美 (金澤) 塚越正光 (臺灣)

梅本秋の屋 (東京) 堀口塊人 (大阪)  
昭和12年8月号発表と比べると、新たに蘭華、青龍刀、右近、秋の屋の4名が入り、藤本福造、齋藤旭映、和田天民子の3名が抜けている。

昭和15年12月19日、東京で日本川柳協會の創立総会が開かれた。「綱領」に、「一、国民文学として健全なる川柳詩を創作普及し、以て日本精神の昂揚に努む。一、川柳詩を通じて時局下国民生活の向上明朗化を期す」とある。委員長は前田雀郎、常任委員は、村田周魚、川上三太郎。(川柳きやり五十五年史) 参照)

「番傘」昭和16年2月の「日本川柳協會結成」には、〈川柳詩本來の使命に鑑み、新文化體制の一翼として國策に協力すべく、かねて準備を進めてゐた全川柳團體統合の企ては、内閣情報局並に大政翼賛會文化部の後援を得て、こゝに「日本川柳協會」として結實、昭和十五年十二月十九日、歴史的その發會式を開くにいたつた」とある。当時の日本の状況を見ると、9月27日には日独伊三国同盟を締結し、10月には大政翼賛會が発足している。

これに対して、路郎は「川柳雜誌」昭和16年1月号の「川協のページ」で、次のように述べている。

〈東日の報するところによると、東都の川柳界が長年、井上派、坂井派等と對立してゐたが庶民文學としての役割の重要性に鑑み、この程東京廿四吟社を網羅して日本川柳協會を結成し十九日午後三時、日比谷松本楼でその發會式を舉行した。新に生れた日本川柳協會の名と我が川柳人協會とは三矢サイダーと三葉サイダーほどにまざらばしい會名であるから會員諸氏の御留意を乞ふ。〉

2月号には、〈東京では日本川柳協會を結成したが各吟社の合同でなく曾ての京濱吟社聯盟の延長に類するものと噂されてゐるだけに各地に於ても東京にならへと笛吹けども踊らず、僅に神奈川縣下の柳人が隣地だけに呼應、目下のところ大阪の一部、朝鮮に多少の便乘的動きを見せてゐるに過ぎない〉とある。

路郎は、〈目下のところ大阪の一部、朝鮮に多少の便乘的動きを見せてゐるに過ぎない〉と述べているが、大阪は支部結成に向けて積極的に動いていた。堀口塊人は「昭

和川柳」昭和16年2月号「日本川柳協會の全國化」で、次のように述べている。

（昨年末東京に於て結成された日本川柳協會を全國化すべき當局の要望により、名古屋以西の地域は大阪に於てその事務を受持つ事になった。先づ、會員十名以上の團體は各府縣に於て支部を結成し、それを西部本部に統合する豫定である。大阪支部は、番傘、川柳春秋、天守閣、赤煉瓦、つるはし、及び我が昭和川柳社とその各分會代表者を會員として近く發會式をあげるはこびとなつた。（中略）なほ、西部統合の準備委員は、岸本水府、楳元紋太、本田溪花坊、森雞牛子、小西落丁、近江砂人、山下城兒、清水良祐、市川御舟、堀口塊人の十名をもつてその事務を進めて居る。）

そして、2月に大阪支部が結成された。「番傘」昭和16年3月号「日本川柳協會大阪支部結成」（麥魚記）に、（前略）昭和十六年二月二日大阪市芦池衛生組合事務所に參集せる全府下三十九團體約六十名の代表者は、東部本部より常務委員前田雀郎、川上三太郎兩氏の來阪を迎へて、創立總會を舉行し茲に全くその機構を整へ得ることになつた」とある。

役員には、常任幹事に、岸本水府、本田溪花坊、堀口塊人、森雞牛子の4名。幹事は、栗原空栗、永先芽十、小田夢路、近江砂人、生島鳥語等11名。會計書記は、市川御舟。評議員は、小西落丁、松盛琴人（昭和8年12月まで川柳雜誌社に所屬）、八尾緑波、小島祝平、木下愛日、田中南都、金泉萬葉等34名。会友は、花岡百樹、西田当百、渡邊紅衣の3名。計53名。

参加団体（代表者を括弧内に記す）は、番傘川柳社（水府）、昭和川柳社（塊人）、媛柳川柳社（鶏牛子）、三越天守閣（空栗）、大大阪川柳社（溪花坊）、赤煉瓦川柳社（緑波）、愛国川柳社（琴人）等37団体。

これに対して、路郎は「川柳雜誌」3月号で、次のように述べている。

（日本川柳協會大阪支部の發會式が二月二日に舉行された。郵乘主義の人々や獨善主義の人々によつて、誇大に報告されてゐるが、僅々五十餘名の集合に終つたつらしく、出席者の殆んど全員が役員の形である。台湾の某氏では三十餘團體が參加したやうに報ぜられてゐるし、\*1大阪の某誌では柳團代表六十餘名參集と報じてゐるが、

六十柳團は愚か\*2三十餘團體が、大阪の何處に存在するのか、團體代表として役員になつてゐながら、團體を有しない代表者などもゐるとか聞かされては啞然たらざるを得ない。まあ大阪の體面を汚さぬだけに育成して貰ひたいものである。

日本文化運動に黙々として精進し、健實なる歩みを續けつゝ、ある我が川柳人協會員並びに川柳雜誌社系の人々は如上の大阪支部には參加してゐないことをこゝに附言しておく。）

\*1「番傘」昭和16年3月号「あれから」（耕夢記）に、「日本川柳協會」大阪支部結成式は大阪府下の柳團代表六十餘名出席」とある。上述したように53名であつた。

\*2 団体数は、上述したように37団体。小さな句会もたくさん混じつていた。それを団体などと呼ぶのはおかしいと路郎は言つてゐるのである。

路郎は大阪支部創立に忸怩たる思いを抱いたのだろう。この号の「社告」に、「川上三太郎、前田雀郎兩氏を社規により客員名簿より抜く」とある。（次号に続く）



(投句207名)

家に居ることが当たり前になってから二カ月半が経ちました。

この間に不要な物の整理でも、と思えば思うほど物が増えていく不思議、世にいう断捨離なるものを皆さんはどのよう

に実行されているのでしょうか。

自分の能力の無さにつくづく恥じ入るばかりですが、とにかく目標が有るだけマシと開き直っています。

では、ナビです。

神戸市 奥澤洋次郎  
春つらら電話も鳴らず人も来ず

(評) 本来なら独りを満喫出来る春の一日、というところでしようが、今年は密を避けるための独りかも。

堺市 矢倉 五月  
煩惱を振るい落してまぬけ顔

(評) ああ、そうかも知れないなあ、と

思いました。煩惱が無ければ眉間のシワも必要ありませんものね。

富士見市 中島 通則  
始まりは東村山音頭です

(評) 新型コロナウイルスで、あつという間に亡くなった志村けんさん。とっさに歌ったというこの音頭から人気者に

大山市 金子美千代  
可愛いおばあちゃんとなりません

(評) 「いじわるばあさん」のマンガ、気概があり浚刺としたばあさんに見えてくるのは、歳のせいでしょうか。

西宮市 福田 正彦  
七転び八起きは僕のスケジュール

(評) あれれ、七回転んでも八回起きるのは努力の賜物ではなく、只のスケジュールだったのですか。

神戸市 松倉 正美  
巣ごもりでぶら下がり器の出番です

(評) 家に籠もって一通りの瑕つぶしをやつて、ふと思いついたのがぶら下がり健康器、よく取つてありましたね。

羽曳野市 徳山みつこ  
沈めても嘘はボカボカ浮いてくる

(評) プカプカと浮いて来るのではなく、ボカボカがいいですねえ。本当に嘘っぽい擬音です。

鳥取市 夏目 一粋  
幸せに見せないように気を配る

(評) ネタミヤシットの対象にならない

ように、人様には幸せに見えないように気配りをする。でも、ちよつと寂しい。

河内長野市 梶原 弘光  
何処からお呼び無いけどスクワット

(評) 一つお呼びが掛かってもいいように日頃からの鍛練が大切、この心構え、きつと花開きますように。

米子市 吉田 陽子  
もう少し乾けば私らしくなる

(評) 乾く、の意味をあれこれ考えました。物事をドライに割り切れたら、あるいは、この涙が乾いたら、かな？

笠岡市 藤井 智史  
それがどうした人生逆さ富士

黒石市 北山まみどり  
ひとりでも平気よ風とにらめっこ

香芝市 大内 朝子  
出来るまで何がなんでも逆上り

奈良市 山本 昌代  
僕はだれ知っている人いませんか

丹波篠山市 澤 良子  
この仕事筋肉痛が耐えません

尼崎市 藤田 雪菜  
免疫がなくて傷つくのが怖い

防府市 坂本 加代  
ふとん干し出来る田舎にお引つ越し

米子市 坂本 蜂朗  
恐くないよ君より恐いモノがある

唐津市 坂本 蜂朗  
乾されても首さえあれば大丈夫

羽曳野市

吉村久仁雄

地に足をつけて堂々惚けている

松山市 郷田 みや

裏側であっかんべーをしてたのね

大阪市 石橋 直子

高いハードルならくぐればいいのよ

土佐清水市 辻内 次根

解散の虫がごそごそ働きただす

神戸市 富永 恭子

命よりおもねるものが有るらしい

弘前市 高瀬 霜石

上昇志向 外野は野心などと言う

松山市 大内せつ子

バームクーヘンにあこがれ待っているけれど

米子市 池田 美穂

高とびの覚悟を持ってとぶ段差

佐賀県 真島久美子

クラスタール発生助走短めに

大阪府 小川賀世子

小っちゃいな友達一人裏返す

三田市 谷口 修平

外国の牛が支える牛丼屋

西宮市 緒方美津子

もう一度会いたい山小屋の主

松山市 柳田かおる

ブレーキが効かなくなつた有頂天

大阪市 石田 孝純

ふわんふわんへリウム吸って無重力

箕面市 酒井 紀華

継続は右も左も自由自在

三田市 堀

正和

休校のひとり遊びに飽きぐるる

岡山市 永見 心咲

柄物用の漂白剤は苦手なの

三原市 鴨田 昭紀

去年まで出来ていたのに逆上がり

豊中市 松尾美智代

逆転を狙い挑戦する夕日

樺原市 居谷真理子

時々は陽に干している腹の中

鳥取市 池澤 大鯨

ギロチンにかけてやりたい首がある

藤井寺市 鴨谷瑠美子

ゴシック体みたいな夫に連れ添うて

大阪市 坂 裕之

この線を越えてもやつと世間並み

富田林市 片岡智恵子

星月夜胸のつかえを振り払う

唐津市 山口 高明

背くかも知れぬあなたの影法師

奈良市 大久保眞澄

総理のアカは洗っても落ちません

大阪市 田中ゆみ子

逆あがり夕陽はみんな知っている

鳥取県 斉尾くにこ

やわらかく変わる常識非常識

弘前市 福士 慕情

太陽へ私を干して灰汁を抜く

鳥取市 田中 天翔

久々の洗濯日和寝ておれぬ

大阪市 寺井 弘子

おでんホクホク居酒屋の椅子みな温し

横浜市 川島 良子

おとつとポクを転がす春一番

松山市 栗田 忠士

なりゆきに任せる外はないのです

高槻市 松岡 篤

ああ昭和物干しまでも温かい

神戸市 山崎 武彦

遮断機の向こうはきつと花野だろ

吹田市 山本希久子

老婆でもただの老婆じゃありません

大阪市 高杉 力

眺び越えてみれば景色が変わるかも

貝塚市 石田ひろ子

担がれてあげよう君が好きだから

寝屋川市 川本 信子

忠告を聞くべきだった酒タバコ

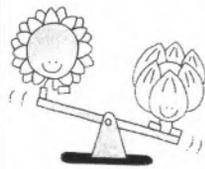
和歌山市 古久保和子

着地してから次の手を考える

東京都 川本真理子

仰向けになると漂う雲になる

8月号発表 (6月15日締切)



(平本 霧石人 画) 柳箋に2句

## ひとひらを力に

岩崎 眞里子

雪の少ない冬だった。梅も桜も引き連れ、春が早足でやって来ると思っていた。川柳界も元気にスタートしたはずだった。でもその裏で広がっていた新型コロナウイルス。中国の惨状はニュース等で知っていたがウイルスは予想以上に速く見えない脅威となって拡散。3月12日WHO

がパンデミックを表明し、日本中の学校が休校になった。オリンピックは延期となり、大小を問わず集会は自粛、卒業式も入学式も時短縮小された。全日本川柳秋田大会は延期に、句会は投句となった。

検査態勢やクラスター対策等不安や不信が渦巻き、医療現場は過酷さを増していた。そして弘前桜祭りも中止となり、公園内に立ち入らないよう封鎖された。

そんな中でも、すがる何かを求めて、指を折り言葉を探していた。

4月初め、封鎖される前に……と想って

弘前公園を訪れると、まだ硬い蕾の枝先を見あげている人達があちこちにいた。たぶん桜に会いに来た人達である。

弘前の桜には思い出がたくさんある。

高校の美術の時間は祭り期間でも公園内をスケッチしていた。記憶の底には今も桜の季節終盤の景色がある。突風が吹くと校舎の中庭に積もった花びらが地吹雪の如く舞い上がり、みんな歓声をあげて見とれていた。勿論、先生も。

児童指導員として勤務した頃は自転車公園を通った。早朝、開花直前の蕾達

が交わす声も楽しみに色づいていた。

夫の転勤で弘前に住んだ事もあり子らの記憶にもあったようで、弘前の桜祭りを見せたいと家族連れで来た事がある。でも3歳の孫娘は射的と水笛に心ひかれ、桜には目もくれない。それが帰りに、ひらひらと舞い散る桜のひとひらを、小さな指先で懸命につまもうとしていた。咲き誇る花邑より、花のひとひらの方が心親しく感じられたのだろうか。

ここ数年桜のトンネルを歩く人混みの中で老夫婦に目をやる事が多くなった。今年も来る事が出来たという姿である。

私も幾度か桜に逢う事を目標にした日々がある。また来年も……と心から願う。

病める時も健やかなる時も、桜はいつだって人を待っていたように双手を広げて咲く。母の終章を覚悟した日も、一邑の桜を頬に押し当てて二人で季節を祝った。そしてあの震災の時も、例年のように咲いた桜に励まされて私達は自分を取り戻すことが出来た。

4月上旬、緊急事態宣言が出されたが私達は知っている。施策や政策がウイルスに効くのではないと。自分で自分を守り律することが、今最も大切なのだと。そう言い聞かせながら、ひとひらを探し求めるように575と指折っている。

誰にも逢うことなく咲いて散る今年桜を思うと、ひとひらは泪となって心の中へと舞っていく。儚く頼りなく舞い散るひとひらの姿が、先の見えない暗く重苦しい心の中にいつまでも消えずにある。ウイルスの終息を願って舞うひとひらは、ほのかに灯る祈りでもあるのだ。

今日、手作りマスクの隅に、淡い桃色の糸でひとひらを縫い取ってみた。



# 老也ゆづり

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります。  
楷書で誤字のないようお願いします。  
編集部

## 川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

火葬場で燃やしておくれこの日記  
投げキッス孫からもらいとろける爺  
油断召されるな九回裏がある  
諦めちや終わり命も幸せも  
定年の日も片減りの靴で出る  
ずるずるとモップのような犬を見た  
誤字脱字日記に学ぶ物忘れ  
仕事投げ自由の道を進む蟻  
種袋どんなドラマを生むだろう  
ひらがなの文字を握って笑うのみ  
泣いた日の涙の跡がある日記  
字が踊り不満伝える子の日記  
続かない三日坊主の我が日記  
しょぼくれた人生それもまた人生  
育児日記巣立った子等の置きみやげ

隆 樹  
初 枝  
則 彦  
のぶよし  
黙 人  
真由美  
柳 子  
ふさゑ  
あ  
花 峯  
きよし  
孝 子  
重 虎  
霜 石  
洋 子

## 川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

コロナ菌するざる詠める世界地図  
匙投げた付けが回って金縛り  
ナマコ捌く時はドクターXよ  
神仏の前では弱い僕の顔  
打ち易い緩いボールを子に投げる  
相槌を打ってくれます日記帳  
滑ってもこの世が好きでしがみつく  
一言が未だ引き摺る離婚劇  
政治家のキャッチボールが下手過ぎる  
変化球のえびせんキャッチしたカモメ  
日記を書く習慣つづき半世紀

降るほどの縁談あったが友いかず  
長々と雨降る県の子れです  
世の流れ早いキョロキョロ付いていく  
春日和キョロキョロ外へ出かけた  
聞き慣れた話今日も始まるテイの部屋  
無観客相撲解説慣れてない  
慣れたのか爺の膝でも安心し  
反省も慣れると頭すぐ下げる  
慣れたころ初心忘れて大事故に  
貧乏に慣れて人生謳歌する  
増える空き家暗い隣も慣れました  
慣れた手で夫を三枚下ろしする  
平和慣れ戦は過去と甘き事  
慣れた靴で行こうこの先けもの道

悦 子  
富 隆  
清 江  
公 惠  
美知江  
義 人  
貴 惠  
翡翠子  
滋  
紀美惠  
龍 枝  
三津子  
恭 子  
みゆき

## 和歌山三幸会 西川 千鶴報

高卒の末っ子が継ぐ梅農家  
光るもの見つけるまでの無駄を積む  
心して今日という日を積み上げる  
下積みの頃の素うどん旨かった  
梅見などとんと無縁の梅農家  
ばりばりと四方山話する駄菓子  
一時の安心貰う平均値  
白梅は凛と美人の佇まい  
これ以上積みめは零れる宝物  
おとほけはいつもの事であるけれど  
神の加護雪降り積もるスキー場  
大丈夫のひとつ胸に灯をともし  
隣家から梅の香りのお裾分け

慣れた手で魚影めがけて打つ投網  
登下校見慣れた景色コロナ消す  
箱庭に我が家の希望夢託す  
政治家はダンボール箱が金庫  
箱入りの新酒送って春近し  
これ以上生きると箱に入れられる  
パンドラの箱こじ開けた新コロナ  
箱物のこれから先が負の遺産  
必ずや白木の箱に横たわる  
ちっぽけな箱に人生閉じ込める  
宝石箱に鎮座しているイミテーション  
寂しさに慣れて自由になれました

昇  
智 三  
保 州  
和 子  
日出男  
純 子  
ひろ子  
俣 子  
八重子  
准 一  
まき  
敏 照  
起世子

耕せばきつと結果がついてくる  
 苦しみを積んだ重石が味を出す  
 安らげる場所があるから羽ばたける  
 身だしなみいつもバツグに糸と針  
 未知数でいつも溢れている瞳  
 穴だらけの野菜はいつも先に売れ  
 二人三脚いつも一緒に旅日記  
 よく跳ねる足で退屈など知らず  
 妥協した時から自分見失う  
 反省をするから夢は遠くなる  
 マンネリに山葵たっぷり塗ってやる  
 何も無いいつもの今日がありがたい  
 梅干しを葉代わりに食べてます  
 梅一輪冬の小言を消してゆく  
 マイウェイを唄うと勇氣湧いてくる  
 壮行会いつもアルプス登った気  
 梅一輪帽子に挿して一万歩  
 靴下をいつも立って履けたのに  
 一善を恩返して床につく  
 おおらかさ積むと確かに敵は減る  
 紅梅へ母のベッドを向けてやる  
 友情に埃積もっていませんか

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

当代 一雄 菜摘 宏枝 幹子 かず子 照枝 美枝子 富香 理恵 知香 よしこ 康則 あき子 明子 眞智子 悦男 俊介 ダン吉 彦弘 義泰 千鶴

入浴後ワックスかけるかゆみ止め  
 各行事将棋倒しとするコロナ  
 川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報  
 ご挨拶まずウイルスの話から  
 私を忘れた人の背を撫でる  
 見えぬ菌人の生活掻き乱す 善輔  
 苦勞して期待どおりの黒豆の出来  
 期待して育てた子供普通の子  
 ひな人形孫はいないが出してみる  
 鉄欄に集うスズメの情報会  
 氣苦勞も忘れ笑顔の日々送る  
 今頃は母は田んぼで麦を刈る  
 終活も少し心に八十路生く

南大阪川柳会

松岡 篤報

やかましく言われなくなり見放され  
 うるさいが金出す時はそこに居す  
 うるさい妻がいなくて不安です  
 兄は秀才僕は落第ちぢこまる  
 定年と留年わが家大わらわ  
 去って行く後ろ姿が泣いてる  
 父さんが去り別の父さんやってきた  
 とにかくも去ってほしいのはアベさん  
 愚痴を言うたびに若さが去ってゆく  
 やさしさは別れの辛さ知ってから  
 辛い顔器の狭さ見抜かれる  
 廣幸 實 稠民 北哲 剛 重男 喜弘 良子 照代 美智子 篤報 国和 篤 実 ルイ子 柳右子 ばっは あや子 勝弘 楓 菜 ひさ乃 弘委智

伊達郁夫 選

三回忌そつとあぐらに組み替える  
 一日のドラマ吸い込む茜雲  
 今泣けば明日はきつと笑顔です  
 ビエロだとわかっていてもまた踊る  
 許すこと増えて仏と手を繋ぐ  
 景色だけ見れば住みたい里ばかり  
 あなたとは違う景色を見てる午後  
 磨かずに生きてきたから今の位置  
 わたしを磨く男の目女の目  
 沈む陽のオーロラは誰も掴めない  
 孝治 八重子 みつ江 夢香 八千代 芳光 しめの 勝弘 久美子 妙子

佳句地十選

(5月号から)

古今堂 蕉子 選

豊満にあつて肥満にない色気  
 あなたとは違う景色を見てる午後  
 磨かずに生きてきたから今の位置  
 沈む陽のオーロラは誰も掴めない  
 都合上忘れることにするきつと  
 仮払いのまま今生を終えそつな  
 辞めるのか君の代りはたんと居る  
 荒波を越えたんだろう顔の艶  
 景色だけ見れば住みたい里ばかり  
 折りより食が楽しい伊勢詣で  
 羽和子 しめの 勝弘 妙子 美枝子 游子 ゆみ子 瑠美子 芳光 一雄



腹減ってきたぞボカミスばかりする 久仁雄  
 昭和の友が一人減り二人減り シルク  
 ウォーキング100から7を引きながら みつこ  
 年老いた母がひっそり過疎に住む いさお  
 遅いママ一人残った保育園 ちづる  
 肩書を捨ててひっそり楽隠居 泰子  
 ひっそりとコロナ惨禍根付く中国 冬のト  
 ひっそりといくさの匂いしのびよる 専平  
 老いる程趣味を増やしてボケ防止 ひとみ  
 塩漬の株にも襲うコロナ風邪 久仁子  
 タイヤだと星空眺め思う夜 千鶴子  
 ほどほどに食えと夫から言われている かつ美

ふうもん吟社(鳥取)

山下 凱柳報

有料と書いてあるから安心だ 茂登子  
 立ち読みの医学書病重くする 毅  
 逆算をする余命はあと僅か 茶人  
 有料ホームヒマと孤独も付き物だ 由美子  
 立つ時に勢いくれるよっころらしょ 真理子  
 元氣よく立つて小走り年金日 野 蒜  
 文芸の頭脳さーで知恵かさぬ とも湖  
 百万円さーで来ると魔の電話 一 平  
 その昔恥をしたので米借りた 蟹 郎  
 傘かしげ気付かぬふりをするあなた みゆき  
 有料の酒は酔うほど金がある 一 粹  
 立ち上がるまでが長引く膝小僧 節 子

胸にまだ燃えるものあり絶やすまい (久)千代  
 かくし味耳かきほどの塩が決め 鐘 旭  
 散り際は花も私も深く 天 翔  
 間に立つ明かり求めて突っ走る 勲 章  
 うっかりとログインしたら請求書(門)千代  
 心のもやを立って歩いて解き放つ 紫 陽  
 印鑑の掃除して待つ良い知らせ 秋 月  
 縁薄れ借りた本だけ残ってる 恵美子  
 遠からず敬老会も有料化 妻 子  
 立つ位置によって異なるおもてなし 回春子  
 大家族たまにはスクラム息合わす 亨  
 ぼちぼちと薬の力借りて生き 幸 子  
 有料道路避けて帰省の遠回り 三千代  
 人妻は火傷するから触れませぬ 振 作  
 有料の愛は真つ赤な嘘も吐く 一 瑤  
 七変化泣くがさーでにえびす顔 八千代  
 地に足をつけてなんとか立っている 楓 花  
 桜待つ恋しい人を待つように 宏 章  
 生きいきて素直に嫁の手を借りる 桐 子  
 山陰を出れば道にも金が要り 白 兎  
 ウイルスに負けずに私は凛と立つ 金 祥  
 旅立った亡母の笑顔が夢枕 凱 柳

京都塔の会

山田 葉子報

本題に入る前コホン咳払い 英 旺  
 空咳でバスの席取るおばあさん 多津子

老人が増えバランスが崩れ出す ルイ子  
 荷を一つ下ろしバランス悪くなる 保 子  
 バランスの劣化悲しや夫婦坂 元 一  
 短気に暢気そんな夫婦でちょうど良い かずお  
 包みこみ育ててくれた塔の会 葉 子  
 ありがとう楽しかった塔の会 昭  
 風雅なる吟行惜しむ塔の会 昭  
 いささかの無念も残る塔の会 求 芽  
 繰り返す三寒四温に囲まれて 弘 委  
 三十六峰回む京都はわが誇り 楓 楽  
 吉田山から街を見下ろし腰伸びる 弘 之  
 いささかの挫折をバネに生き延びる 則 彦  
 いささかの自信老化を甘くみる 正 彦  
 二次会の少し不安な持合せ 欣 之  
 いささかの未練が菌切れ悪くする すみ子  
 塔の会囲み続けて来た絆 朝 子  
 色褪せたノレンと屋号つり合って 昌 乃

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

汗かいて恥かいて大人になって行く 鬼 一  
 汗かかぬ奴がでっかい顔しとる 石花菜  
 セロテープ落ちる貼り紙壁も汗 けいこ  
 老いてなお冷や汗かかぬ面の皮 日出子  
 暑い夏思い描くと汗が出る 道 春  
 卓球を汗が出る程今日はする さちこ  
 極楽へ行く日考えお念仏 紀美恵

お悔み欄見る度健康考える  
少子化の日本の未来考える  
考えても閃かぬ脳に苛立つ

考える脳もくたびれ知恵も出ず  
考えてコロナやつけりゃ世界一  
免許証返せば良いのに考える

コロナ菌人間様と知恵くらべ  
斜交いに構えて詐欺の電話聞く  
世の中を斜交いに見てひがむ老い

背中に擽しっかり掛けて大掃除  
斜めから裏から値踏みされている  
斜交いにマリリンモンロー来て座る

斜交いに組めば槽も丈夫です  
斜交いに組めば槽も丈夫です  
斜交いに組めば槽も丈夫です

ほたる川柳同好会(大阪)水野

骨のある人の意見と思えぬが  
頬緩め骨までしゃぶる魚好き

萩江

重忠

風露

智恵子

康子

茂夫

祐子

麦青

由起子

龍枝

宣子

郁子

子育てに骨折る親の無償愛  
鯛の小骨小癩に喉で遊んでる  
検診を受けて安心まず一杯

忠告は受けるが耳を通り抜け  
エブリルフルの嘘が笑い合う  
バンドラの箱から始まったコロナ

バンドラの函の中味は時と金  
日行動気力体力あふれた  
旅先で美人がくれた玉手箱

バンドラの箱にリボンをどう締める  
純子

木引き戸昔ながらのやさしさよ  
大切に育てた花をおすそ分け  
奥様を大切にしておすそ分け

突然に顔をしかめて仮病する  
妻が逝き吠え面見せた頑固爺  
前向きに押せば心の戸が開く

テレビ見て吠えても何も届かない  
恩返し年忌供養は欠かさない  
戸口からオーイ居るかと過疎の村

吠える人いつも先頭で吠え捲る  
突然のコロナ倒産誰恨む  
ベイベイと気やすく唾を吐くように

突然にスマホが故障狼狽える  
無観客大相撲には違和感が

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

奈津子

一弥

正子

黒兔

則彦

春代

守啓

桂子

順子

純子

英子

静恵

胸の戸は甘い投資に弱かった  
還元セールよりも減税待ち望む  
官邸の犬は吠え方忘れたか

票になる大切な人花の下  
割り戻し五パーに勝てずキャッシュレス  
序列つく大切なのはミケが上

ウォーキング突然雷雨濡れ鼠  
スマホに吠えてる銃口は後ろだ  
自死ではいけない生きろと吠え続け

死んではいけな生きろと吠え続け  
突然に笑いを消したコメディアン  
ここらでは戸を閉めないで寝てました

大切な物を他人はゴミという  
九十九才大切な物ありません  
反応がない声を荒げて吠えている

ウイルスが還元セール消してゆく  
突然にコロナウイルスお隣に  
大切なこと言い忘れ悩んでる

かおる

草文

草文

草文

草文

草文

一平

ゆり子

綾子

恒

宣子

好幸

照彦

孔美子

茶子

小鹿

すみれ

盛桜

川柳塔さかい(大阪)内藤 憲彦編

あくせくの汗は希望を抱いている  
あくせくします喜ぶ人がいる限り  
あくせくする妻にのんびり構えてる

親のあくせく知らぬワイキキハナムーン  
昭和平成あくせく生きて努力賞  
いつでもいいよと上司がまた急かす

朝子  
扶美代  
八千代  
五月  
輝子  
憲彦

入学に生まれた時を思い出す  
 憧れの入学式もだめになり  
 大学まで四回祝いさせられる  
 入学はしたが卒業忘れてる  
 生涯の友と出会った滑り止め  
 少子化が救うボーダーラインの子  
 一年生かわいいという二年生  
 女子高に行けたら僕は水泳部  
 騙された振りて楽しく老いてゆく  
 騙されてくれて褒められ蠟細工  
 一病を騙しだまして生きていく  
 騙されてあげるかわいい嘘だから  
 騙されていても幸せです私  
 五〇年仮面夫婦はまだ佳境  
 いい嘘がつけた病室あとにする  
 入学式卒業式もない今年  
 コロナ禍で門をくぐれぬランドセル  
 入学は未曾有の年と語り草  
 孫入学爺の懐寒くなる  
 入学式見届け散つていく桜  
 入学に母の手作りワンピース  
 狭き門くぐった孫をほめてやる  
 大高中いよいよ田圃売らなくちゃ  
 遠いからオックスフォード辞退する  
 菜の花にルンルンつばめ子沢山  
 何となくルビー婚まで漕ぎ着けた

さくら 廣子 勝弘 としお 憲 玄也 敏治 時雄 富美子 美津子 ゆみ子 堅坊 みつ江 志津子 みつこ 舞夢 満作 妙子 光雄 雅美 瑠美子 唯教 ばっは 蕉子 雅明 ひろ子

ナイスラン壘上駆ける好プレー  
 泣くまいと涙腺抑え休えてる  
 亡き父のルーベが眠る小抽出し

敬子 いさお 倅子

胸の中悩みを流す風を待つ  
 恐れ知らずか無知か無防備富士登山  
 介護するされるとどちらもういばら道  
 防衛戦地球の敵はコロナ菌  
 眉だけを引いてマスクのお買物

三和子 ともし 幸彦 隆彦 孝代

長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報

家にいよ運動せよと言いつ聞かず  
 行くべきか迷い断ち切る稲光  
 すぐばれる目が笑ってるすぐわかる  
 果にこもり自粛のうちに散る桜  
 晩酌は健康考えつつましく  
 まかせときお世話しますよ妻だもの  
 出来るならタイムスリップあの頃に  
 父母の情手元足元照らす愛  
 もう一人の自分が裾を踏んでいる  
 キヤッシュレス手元にあるのは小銭だけ  
 鮮やかに最後きめたいピンコロリ  
 AIにまかせてみたい家事雑事  
 淡い恋にがい卒業大人です  
 スーパーマンまん丸だけで褒められる  
 関白の威厳が消えた床柱  
 CDの山掛け替えない青春譜  
 最強のウイルスきつとあなただです  
 本気かよマスク二枚で国守る  
 コロナじゃないカフン花粉と咳くマスク  
 ×印で埋めつくされたカレンダー  
 時々はマスクを外し深呼吸

敬子 いさお 倅子

敬二 たけし 光弘 ゆき弘 旅人 ふみ直樹 純風 孝

洋二 千代 隆明 規之 澄子 おくみ 登美子

お一人の湿布貼る夜は皴になり  
 何故コロナ同じ地球で何故騒ぐ  
 目の手術無事に終わってほっとする  
 収束を願ひ静かに手を合わす  
 花吹雪浮かべて飲んだ冷や一献  
 県外の方は玄関開けません  
 日野川の遊ぶカモさえ距離確保  
 歩きなさい誘ってくれた青い空  
 本でなく二宮読みでスマホ読む  
 守るもの少なくなつて守られる  
 ひと言でみんな自粛の気味悪さ  
 気取らずに興味大事にと指を折る  
 パンデミック私の頭上飛んで去り  
 ウイルスの声は総理が聞いている  
 阿呆な事言つて笑つて若くなる  
 迂回して安全な道行きすぎた  
 魚・肉あるが店の名は「てんぞ」  
 世の中が落ち着くまでは寝る  
 ああで無いこうでもない日が暮れる

菜々 久直 美草 宣子 汪 美穂 瑞枝 多美子 恵子 俊久 雨奇 治代 日枝子 博毅 令位子 美緒 宏之 千代 紀の治

句会名	日時と題	会場と投句先
八尾市民 川柳会	14日(日) 14時締切 白夜・あしからず・渡る・雑詠	八尾市安中町3-5-1 渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	14日(日) 14時10分締切 兼題=育てる・赤・ホテル 課題吟=言葉	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
南大阪 川柳会	15日(月) 13時30分締切 舞台・走る てんやわんや(読み込み不可)・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901 松岡 篤
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時50分締切 応援・詰める・ぐっと・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	中止	連絡先 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	17日(水) 13時45分締切 席題・地獄・広げる・自由吟	立花北生涯学習プラザ(尼崎市塚口町3-39-7) 06-6422-6741 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 みちのく	20日(土) 17時締切 足す・さわやか・背	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	21日(日) 14時締切 席題・黒字・雲行き・坂道 自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川市駅から徒歩15分 または京阪バス市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	21日(日) 14時締切 ファンタジー・酸っぱい 席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
川柳塔 すみよし	27日(土) 14時15分締切 途中・浮く・くつきり	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	27日(土) 13時15分締切 駅・恋・そこそこ	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民会 川柳会	投句句会(予定) 火花・問う・プレーキ・席題	連絡先 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 13時から 自由吟・ルーツ・ゆったり・招く 席題	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥

★「緊急非常事態宣言」後、各地句会の変更が予想されますのでご承知ください。

## 6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	誌上句会 締切ました	連絡先 〒633-0054 桜井市阿部787 安土理恵
川柳 とんだばやし 富柳会	6日(土) 14時締切 足・込める	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
倉吉 川柳会	6日(土) 14時締切 牛・すんなり・行く・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ 吟社	6日(土) 13時30分締切 大胆・自慢・つぶやく・伝統	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
西宮北口 川柳会	8日(月) 14時締切 楽しむ・家・ぼつり・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレラにしのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
川柳塔 さかい	8日(月) 締切 我慢・雨・あいまい・折句・やいた	投句句会に変更
ほたる 川柳 同好会	9日(火) 13時30分締切 紙・やめる・しっとり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳 あまがさき	9日(火) 14時締切 節約・指・じとじと・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
城北 川柳会	投句句会 締切10日(水) 塩・苦い・タッチ・互角・自由吟	連絡先 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
あかつき 川柳会	12日(金) 14時締切 ドラマ・天・承諾・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
岸和田 川柳会	12日(金) 締切 雨・島・移る・さっぱり・ランプ	投句句会に変更
川柳大阪	13日(土) 14時締切 ほんま・焼く・川	メトロ・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	13日(土) 14時締切 席題・息・弱い・叩く 自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打吹	13日(土) 13時30分締切 指・焦る・うかうか・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局

# 編集後記

★折り畳み傘にわたしもなりそうぞうで 薫風

★3月4月5月6月と句会が中止。「ステイホーム」や「おうちに居ようよ」の呼び掛けに、外出も儘ならないこの頃、川柳が生きた甲斐であったと痛感された方も多いのでは。新型コロナウイルス感染症の収束の見込みが立たない中、7月の路郎忌句会は誌上句会として開催される。(詳細は97頁)これまで本社句会に参加されなかった方々もぜひ投句されますように。

★「葦群」梅崎流青さんのご厚意により木津川先生の「大阪を再び文学都市に」を転載させて戴いた。副題は「川柳の役割に期待して」。大阪谷町西鶴、近松門左衛門の墓や、小さいながらも直木三十五記念室もある。か

つての文化都市大阪復活のために私たちに何ができるか、考えてみたい。

★駅や空港に置かれた一台のピアノから流れる旋律。足を止めて聴き入る人、通りすがりの電動椅子の男性が思わずハーモニカで伴奏をする。入れ代わり立ち替わり人が来てピアノを弾く。通勤路上のミュージシャンを目指す高校生、学会出席途中の大学教授、夢破れて故国へ帰る人。ピアノは人を引き寄せる。音楽が暮らしたに根差し身についているのであろう。語りかけるように、愛しそうに、微笑みながら弾く。

★「音楽に国境はない」オランダのユトレヒト駅での旅人の言葉。コロナで国境が封鎖される今、重く心に響く。「ピアノを弾くことは私にとって逃避」は美しく落ち着いた中年女性の言葉。ふと人生が覗く。

## ひとつこと

### 世直し川柳

川柳を本格的に始めて13年になります。川柳塔へは平成22年9月から誌友になり、今に至っています。

若い時から反骨精神があり、川柳を趣味にするといじやないかと思ひ、自ら思いつき始めたけれど、よくスランプに陥ってしまします。

そんな私ですが、令和2年1月末日にインターネット美術館に、「世直し」を中心とする川柳100句を掲載することができた。30余年

来の私の夢である世直しである。平和な世界と、人権の尊重を主なねらいとする世直し川柳です。

塔誌にも載った句もあり、喜寿を記念し句集の代りにと、仲間のお勧めもあって実現しました。インターネットやスマホで、ギャラリー華美絵まは、私の名前前でアクセスして見ることが出来ます。「世直し」というテーマを扱っていることが特徴です。

皆様のご協力を得て、世直しの夢を叶えたい。(黒目ひでお)

ピアノと向き合うと人は、自分に素直になれるのだろうか。NHK衛星放送「駅ピアノ」「空港ピアノ」はコロナで自粛の身に、やさしく寄り添い慰めてくれる。

(朱夏)

□コロナ禍で3月ほどの句会も中止。4月は休会、もしくは投句句会になり、その結果、毎日3食昼寝付き、おかげで1キロ肥え、毎月のお小遣いが少

し備蓄できた。5月句会介されていた。

○路郎川柳であること。

○新鮮味があること。

○世の中の悪口を言わぬこと。

○理屈を言わぬこと。

○マンネリズムにならないこと。

「私の川柳・姿勢」からと、先ず一番に梅志先生の秀句鑑賞を読む。凄く読

み応えがあったと書かれ、幸主幹の選もこの「戒律」を柱にされているのかも。

に当たつての「戒律」を紹介 (勝弘)

# 川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 -	  	

○ ○

年 年

月 月

から から

一年 半年

9800円 5000円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201  
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

## お知らせ

収束の見込みのつかぬ新型コロナウイルス感染症拡大のため6月8日の本社句会  
は中止です。  
皆様お疲れのことと拝察しますが  
お大事にお過ごしください。

## 作品募集

8月号発表(6月15日締切)

川柳塔(8句)	小島蘭幸選
水煙抄(8句)	川上大輪選
愛染帖(2句)	新家完司選
檸檬抄「浅い」(2句)	水野黒兔共選
イノスピレーションナヒ(2句)	鴨谷瑠美子選
一路集「招く」(2句)	大西泰世選
一路集「散歩」(2句)	松岡篤選
初歩教室「洗う」(3句)	松原寿子選
初歩教室「洗う」(3句)	居谷真理子担当

初歩教室「洗う」は9月号発表

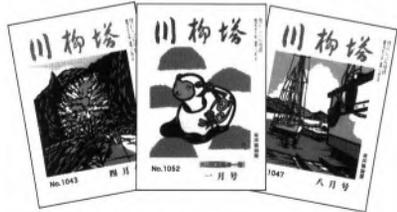
9月号  
檸檬抄「起伏」  
一路集「まろやか」「サイン」  
初歩教室「バラバラ」

7月路郎忌句会は誌上句会です  
詳細は89頁参照のこと。  
兼題「懐」「ひんやり」「不可」  
「欲しい」「たわむ」「階段」

## 川柳塔柳箋

3冊 送料共 1,000円  
事務所あてお申し込み下さい。

川柳・俳句・エッセイ・小説  
新聞・広告・ポスター・伝票等  
あなたの思いをかたちにします。



## 美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10  
TEL (06) 4800-3018  
FAX (06) 4800-3028  
E-mail : bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円(送料100円)  
半年分 五千円(送料共)  
一年分 九千八百円(同)

二〇二〇年(令和二年)六月一日発行

発行人 小島和幸  
編集人 木本朱夏  
印刷所 美研アート

〒543-0052  
大阪市天王寺区大道一丁目一四一七  
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社  
電話 〇六六七九一三四九〇番  
振替 〇〇九八〇四一四二九八四七九番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、  
香ばしい薫り。舌と記憶に  
しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

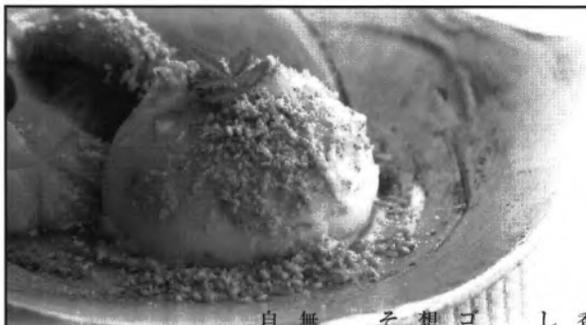
想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールス  
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし  
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

## 医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科  
緩和ケア（ホスピス）  
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>